

人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」
「地域における歴史文化研究拠点の構築」ユニット活動成果報告集

地域文化研究フィールドノーツ 2

物質文化を救う意味―気仙沼市小々汐の現場から―

地域文化研究フィールドノーツ 2

物質文化を救う意味

―気仙沼市小々汐の現場から―



物質文化を救う意味

— 気仙沼市小々汐の現場から —

目次

はじめに	4
小々汐大家・尾形家	7
家財を集める	15
モノがもつ情報	32
語りへの注目	36
失われる風景のなかで	44
資料編（横書き）	149
資料編について	148
第一報	145
第二報	144
第三報	142
第四報	140
第五報	136
第六報	132

第一五報	第一四報	第一三報	第一二報	第一一報	第一〇報	第九報	第八報 (原稿の原本)	第八報	第七報 (原稿の原本)	第七報	第六報 (原稿の原本)
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
84	90	94	98	102	106	110	115	117	122	123	129

第二七報	第二六報	第二五報	第二四報	第二三報	第二二報	第二一報	第二〇報	第一九報	第一八報	第一七報	第一六報
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
48	50	52	54	56	58	60	64	68	72	76	80

● はじめに

このブックレットは、国立歴史民俗博物館（以下、歴博）の民俗研究系の職員が中心となって、東北地方太平洋沖地震のあと、宮城県気仙沼市小々汐の尾形家住宅を対象として実施した家財の収集・保全活動の記録であり、その記録から被災現場において物質文化を残す意味を検討することを目的としたものである。

最初に断わっておくが、本ブックレットに載せた記録は文化財レスキュー活動の成功の記録ではなく、失敗の記録である。被災地においての活動が多くは初歩的な失敗を伴うものであり、失敗を検証しておくことは後学のために重要だと考える。

災害の年、二〇一一年四月から今日まで、私たちは継続的にこの活動に携わってきた。歴博が気仙沼市小々汐で行なった活動は、個人住宅を対象としたものであり、個人財産としての家財を対象とした活動であった。家財のなかには、過去に使っていたであろう民具のほか、コンピュータゲーム機や介護用の椅子など、現代の「民具」も含んでいる。

こうした活動は、一見すれば、個人の財産を保全するものであって、地域や公益性という側面からみると、国立の

博物館が実施する活動内容としては対象が個人に偏りすぎているように見えるかもしれない。私たちの活動は私たちの館内でも「文化財レスキュー」という枠組みのなかに位置付けられており、公的な活動として性格づけられていた。そうした背景からすると、個人の住宅を対象とすることはいかにも不可思議に思えるかもしれない。

しかし本稿のなかで詳しく述べるが、個人の住宅は地域のなかで人と人をつなぐ結節点として機能している。したがって個人住宅の家財を救って、その中身を整理して残すことは、個人あるいは一族を起点とした地域の有り様を検討する材料を残すことになる。

言ってみれば、フィールド調査とこのブックレットで扱う気仙沼市小々汐の活動には類似性があるとも言える。フィールド調査では、個人のライフストーリーや行動を記録し、それをサンプルとして地域の人びとの暮らしぶりや暮らしのなかにある社会的な規制を明らかにする。同様に、このブックレットで扱う活動は、個人住宅の家財を収集し、それらをサンプルとして、地域をより深く知るためのきっかけとして用いて、地域の生活文化を研究することを目的としたものである。

二〇一一年当時の文化財レスキューでは、その活動の意

味を問うよりも、どれだけ救うかが課題となっていた。當時は災害後の限られた時間のなかで、どれだけ効果的に地域文化を示す文書や物質文化を残すことができるかが課題であったため、その目的を深めていく時間がなかったためあり、問いを持ったとしても、それを後回しにして保全に邁進するしかなかったのである。

実際には、活動の現場で活動の意図・目的を問われることは多かった。地域の住民にとっても、国立の機関が特定の個人住宅の物質文化を救うことは奇異であっただろう。またマスメディアにも活動の意図を問われることは多かった。とくに物質文化の保全は、人びとが「ガレキ」と呼んでいるモノを対象にしている。被災の現場にまわり付くように活動している私たちの姿は、一部のマスメディアには復興に向けた「ガレキ」撤去を阻害する行為に見えたように、現場で非難を浴びることもしばしばであった。さらに深刻だったのは、研究者の視線であった。館内においても、当時は文化財レスキューの意味は、十分に理解されていたとは言えない。実際、毎週のように被災地に出かける我々を非難し、「被災地に行くことが免罪符になっている」と声高に主張する研究者もいた。隠さずに述べてしまえば、筆者も関わるまではそうした立場を支持する側

にいた。物質文化を救ったからと言って、それが地域にとって何の役に立つのかという疑問は、関わるまでは拭いさるることができなかったのである。

しかし小々汐の活動に関わることになり、災害から半年が過ぎたころから、「ガレキ」撤去や大規模な土木工事によって、地域の風景が大きく変わっていくのを目の当たりにした。その変化とともに筆者は人びとが地域の生活文化を思い出すきっかけを失ってしまう状況に度々、立ち会うことになった。

そこに保全した尾形家の生活用具や文書などを持ち込んでみると、所有者はもちろんのこと、気仙沼という場所に住生活してきて、災害前には尾形家とは無関係であった人びとも含めて、地域で暮らした生活の記憶が具体的に蘇ってくるのである。

こうした状況を経験するなかで、筆者自身もなぜ被災の現場で、物質文化を残す必要があるのかを考え、それを学問的に位置付けたいという要求が生じた。筆者はこれまでさまざまな学会発表や講演、保全活動などを通して、この問題に答えようとし、またマスメディアからの疑問にも学術的に答える必要性を感じていた。

そうした欲求の結果が、二〇一八年に歴博研究映像「モ

ノ語る人びと―津波被災地・気仙沼から」として、一つの形となった。この映像は二〇一八年三月一七日に歴博講堂で公開され、また二〇一九年三月より歴博のビデオブースでも公開される予定である。本稿は、こうした活動の成果を簡単にまとめたものである。

なお、本稿には、二〇一一年の活動の際に、館内・館外に向けて発信した記録を載せた。これらの記録は、国立歴史民俗博物館のホームページに掲載されているものであるが、年度の最後にはほぼ毎年、削除の意思を問われている。ホームページという媒体は、蓄積よりも情報の更新に重点を置く。もちろん、記録の蓄積は可能であるが、こと本稿に掲載した記録については、消去は時間の問題である。そこで、散逸しないように紙資料として残すことが適当であろうと考える。

小々汐での活動に携わった職員は、保存科学の分野で言えば、完全な素人である。したがって保全に必要な技術、考え方は逐次、専門家のアドバイスを得てきた。専門家が被災の現場でどのようなことを考え、対処するかを知ることが重要である。

専門家が増えることは望ましいが、そうした技術・技能を身につけていない人びとが災害に直面したときにどう対

処するのか、あるいはどんな問題に直面するのかを知ることともまた、後学のためには必要であろう。報告のなかには、保存科学の見地からすれば、不適當なことも多いことは、重々承知の上で、課題や視点を共有する目的で掲載する。本稿は縦書きの仕様であるが、二〇一一年の記録は横書きスタイルである。そこで、本稿では、二〇一一年の記録を「資料編」として背面から横書きに合わせて配置した。見づらくなるが、資料編については背面から読み進められるようにした。

● 小々汐こごしお大家おおい・尾形家

文化財レスキュー活動について説明する意味では、話が前後してしまうが、私たちが宮城県気仙沼市小々汐の尾形家で家財収集をして、資料化した文書や聞き取りの結果をもとに、まず小々汐の尾形家について説明する。

本稿で、尾形家と呼ぶのは、尾形健氏とそのご家族のことである。小々汐は災害前、五四戸の集落であったが、その多くが尾形姓を名乗っている。したがって小々汐の尾形家と言っても、厳密には大多数の家が該当してしまう。しかし私たちが被災後、直接に関わってきたのは、屋号で「小々汐おおい大家」と呼ばれる尾形健氏の家である。したがってここでは、尾形健氏の小々汐大家のみを「尾形家」、あるいは「小々汐大家・尾形家」と表記する。その他の家を表記するときは、屋号などを用いることにしたい。

尾形家は、宮城県気仙沼市の小々汐集落において、おもに同族集団が集まって暮らす集落の総本家としての役割を果たしてきた(図1)。尾形家は江戸時代中期にイワシ網漁に携わり、網元として網を営営することによって発展した家だとされている。生業活動における成功は、尾形家を地域における政治においても重要な地位に押し上げた。さらに政治や生業のなかで、人びとが頻繁に尾形家に出入りすることによって、尾形家は文化の面でも地域の重要な役割を担うことになった。



図1 小々汐の位置



写真1 被災前の尾形家住宅の母屋（本館・勝田徹撮影）



写真2 被災前の尾形家住宅の長屋門（本館・勝田徹撮影）

以下では、尾形家住宅と住宅の被災について概要を述べた上で、小々汐大家・尾形家の生業を詳しくみていこう。

《尾形家住宅》

尾形家住宅は、小々汐大家・尾形家の住居となってきた(写真1)。この住宅は一八一〇(文化七)年に建てられ、二〇一一年に被災するまで、およそ二〇〇年間にわたって現住の民家として維持されてきた。

住宅は小々汐の湾近くの谷の入口にあつて、山を背後にして建っていた(図2)。尾形家住宅が建っていた場所は、小々汐のなかでも比較的、海からの風が

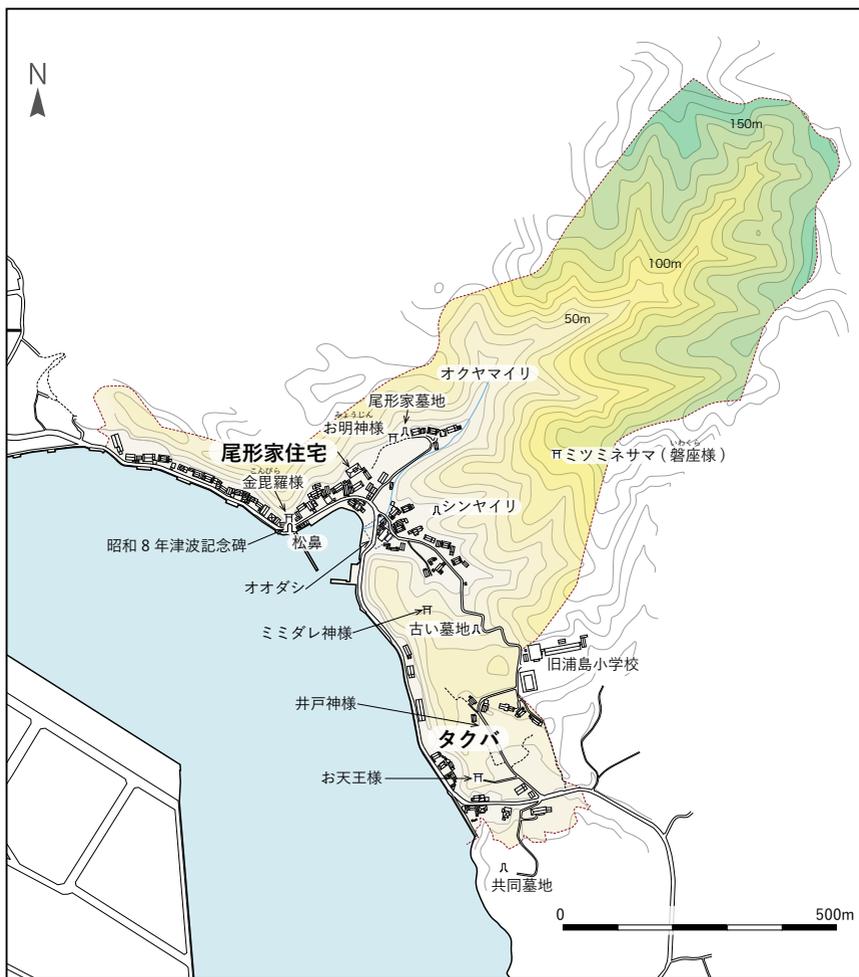


図2 尾形家住宅の位置（2011年の災害前）

吹き付けにくい場所とされ、古くからある家が集まっていた。

この場所に尾形家が移ってきたのは、住宅が建てられた一八〇年とされ、それ以前は、図2の南側、タクバと言われてきた場所に住宅があつたとされる。タクバは高台の土地であるが、イワシ網漁の成功によって、効率的に作業をしやすい低地に移ってきたと考えられている。

尾形家住宅は、間口が一・二・五間（訳二二・七メートル）であり、茅葺きであった。尾形家住宅は度々、気仙沼市による登録文化財として指定すべき対象として取り上げられてきた。しか

し現住の建物であることから、先代の当主の時代には指定を辞退しており、登録の文化財とはなっていないかった。その後、改めて工學院大学の研究者による働きかけもあり、二〇一一年はまさに、そのための調査が始まろうとしていた時期だった。

この住宅は、母屋だけが注目されがちであるが、母屋に入っていく手前には長屋門がある。この長屋門も含めて、文化財として注目されていた(写真2)。

海岸線に住む人びとの多くは、生業活動で成功すると住宅を新しく立て替えていく傾向が強く、気仙沼湾東側の大浦・小々汐・梶ヶ浦・鶴ヶ浦の四集落(まとめて、四ヶ浜と呼ぶ)には、尾形家住宅のような茅葺きの住宅は一軒しか残っていなかった。その意味で、住宅はかつての地域の姿を伝える「文化財」になり得るものであった。

《尾形家の被災》

この尾形家住宅は、二〇一一年三月一日に発生した東北方太平洋沖地震による大津波で、一〇〇メートル流されて倒壊した(写真3)。尾形家住宅が流されるのをみていた尾形家の方々の話によれば、住宅は一度、小々汐湾に面した谷の奥まで流されたあと、引き波といっしょに湾の側

まで流されたという。

幸いにして、住宅は集会所とその前にあった電信柱が支えとなって、海に流されずに接地した。災害後、気仙沼湾内はタンクから流出した重油が漂い、漂流物と油に着火することで火災が起きた。着火した漂流物と重油は、湾内の陸地に流れ着き、そこで燃え広がり、住宅や山林の火災を引き起した。尾形家住宅の屋根にも、火は迫ったのだというが、偶然にも屋根に火が燃え移ることはなかった。

《多角的な尾形家の生業》

先に述べたように、尾形家は小々汐集落の総本家としての役割を担ってきた。この尾形家が小々汐でどのように生計を立ててきたのかを、住宅から救った文書や聞き取りの内容から概観しよう。

尾形家は、先に述べたようにイワシ網漁の網元として発展した家である。ただ尾形家が発展した要因は、海への進出だけでは十分に説明することができない。というのも、気仙沼・唐桑地域を含め、この地域で発展した家は多角的経営を試みている傾向があるからである。

そこで尾形家の生業を概観すると、生業に大きく二つの要素があることがわかる(図3)。一つは、山・田畑への働



写真3 倒壊して屋根だけが残った尾形家住宅

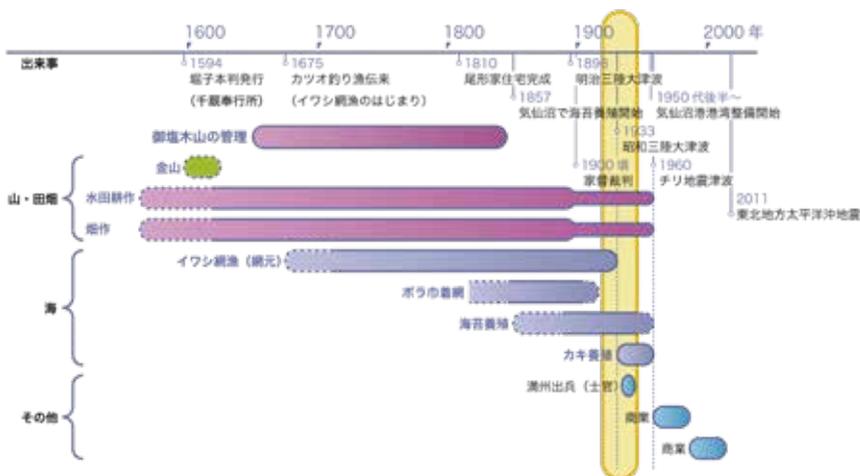


図3 尾形家が営む生業の変遷

この図は、国立歴史民俗博物館の職員が被災した尾形家住宅から救った家財のなかから明らかになった家の歴史と『気仙沼市史7(民俗・宗教編)』(気仙沼市1994年)、家族への聞き取りをもとに作成したものである。江戸期の資料の多くは失われており、市史に掲載されていない江戸期については家族が言い伝えとして伝承してきた内容をもとにしており、年代の面で正確ではない部分もある。

きかけであり、もう一つは海への働きかけである。

図3は山・田畑と海、その他に分けて尾形家の生業を表わしたものである。まず山・田畑に注目すると、開始年代はわからないものの、尾形家が水田耕作と田畑の経営をしていたことがわかつている。

尾形家の水田の多くは、小々汐の対岸にあり、現在の市街地周辺にあった。現当主の尾形健氏による説明のなかでも、対岸までカッコ船と呼ばれる船を漕いで苗を運んだことが語られている。水田の場所は、換地などによって戦後、変わったとされているが、家族の記憶として、尾形家が対岸の土地に水田を所有していたことは間違いない。

なぜ対岸に土地があるのかについては、十分な検証の材料をもたないが、一つの言い伝えとしては、尾形家が対岸の山手、赤岩上羽田にある羽田神社から分かれたという説明がある。実際、かつては羽田神社に近い山手にも水田を持つていたとされており、その可能性はある。

地域のなかには、尾形家の起源についてはさまざまな説があり、確かなことはわからない。しかし先代の当主の語りを聞いた家族の話によれば、羽田神社の祭りは小々汐の尾形家がいないと始まらないとされていたという。今では羽田神社にも継承されていないが、先代の当主は羽田神社

の祭典の日には、必ず気仙沼市内で羽田神社の神輿が休憩する御旅所に向いて、神輿を迎えたという。

尾形家が所有する水田が小々汐の対岸にある理由は十分に説明できないが、いずれにしろ尾形家は小々汐の対岸に水田を持ち、その水田を耕すことで生計を立てていた。

戦中に尾形家住宅で暮らしていた家族が、戦地や駐屯地にいる家族に宛てて書いたはがきには、水田の話題とともに、畑作、とりわけ麦の話題が出てくる。このことは尾形家が水田とともに畑作に従事していたことを示唆するものである。畑作もどの時点で始まったものかは明確ではない。ただ農耕を考えたとき、水田のみに依存する姿は考えにくく、おそらく水田耕作と平行して畑作も行っていたとみるのが自然であろう。

尾形家の生業のなかで、山林・田畑に分けた理由の一つは、山林経営である。こちらも定かなことがわかっていないわけではないが、『鹿折村新風土記』の二四九頁には、尾形家が御塩木山を管理していたことが述べられている。そしてかつて尾形家が所蔵していた文書のなかに、『鶴ヶ浦、鍛冶ヶ浦、小々汐塩煮の三ヶ二山取立願書』というものがあつた。この文書は、貞享元(一六八四)年に鶴ヶ浦、鍛冶ヶ浦(現在の表記…梶ヶ浦)、小々汐が仙台藩から製塩

を止めさせられたことによって、農作物の不振と漁業の不
振により困窮極める状況に陥ったので、救済措置として塩
木山として使っていた山林を払い下げて欲しいという嘆願
書である。

製塩がどの時期に始まったのかは定かではない。『鹿折
村新風土記』によれば、近隣地域での製塩の始まりを勘案
すると、寛永年間か万治年間である可能性が高いという。
いずれにしろ、嘆願書が存在することは、尾形家が製塩業
に一時期であるが携わっていたことを示しているだろう。
また製塩業を廃業させられたあと、嘆願により御塩木山を
払い下げられ、尾形家が山林を経営していたことも明らか
である。

以上に見てきたように、尾形家が小々汐で生計を立てる
上で、土地への働きかけとして田畑、そして山林という複
数の生業を営んでいたことをみてとることができる。

こうした傾向は、海においても同様である。先に述べた
ように、尾形家は小々汐を中心に、内湾でイワシ網漁を経
営して発展した。イワシ網漁には夏網と冬網とがあったが、
尾形家はその両方の網を経営していた。

このイワシ網漁も、その始まりは定かではないが、イワ
シが獲られるようになったのは、江戸やその近郊における

農業の発展の影響である。

気仙沼地域では、気仙沼市唐桑町鮎立しびたちの古館家が延宝三
(一六七五)年に紀州、現在の和歌山県新宮からカツオ漁
船団を招致し、カツオ一本釣り漁とカツオ節製造の技術を
学んだ。カツオ一本釣り漁を導入したことで、釣りに使う
エサとして生きたイワシが必要となった。こうした現在の
気仙沼の漁業を形づくるきっかけとなったカツオ釣り漁の
導入もまた、気仙沼湾内におけるイワシ網漁を発展させる
要因の一つになった。

尾形家では、イワシの需要の高まりとともに、イワシ網
漁を発展させ、おもに獲れたイワシを煮て乾燥させて粕
をつくる粕粕製造に力を入れていった。そのほか、イワシ
網漁をしない時期に行うボラ網なども導入した。

さらに、江戸時代後期にはノリ養殖などにも携わるよう
になり、昭和三陸大津波のあった昭和八(一九三三)年以
降、この地域で広まったカキ養殖にも、間接的にであるが、
携わるようになった。間接的というのは、次に述べるが、
尾形家は昭和三陸大津波のあと、イワシ網漁から撤退し、
次第に漁業から遠ざかっていき、カキ養殖は戦中に維持で
きる人員がいなくなったこともあり、親類が維持する形に
なっていた。

これまでみてきたように、尾形家は昭和の初期に、次第に漁業から離れていった。そして漁業に代わる生業として表われたのが、軍の士官であった。図2の「その他」の項からは、災害を経て、家の生業や山や田畑、海を中心とするものから、軍隊や商業を中心とするものに代わっていったことがみてとれる。実際のところ、現当主の尾形健氏は幼少のころ、自分の家の生業を農業ととらえ、「家の光」などの雑誌を読みながら農業青年を志していたという。

こうした尾形家の生業の変化をみていくと、尾形家が特定の生業に特化するようになったのは最近のことであり、昭和初期まではむしろ山林や田畑、海に働きかけ、多角的な生業経営をしてきたことがみてとれる。このことは、尾形家の生業の最初にも述べたように、本家など地域の中心となる家が気仙沼地域においては、多角的に産業に携わることよって発展してきたことを示している。

気仙沼地域において、家を維持、発展させていくためには、土地に働きかけて蓄財し、その蓄財の一部を海に向けて投資し、海での投資の成果を土地に蓄財する還流を構築することが重要だったのだろう。そしてこうした土地、海などの自然への働きかけの結果として、本家が本家として維持され、地域の核として機能してきたのだと言える。

そして地域のなかで経済的な核となることは、同時に政治的な核になることでもあり、また文化の核になることでもあった。尾形家には、地域の営み、人間関係の変化が文書や民具などの物質文化Ⅱモノとして蓄積されてきたのである。つまりモノとは、人と人、家族と家族、あるいは集落と集落が交渉した結果を表わすものである。とくに文書にはその傾向を読み取りやすいが、民具や生活用具などの物質文化も実際には同様である。この点については、次章以降、詳しく述べていこう。

上記のような背景をもつ尾形家住宅が、私たち歴博の職員が「文化財レスキュー」に携わる対象となった。とは言っても、尾形家住宅を対象とした文化財レスキューは、物質文化の保全を目的としていたというよりも、最初から調査の意味合いが強かった。この点についても、次章以降で詳しく述べていこう。

■参考文献

気仙沼市史編さん委員会『気仙沼市史7（民俗・宗教編）』気仙沼市、一九九四年。

村上森城『鹿折村新風土記』一九八四年。

●家財を集める

前章で述べたように、尾形家は気仙沼市小々汐の旧家である。歴博はこの尾形家の人びとが暮してきた住宅、尾形家住宅を文化財レスキュー活動の対象として位置付けて、活動を続けてきた。

尾形家住宅が活動の対象に選ばれたのは、災害前からの関わりからである。本章では文化財レスキュー事業に位置付けられた尾形家での家財収集活動を記録にもとづいて、詳しく述べることによって、この活動の特徴、直面した課題などを検討していこう。

《部分複製の対象としての尾形家住宅》

尾形家住宅と歴博との関わりは、二〇〇八年まで遡る。当時、歴博では民俗展示の新構築（リニューアル）事業を進めていた。当時、歴博の民俗展示は開室から二五年が過ぎ、学術的な意味でも、展示の劣化という意味でも、古さが目立つようになっていた。そうした状況のなか、新しい展示物の一つとして計画されたのが尾形家住宅の部分再現模型であった。

歴博では尾形家住宅を第四展示室の「くらしの場」とい

うコーナーで紹介する計画だった。「くらしの場」では、古くから続く典型的な住宅をモデルとして、そこで執り行われる年中行事、そして死後にイエの神となっていく死者たちとの交流などを表現することを目標としていた。つまり個人の住宅は、現在のような日常生活を送るためにつくれる外部社会と切り離されたプライベート空間ではなく、死者を含むさまざまな存在との交流の場であるという主張だった。

尾形家住宅が展示の対象となった背景には、長年にわたってこの地域で調査を続けていた川島秀一先生（元リアス・アーク美術館副館長、元東北大学災害科学国際研究所教授）の存在があった。川島先生は小々汐の尾形家の第一別家（分家）である仁屋にんやをおもなインフォーマントとして、仁屋の漁業や年中行事、伝承など、広い視野で研究をされていた。その川島先生が紹介してくださった旧家のうちの一つが尾形家住宅であった。

この住宅を複製の対象として選んだのは、本館の小池淳一教授である。茅葺き屋根の住宅が、古くからある日本の住宅の典型という条件に当てはまったのだという。この住宅を複製の対象として以来、予備調査として二〇〇九年から、歴博の民俗研究系の研究者がこの住宅を訪れていた。

尾形家住宅が津波によって被災したのは、こうした状況のなかだった。まだ本格的な調査は始まっておらず、年中行事も正月とお盆の調査だけが行われている状況だった。採寸等も四月から始める計画であり、再現展示に必要な資料はごく一部を展示業者がもっているのみという状況にあった。

こうしたなかでの被災であったが、被災直後から尾形家住宅の再現模型を予定通り制作するのかが、館内で問題となった。尾形家住宅の状況は、歴博の職員が被災地に向かう前の三月の末に現地に向かう前に、グーグルマップに掲載された被災地の衛星写真から確かめた。衛星写真からは、あるべきではない場所に尾形家住宅がある状況が確認できた。しかしその写真は、ほぼ垂直に上空から撮られた写真であり、居住部分がどのような状況になっているかまでは、把握できない状況にあった。

上記の状況を踏まえ、四月四日に現地調査をすることとなった。以下では、その後の活動と各時期に直面した課題を活動報告（本稿の一四九〜四七頁）からみていこう。

《第一回目の現地調査：二〇一二年四月四〜五日》

先に述べたように、被災直後から再現模型の制作の可否



写真 4 歴博第四展示室の尾形家再現模型の一部

が問題となった。そこで早めに結論を出すべく、四月四日から五日にかけて、本館研究部民俗研究系の小池淳一、山田慎也、松田睦彦の三名が現地向かうこととなった。

現地調査の結果、制作を続けたいという希望をもつことになった。尾形夫妻と小々汐で面会し、住宅の状況を確認し説明を受けた際、尾形健氏からできれば、住宅の再現模型の制作を続けて欲しいとの意思の確認ができたことが希望の要因としては大きかった。この希望に基いて改めて館内で話し合いがもたれ、再現模型を引き続き制作することが決まった。

再現模型の制作とともに、当時、リアス・アーク美術館の副館長をされていた川島秀一先生との面会により、尾形家に関わる民具・生活用具、文書、写真などの保全と聞き取り調査の必要性が話し合われ、支援体制の構築を模索することとなった。歴博ホームページに掲載された活動報告によれば、地域における伝承の断絶に備えることを意識していたことがわかる（本稿、一四五頁【第一報】参照）。

《第二回目の現地調査：二〇一二年四月二二～二五日》

第二回の調査では、小々汐集落全体の被災文化財を救う試みは現実的ではないことが確認されている。文化財を救



写真5 気仙沼エースポートの漁具展示コーナーから漁具を救う
(2011年4月22日)

い、地域の伝統文化の断絶に備えることと一言しても、現実問題として災害前に歴博と直接の関係を構築していなかった人びとの住宅を対象とした文化財レスキューは困難であるという結論に達したのである。

また、文化財の救援・支援として民具・生活用具、文書等が挙げられているが、その内容については具体的なイメージがなかったことも報告書からは読みとることができ（本稿、一四四～一四三頁【第二報】参照）。個人住宅の生活イメージが、いわば博物館や資料館を対象とするような固定的な資料観にもとづいて想定されており、当初は個人の住宅というプライベート空間の文化財レスキューに関する具体的な構想ができなかったのである。

こうした状況のなかで、より具体的な成果を挙げる方法として報告書のなかで提案しているのは、公的施設の民具展示コーナーを対象とした文化財レスキューである。尾形家住宅を含め、個人住宅へのアクセスには少し時間を要するとの判断から、公的施設での活動にシフトする可能性が検討されたのがこの時期である。また二〇一一年四月二四日に有志が小々汐に集まり、尾形家住宅の再建プロジェクトが発足し、ゴールデンウィークの連休にかけて残った屋根の解体を行うことが決定した。

この調査において筆者は、初めて気仙沼を訪れ、結果的にリアス・アーク美術館を窓口として歴博の文化財レスキューの担当としての役割を与えられることとなった。

《文化財レスキューの基礎の習得…二〇一一年四月二八日》被災地で文化財を保全する上で、基礎的な知識の習得が必要との考えから、元興寺文化財研究所での研修をお願いした。当時、歴博の職員のなかで「文化財」についての理解に混乱があったことは否めない。つまり国宝や登録文化財、美術品のような繊細に扱うべきものと、民具や生活用具のような日常生活の延長上でメンテナンス可能なものとの区別ができていない状況があったのである。

元興寺文化財研究所における研修は、尾形家住宅における被災文化財の保全が、国宝のような扱いとは異なり、むしろ日常生活にヒントを得て進めることが現実的であることを認識するきっかけとなった。元興寺文化財研究所で教わったことのなかでもっとも重要だったことは、作業をよりシンプルに、複雑化させないことであった（本稿、一四二～一四一頁【第三報】）。このことは、六月に、国立民族学博物館の日高真吾准教授に指導を仰いで、尾形家の家財の洗浄をしたときに学んだことと共通している。

《尾形家住宅の被災家財の収集…二〇一一年五月六～七日》

屋根のなかで被災資料を救うことは、四月二四日に関係者の間で合意した事項だった。ところが連休に入っても解体を担当するグループから何の連絡もなく、こちらから連絡をとって状況を確認し、急遽、五月六日に尾形家住宅に向かった。尾形家住宅でこの二日間で救ったものは、とくに何かの方針があったわけではないが、博物館での展示を想定していたことから、展示に必要なものを優先して救うこととなった（本稿、一四〇～一三七頁【第四報】）。

その結果、信仰空間の再現を目的としていたこともあり、神棚や神具、仏壇などを中心に集めた。屋根のなかに入っ
て比較的早い時間に、尾形家のオシラサマを発見したほか、恵比寿・大黒像、神札、護符などを集めることができた。

この作業を通して課題となったこととして、筆者のように災害後に初めて現地を訪れた者にとって、被災文化財といっても、何を救うべきなのかは明確ではなく、それを理解できるようになるまで時間がかかることが記されている。また民俗資料の性格を知らない人たちとの共同作業では、指示を明確にすべき旨などが指摘されている。一方でのちにリアス・アーク美術館の学芸員である山内宏泰氏から指摘されたことであるが、気仙沼エースポートで民具を



写真6 建材の山のなかから発見され応急処置を施される尾形家の古文書

救出した際、民具に注目するあまり、絵画等の美術資料への配慮が欠けていた。こうした問題は、恥しい失敗であるが、被災文化財を救う活動がより幅広い視野で、あるいは複数の専門分野をもつ人びとの集団によって行われる必要性を意味しているだろう。

もう一点、資料保全の際の記録係の配置についての指摘が挙げられている。被災文化財の保全活動では、いつどこで何を救い、どういう作業を経て安定状態にまで導いたのかは重要な情報である。この点について、作業の経過から監督的立場で記録をする人員を配置する必要性が課題として挙げられている。

《尾形家住宅の被災家財の収集》

二〇一一年五月二二―一四日

尾形家の屋根は五月二一日までに解体が終わった。五月六日からの作業では、屋根や梁を頼りにすることで、被災前の家具や生活用品の配置を思い出して家財を集めることができていた。しかし屋根が解体され、梁なども片付けられると、部屋の配置がわからなくなったことが指摘されている（本稿、一三六―一三三頁【第五報】）。

この当時、尾形家住宅のあった場所で集めたモノは、尾

形氏の許可を得てから保管場所であるリアス・アーク美術館に運ぶことを徹底していた。おそらく、とるに足らないと考えられるようなモノも多かったと思うが、日常のフィールドワークの基本に立ち返り、被災時・緊急時であっても、文化財の御旗のもとに現場から持ち去るような形で保全することは正当化されないと考え、確認と合意を徹底することにしていった。こうしたルールの徹底は、少なくとも地域のなかで活動し、信頼を得る上では重要なプロセスであったと考える。

この時期から尾形家の屋根の下のみで収集をするのではなく、津波の経路に関する聞き取りにもとづいて、小々汐の谷全体を対象に表面採取による家財の搜索をしている。この搜索のなかで、被災した住宅の建材の山のなかから、戦後に水産庁が集めて調査をし、のちに日本常民文化研究所に移管され、網野善彦らによって尾形家に返却された文書の一部が発見されている。

尾形家住宅での家財収集は、神棚・仏壇・オシラサマなどの発見により当初の展示に必要な資料の収集という段階は一段落した。そしてアバ（イワシ網漁に使ったウキ）や日記、家計簿、手紙類など、尾形家の生活や生業、文化を知る上で重要と思われるものに救う対象が拡大した。

《尾形家の被災家財の洗浄…二〇一一年五月二〇～二二日》

被災家財の収集に集中した結果として、被災した家財を保管しておく場所が逼迫する事態となり、また家財へのカビの繁殖なども予想されたことから、家財の洗浄が急務となった（本稿、一三二～一三〇頁【第六報ホームページ掲載バージョン】および一二九～一二四頁【第六報・原稿の原本】）。

この第六報から第八報にかけては、ホームページ掲載バージョンに事務方からの大きな変更のあとがみとれる。第六報では、概要以外の詳細情報がすべて削除され、イメージを伝える画像だけが残された。なぜこうした情報の選択が行なわれたのかは不透明な部分もあるが、原本の記述のなかに保存科学的な見地から不適切と判断される内容が含まれていたことに起因するだろう。今回、成果をまとめるにあたって、再び変更前の原稿を再現して掲載した。これは誤りも含めて活動記録は共有すべきであると理解するからである。

洗浄の作業では、すぐに水洗いに移行しようとしていたり、難しいものに挑戦したりといった、作業上での失敗が目立った回であった。洗浄では比較的これにくく、洗浄作業による影響が出にくいアバなどを選んで次第に難しくな

るように工程を組んだ。一方で「文化財」に対する既存の知識から難しいものへの憧れも強く、より難しいものを複雑な方法で挑戦するなどの混乱も起きた。当初の構想はよかつたものの、それをチーム内で共有することを考えれば課題が残ったといえるだろう。

またこの回には、オシラサマの洗浄を行っている。オシラサマは信仰の対象であり、単なる物質ではない。そこで、どこまで布を剥して洗浄できるのが問題となった。こうしたデリケートな対象に対して単純に保存科学や博物館の常識を押し付けても、被災家財の場合にはうまく作業を続けることは難しい。そこで所有者の希望、地域での人びともつ感覚などを頼りに決定を下さなければならぬものも存在する。オシラサマについては、分解可能な部分は分解して洗浄するものの、結末してあるなど、分解できない部分については、そのままにした。もちろん、保存という目的からすれば正しい選択ではない点もあるだろう。

《尾形家の家財収集と洗浄家財の経過観察…

二〇一一年五月三一～六月一日》

第七報でも公開版は概要のみで、実質的な中身は伝えていない。原本をみると、日本常民文化研究所から尾形家に

返却された文書の一部が再び発見されたことを報告している。資料の状態が悪いことから、一刻も早い乾燥作業が必要との結論に至り、作業をしている。しかし一方で、文書の処置の仕方には問題も生じている（本稿、一二三頁【第七報ホームページ掲載バージョン】および一二二～一一八頁【第七報・原稿の原本】）。

被災資料の保全では、乾燥↓泥落し↓水洗↓乾燥という経緯を経るが、一足飛びに水洗の作業を行っているなど、資料保全の基本を押えない行動がみられる。こうした誤った作業は、資料の破損につながる可能性もあり、またせっかく水洗しても付着物が落ちないなどの問題を生じることも多い。実際、水洗したものの、結果として油が染み出したり、水洗後に乾燥したにもかかわらず、泥汚れが目立つなどの状況がこの時期には生じていた。

《第八報：二〇一一年六月八～一〇日》

第八報の原版をみると、唐桑町において被災資料の確認調査を行っている。このときの調査では、リアス・アークの副館長（当時）であった川島秀一氏に直接、連絡があった住宅と漁村センターとを回っている。漁村センターについては、民具等の貴重資料が残っているが、三月一日の



写真7 陸前高田市立博物館の資料の保全を通じて直接、保全作業の指導を受ける（陸前高田市、2011年6月15日）

地震でホルマリンの瓶が倒れ、大量のホルマリンが流れ出ている状況が確認されている(本稿、一一七～一二六頁【第八報ホームページ掲載バージョン】および一一五～一一一頁【第八報・原稿の原本】)。

《第九報：二〇一一年六月一四～一七日》

第九報では、陸前高田市の旧生出小学校を行われている陸前高田市立博物館の資料整理に参加している(本稿、一一〇～一〇七頁【第九報】)。この陸前高田での経験から、被災資料の洗浄において、水の使用は最小限に控えるべきで、基本的には乾燥と泥落しを数回、繰り返すとよいことを学んだ。また一つ一つを完璧にこなしていくよりも、ある程度まで仕上げ、しばらく放置し、またある程度まで仕上げることを繰り返したほうが、結果的に作業は速く進むことも学んだ。

この陸前高田市での作業に参加したことは、その後の被災家財の保全にとってターニングポイントとなった。このあと、気仙沼市教育委員会が募集した市民が洗浄作業に加わり、チームを構成していくことになるが、その方々に洗浄をお願いする際の指針がここで確立したと言ってよい。恥しい話ではあるが、元興寺文化財研究所で座学で学んだ



写真8 実践から学ぶ(陸前高田市、2011年6月15日)



写真9 市民とともに文化財の洗浄を学ぶ

知識は、実際の現場では十分に機能することはなく、むしろ自己流の洗浄作業が展開し、それを危惧する状況に陥っていた。そうした状況を打開するきっかけとなったのが、陸前高田市における作業への参加だった。

《第一〇報：二〇二一年六月二二～二四日》

第一〇報では、国立民族学博物館の日高真吾准教授を仙沼に招き、いっしょに作業をしていたことが記録されている。この作業には気仙沼市教育委員会がシルバー人材センターを通じて募集した人びとが参加した。市民からの参加者は二名、教育委員会の嘱託職員が三名参加している。この作業を通じて、第九報に引き続き、被災資料の扱いを学ぶこととなった（本稿、一〇六～一〇三頁【第一〇報】）。

ここで確認したことは、なるべく簡単なものから処理すること、楽なものを選びながら作業を続けることである。こうした作業では、しばしば難しいものへの挑戦をしたくなってしまうものであるが、そうした状況は結果的に作業の辛さばかりがのってしまい、長続きしない原因になってしまうことを学んだ。

《第二一報：二〇一一年六月二八〜三〇日》

第一一報では、市民の方々とともに文化財レスキュー活動を効率的に行うための方法が検討されている。ここではトリアージの手法を用いて、カラービニールひも（スズランテープ）を用いて、泥落しをする順番、あるいは一部の要望として泥落しをしないで残すものなどを整理する手法を報告した。このときは、緑色のテープは「泥落しが必要」、赤のテープは「クリーニングに注意点あり」、青は「水洗が必要」、黄色は「クリーニング禁止」、白は「予備」のように分けて、収集した家財にテープを結びつけることで一見してどの作業が必要なのかを見分けられるようにしている（本稿、一〇二〜九九頁【第一一報】）。

そのほか、この回には新たな被災文化財の救援活動の可能性を探って、南三陸町志津川の個人住宅を訪れてもいる。これは直接的には川島秀一先生への救援要請に答えたものであり、そこに筆者も同行したのであるが、レスキューには至らなかった。この件からは、被災文化財の救援活動には、どうしても災害前に人間関係を構築しておく、こちらの活動の意図や姿勢を理解してもらわないとなかなか関わりづらいという問題がみえてくる。

《第二二報：二〇一一年七月五〜七日》

第二二報では、小々汐に重機が入り、建材の移動などが行われたことを報告している。災害後、一度、自衛隊による人命救助により家屋が解体されたが、その後はほぼ機械が入らないままになっていた。しかし小々汐で水道の漏れが発見されたことから、重機が入り破損した蛇口を探す作業を行った。そのとき、立ち合って、被災した家財を同時に探したが、その場所では収集しておくべき家財が当時の基準では発見できなかった（本稿、九八〜九五頁【第二二報】）。

また津波災害の特徴として、被災した家財は津波によって運ばれるヘドロの下になることが多く、掘らないと発見できないことが多いことを報告している。また市民が被災家財の保全に関わるようになったことから、新たな課題が生じたことも合わせて報告されている。作業者同士が洗浄作業を競うようになり、速度が増す一方で、それが家財の破損につながる可能性があり、全体で洗浄作業や物質文化を救い、残す意味を再確認することが必要であることを指摘している。当時は作業が始まったばかりであり、まだ市民と私たちの間で作業に対するコンセンサスができておらず、双方が手探りの状態だったことがわかる。

《第三報：二〇一一年七月一三～一四日》

この間には、被災現場でガレキ撤去の動きがみられるようになり、被災家財の収集を急がなければならなくなった旨を報告している。小々汐の尾形家住宅が流れ着いた場所では、次第に屋根の下に積み重なった家財が整理され、ダクトコロの囲炉裏や土間の上がり框、箱階段など、家の建具、調度品など、大型の家財が発見され、回収されるようになった（本稿、九八～九五頁【第一三報】）。

家財の収集をするなかで明らかにってきたこととして、家に蓄積された物質文化は、家人であってもそれをすべて把握しているわけではなく、発見して始めて存在を知るものも多いことが挙げられる。それらの意味付けをするには、時間がない状況のなかでも、所有者と時間を共有し、コミュニケーションをはかっていくことが重要であることが指摘されている。洗浄作業においては、夏になるにしたがい、次第に作業環境の悪化が起り、熱中症対策などの環境整備の必要性を報告している。

《第一四報：二〇一一年七月二〇～二二日》

この回のみ、気仙沼と陸前高田とでチームが別れて作業に携わっている。小々汐で被災した家財の収集活動は、気

仙沼市教育委員会の協力などもあり、お盆、八月一日を目処に作業を続けることとなった。この回、気仙沼では屋根の下にあった家財がほぼ片付けられ、収集すべきもの多くは回収した状態になった。そこで、次のステップとして、母屋の土間にあったワラブチ石を探す作業に入った（本稿、九〇～八五頁【第一四報】）。

洗浄作業を続けるなかで、杵についた害虫が発見された。生活のなかでもつく害虫であり、また災害によって博物館等に運ばれると、そこで繁殖して被害をもたらす場合も想定される。個人住宅における被災家財は、それが資料化されていくのか、生活の文脈に戻っていくのかが確定しておらず、無闇に防虫のための薬品散布などができない問題もある。そうした場合、日光による熱で害虫を駆除する方法があることを民博チームから学んでいる。

《第一五報：二〇一一年七月二〇～二二日》

この回では、ワラブチ石が発見され、再建に備えて現地で保全することになったことが報告されている。また洗浄作業においては、尾形健氏が再三にわたって気にかけていた文化七（一八一〇）年に住宅を建てた際に書かれた御手伝帳が筆筒のなかから発見された。ただ状態は極めて悪く、

筆筒を一度破壊した上で、引出しを取り出し、その引出しから民博チームの専門家の手で引出しに癒着した文書を剥す作業が行われた(本稿、八四〇―八五一頁【第一五報】)。

洗浄作業においては、気仙沼の市民を中心とする作業チームが、はがきの泥落しを進め、読み取ることのできるものについては年号順に並べて整理しやすい状況を作り出しつつあった。はがき類は一度きれいにしたと思っても、しばらく時間を置くと再び汚れが浮き上がってきて、乾いた状態での泥落しが数回にわたる状況になり、市民チームのなかでは一部に不安の声も上がるようになった。

現地での被災家財の収集は母屋、土間ともに一応の目処が立ち、その後は表面採取の方法によって、さらに被災家財がないかを調べながら作業を進めていくこととなった。

《第一六報：二〇一二年八月三―五日》

被災した人びとの住まいが避難先のホテルから仮設住宅へと変化していく様が報告として記載されている。この時期まで、基本的には家の歴史を示すものに注力して、家財の収集をしてきた。一方で、この時期まで手をつけていなかった事柄として、津波被害を示すような家財の収集があった。つまり平成という時代に起きた災害であることを

示すような資料は、今後、尾形家の資料を利用して展示などを作っていく上でも重要であろうという判断から、より現代に近い家財の収集に目を向けることになった。ただ現代に近いほど、日常生活と密着している可能性が高く、いくら資料として有効であっても、無理に資料化をめざすことは避けるべきとの指摘が報告されている(本稿、八〇〇―七七頁【第一六報】)。

その上で、現代の暮らしを示すものとして、液晶テレビやゲーム機などの収集を試みた。ただ現代Ⅱ家電の時代という発想は単純であり、時代を読み間違える可能性もあることから、生活に密着したものとして介護用のトイレなども収集している。ここで重要なことは、文化財レスキューがしばしば、過去の生活、それも近世や近代を想定しており、現代へのアプローチが弱いことである。こうした問題を克服しつつ、過去・現在・未来を見通せる資料群をつくることは重要なことであると当時の視点で判断したようである。つまり津波被害の特徴は、言ってみれば、ないはずの場所にモノがあることによって特徴づけられるもので、個々の家財を集めても、そこに被災の痕跡はみつけにくいことがわかったのである。

《第一七報：二〇一二年八月一〇～一七日》

引き続き、津波災害を表わす家財の収集に務めているが、一方で方針を少し変えて、災害前の社会関係を表すような家財の収集も始めている。ここで収集されたのが茶道具セットなどである。これは尾形家が地域の政治・経済・文化の中心としての役割を果していたからこそ、人の出入りを想定して準備されていたものである（本稿、七六～七三頁【第一七報】）。

丁度、この時期はお盆にあたったことから、災害後のお盆がどのような形で執り行われるのかについても映像と写真による記録を試みている。また遠野市立博物館に前川さおり氏を訪ね、文化財レスキューをどのように展示し、成果を公開して社会と共有していくかを検討するようになった。この頃までは、市民と私たちのみの関係で作業が進められていたが、このあたりから展示による成果公開、情報・問題の共有というテーマに携わるようになった。

《第一八報：二〇一二年八月三二～九月二日》

小々汐における被災物の撤去作業が本格化し、被災家財に関わる作業も、収集から整理にシフトしていった。撤去に立合いながら、家財収集を進める一方で、集めた家財を

リスト化する作業に取りかかった。当初の作業では、一点を確認し、その内容から資料群をつくり、その資料群に番号を与える方法を試した。たとえば、仏壇、引出し、天井、箱階段といったように、個々のモノごとにバラバラになった部材を集めるという方法である。ところがこの方法では、整理に非常に長い時間がかかってしまい、資料登録が困難であることもわかってきた。この回には、そうした課題については目をつぶり、資料群をつくることに専念していることがわかる（本稿、七二～六九頁【第一八報】）。

この頃、東北学院大学から学生ボランティアが派遣されてきており、その一部がリアス・アーク美術館での作業に協力してくださった。こうした学生たちは、被災地の現状を知らないまま、ただ作業に従事して帰ることが多かったことから、学生を時間のゆるす限り、現場に連れていき、被災した場所の整理はまだ終わっていないことを確認してもらう時間を設けた。

《第一九報：二〇一二年九月七～八日》

作業はリスト化に進み、被災した家財を用いたモノの復元とリスト化作業が同時平行で進んだ。前回に引き続き、資料を一点一点組み上げていく作業が続いた。そのなかで

課題となったのは、一点一点を組み上げていく上では専門家の助言が必要な場面があることである。たとえば組木などでは、素人ではなかなか組み上げられないものもあった。そうしたものを一つ一つ検証し、専門家の助言などを受けながら進めていくことは楽しい作業ではあったが、リスト化が進まないという問題も顕在化しつつあったのがこの回である（本稿、六八～六五頁【第一九報】）。

またリアス・アーク美術館が再開に向けて準備を進めることになり、作業場を移動する必要が生じてきた。どこに移すかについては気仙沼市教育委員会の判断に委ねられることになったが、この時期は作業の存続は決っていたものの、その体制も含めて移動によって変化する可能性があり、検討課題の多い時期であった。

《第二〇報：二〇一二年九月一四～一六日》

このあたりから芸能の復興など、被災家財・文化財レスキューだけではない幅広い関心に目が向いていくようになる。たとえば、この時期には南三陸町志津川の八幡宮において神楽が奉納されたが、そうした場所に入りし、その状況を映像や写真で記録する作業も始めている（本稿、六四～六一頁【第二〇報】）。

被災家財の収集では、建材などが運び出されてモノが少なくなつた現場で、ヘドロを掻き出して、小さな家財を探す活動をしている。リスト化の作業では、作業のなかで欠けがみつかることと混乱が起きるなど、非効率な作業状況が続いていた。ここでは役割分担などにより、問題を解決することを狙っていたが、実際には根本的にこうした作業は二万点近い家財に対しては合っていないことを理解し、のちに方法を改めていくことになる。

《第二一報：二〇一二年九月二二～二三日》

この回も引き続き、リスト化の作業を進めている。あいかわらず、作業では資料群づくりに傾倒しており、一日の作業で登録できる資料数は二〇件程度と極めて非効率な状況にあった。限られた時間のなかでいかに効率的に作業を進めるかという命題から考えると不適當な方法であった。ただし、あとから展示のために資料を探して一つのモノを組み上げていく作業をする際には、このときの経験が役立つ（本稿、六〇～五九頁【第二一報】）。

《第二二報：二〇一二年九月二八～三〇日》

この時期には小々汐地区をはじめとして海岸部で冠水が

酷くなっていることが報告書には書かれている。小々汐ではヘドロを除去して、その下から木札や仏壇でつかった器、盆などの生活用品を救った。またリスト化作業では、仏壇の部材チェックを進めた。位牌についても記述があり、漆の剥離が始まっており、その対処が困難なことから泥落しのみで対処したことが書かれている（本稿、五八〇～五七頁【第二報】）。

リアス・アーク美術館に代わる作業場所が旧月立中学校になることが決まり、移動の準備、部屋の状況確認と収納施設の設置などの準備を整えていくことが課題として挙げられている。

《第三報：二〇一二年一〇月五～六日》

ここからが未公開の報告である。未公開になった理由は、作業量が増えて執筆が追いつかなくなったことによると考えられる。

この時点で尾形家の家財は旧月立中学校に移動することが決まっており、その状況を踏まえると時間をかけてリストを作成していくことは困難であるとの結論に達した。そこで簡易に、手当たり次第に資料を登録していき、その結果、あとで関係性がわかったときにメモとしてその情報を

付け加える方法をとることになった（本稿、五六～五五頁【第三報】）。

《第二四報：二〇一二年一〇月二一～二四日》

この回から、リスト化が済んだ資料を旧月立中学校に運ぶ作業が始まる。当初、開始した大型の家財が資料化され、リストに登録されたことから、それらをまず旧月立中学校に運んだ。リスト化はまだ単純化しておらず、方針の転換にもかかわらず資料群づくりに拘泥している状況がみとれる。また移動後の収容具の検討などが課題として挙げられている（本稿、五四～五三頁【第二四報】）。

《第二五報：二〇一二年一〇月二六～二八日》

ここでリスト化については、仮番号制を本格的に導入した。それまで一点一点を確認して組み上げて一つの資料群をつくっていたが、そうした作業は非常に時間がかかり、移動などの状況を考えると続けることが困難であるとの結論に達した。そして登録時に簡単な分類を施し、資料を探しやすいしかけをつくることになった。ただこの分類は実際にうまく機能していない。たとえば登録の時点で「葉書」「はがき」「ハガキ」「軍事郵便」などに登録してしま

うことによって、検索が困難になり、あとあと、モノを検索しづらい状況が生じてしまった。作業を進める上では、ある程度の枠組みを準備してから進めることが必要であることをこの事例は物語っているだろう（本稿、五四～五三頁【第二四報】）。

《第二六報：二〇一二年一月九～一〇日》

小々汐ではガレキ撤去が終わり、作業の中心は旧月立中学校におけるクリーニングとリスト化の作業に移った。この時期には家財・資料の移動があった。そのなかでも現場に立つことは続けており、偶然であるが小々汐にいるときに、水田復興に携わる作業員の方が水田を清掃するなかで、日本常民文化研究所から尾形家に返却された資料の一部を発見した。数ヶ月、水田のなかに入っていたものの、封筒のなかで保管されていたにもかかわらず溶けたり、破損したりという状況はなかった。これらの資料は奈良文化財研究所に送り、冷凍乾燥をお願いした。

《第二七報：二〇一二年一月二四～二五日》

これが現存している最後の報告になるが、この時期は資料の移動が重要な課題になっていたことがわかる。この回

に、リスト化の際、法量を入れることを提案し、実施してもらった。ここまで法量を入れなかったのは、一度にさまざまな要求をして作業者が辛くなるのを避ける目的があった。ただ、法量がないと探せないことも多く、必須の情報であることから、計測と記入をお願いし、ここでリストの体裁がほぼ完成した。

以上みてきたように、尾形家住宅を対象とした家財の収集活動は、当初、家財収集のみを目的とし、暗中模索のなかで集めるべきモノを決定していく過程を経て、自己流の洗浄作業から専門家のアドバイスと活動への参加を経て、作業を体得していく過程があった。さらにそこに市民が加わることで、作業をオーガナイズしていく視点を獲得するようになるが、一方でいろいろな失敗を重ねていた。ただリスト化にみられるように、作業を通じて部材に対する身体的な感覚が養われ、のちに小さい部材同士であっても、接合したり組み合わせたりする視点を得ることができた。

ここまで被災後の家財収集の経緯をみてきたが、ではなぜ被災の現場で物質文化を保全する必要があるのだろうか。以下ではその点に注目して話を進めよう。

●モノがもつ情報

これまでみてきたように、尾形家住宅を対象とした被災家財の保全活動は、「文化財レスキュー」として位置付けられた活動であったが、同時に展示の制作を意識した調査としての性格を帯びていた。そして結果的にであるが、展示の制作を意識することによって、被災した家財の保全活動も、地域における尾形家の役割や生活の有り様が具体的にわかる物質文化を保全することにつながった。展示という目標があったことが被災家財の保全を精緻化したと言ってもよい。

ところで、文化財レスキューにおいては、しばしば文書の保全が目目される。全国に広がっている資料ネットもまた、おもに文書の保全を目的としたものである。一方で民具や生活道具などに対しては、民俗を扱う博物館や資料館が実践する物質文化と情報を結びつけて資料としての価値を生み出していく営みがあるが、それが市民を巻き込んだ活動には発展していかないのが現状である。こうした手法は博物館や資料館では、ごく一般的なものであるが、なかなか広がっておらず、逆にせつかく民具を集めても、担当がいなかったために扱い方がわからず廃棄の対象に

なってしまう例も散見される。

こうした問題が起きているのは、文書には誰でも理解できると考えている文字情報があり、言葉による理解、分析ができるからであろう。一方で、民具や生活用具は、文字のよきな情報が乏しく、存在していてもその背景情報が残っていないければ、ほとんど意味を成さないように見えることから、敬遠されてしまう傾向があると考えられる。しかしモノもまた、さまざまな情報を持っているのであって、課題はその情報を読み取るリテラシーが必要であることだろう。以下では、簡単に文字情報から読み取れること、モノから読み取れることについて例を示して検討しておきたい。

《文字情報から読み取れること》

先にも述べたように、尾形家には大量の神札・護符が残されていた(写真一〇)。これらの神札・護符は、尾形家の人びとが参詣に出かけたり、集落内の人びとが参詣に出かけたりして、尾形家にもたらされたものである。被災の現場で集めた神札・護符は木札だけで一、〇〇〇件を越えている。気仙沼地域では、神札や護符は家の歴史を示すものとして、家に溜めておくものと認識されている。



奉齋 西宮大神宮
 松魂大明神 海上安全大漁幸福祈願
 祭主 横白

御札 西宮神社
 木製
 長さ 28.8cm 幅 8cm



出羽神社
 月山神社 廣前大森海上安全大漁幸福祈願
 湯殿山神社
 三山 宮司

御札 出羽神社・月山神社・湯殿山神社
 木製
 長さ 36.5cm 幅 8.7cm



海上安全
 奉齋 大般若經六百軸
 新築家門木昌諸縁祥
 船中無難

御札 大般若經
 木製
 長さ 35.5cm 幅 9.5cm



不動明王密法感應

御札 不動明王
 木製
 長さ 27cm 幅 7cm



初巳祭
 齋祀嚴嶋大神大漁守賜之所

御札 嚴嶋神社
 木製
 長さ 34.2cm 幅 9.2cm



國幣中社
 鳥海山大物忌神社
 廣前新築家内安全祈願
 羽州一宮 宮司 欽言

御札 西宮神社
 木製
 長さ 30.3cm 幅 8cm

写真 10 尾形家に保存されていた神札・護符の例

さて、これらの神札・護符には、文字情報が書かれており、これらを分析することで尾形家の信仰圏の広がりを示すことができる。

図四は、尾形家が集めてきた神札・護符に書かれた名称を便りに、尾形家の信仰圏の広がりを示したものである。この図に示しているのは、神札・護符の一部であり、分析



図4 尾形家の神札・護符にみる信仰圏の広がり

が終わっていないことは予め、断わっておく。
さてこの図から、尾形家が少なくとも北は早池峰山や紫波稻荷神社に参詣しており、南は大崎八幡宮などに参拝していることがわかる。また日本海側においても、鳥海山大物忌神社や羽黒山出羽三山神社、漁業者の信仰があつい鶴岡市の善宝寺などに参詣していることがみてとれる。

この例が示すように、文字情報に頼ると比較的容易に、その情報を加工して地域の生活の有り様の一部に接近することが可能になる。文字が用いられたモノは、そのテキストが研究対象に取り上げやすく、また他者からも理解しやすくみえるのである。一方で、こうした情報もまた、地域の間関係の文脈のなかで成立するものであり、内容の分析をしていく上では、実際には聞き取りなどによって情報を補足していくことが必要になる場合も多い。したがってテキストも誰にでも共通して理解できるものとは限らない。

《モノが発信する情報》

文書や神札・護符などがテキストによって理解可能性が広がるのに対して、モノは文字という付加情報がない場合が多く、その扱いに困ることも多い。しかしモノ自体も情報を持っており、それを読み解くことは可能である。

写真一は、小々汐で津波による被災をしたのち、火災によって半分が溶けてしまった子ども用の玩具である。一見するとこの玩具には情報がないようであるが、よくみれば、そこにモノとしてのメッセージを読み解くことはできる。

たとえば、この玩具は小さな子どもが使っていたことがわかる。するとこの玩具を使っていた子どもはどうしているのだろうか、玩具が焼けただけであることから、子どもは無事に津波や火災から逃げることであったのだろうか、あるいはその家族はどうなったのだろうかといった情報を想起してくことができるのである。もちろん、そうやって想起される情報は不確かなものであるから、学術的な分析に耐えるものではないが、物質文化にもそれ自身もつ情報があることは、理解できるだろう。

ところで、こうしたモノは、それ自身は確かにもつ情報が少ない。しかしそこに人びとの記憶・語りというものが付加されると、モノは資料になっていく。じつは物質文化

にとって、語りはきわめて重要な要素なのである。民俗を扱う博物館の多くは、モノとともに人びとの語りを付加して資料性を高める努力をしている。では、語りとはどのようなものであり、またモノを資料にするときになぜ語りが必要になるのだろうか。以下では語りについて詳しくみていこう。



写真 11 小々汐で被災した玩具

●語りへの注目

被災した尾形家住宅を対象として家財を救う活動をするなかで、語りに注目するようになる。尾形家住宅を対象とした活動では、自分たちの活動をビデオで撮影し、のちに検証できるようにするという設計のもと、活動の現場にビデオカメラを持ち込み、活動を記録していた。そのなかで、興味深い出来事として、尾形健氏が記憶を語るシーンを撮影していた。

しかし一連の活動のなかで、はつきりと語りに注目するようになったのは、二〇一一年の後半、被災現場で家財を集める活動が終わりに近付いたころだった。さらに、物質文化の保全を目的とした被災文化財の保全活動において、語りを意識しなければならぬと明確に認識し、それが意識的に映像におさめられたのは、二〇一二年六月のことである。

二〇一二年六月二二日、筆者は被災によって廃棄された被災物（ガレキ）の撤去が終わったあと、二〇一二年三月の整地作業で消えたワラブチ石を探していた。

ワラブチ石は尾形家の土間にあり、正月の準備や年始めに行われるノウハダテと呼ばれる年中行事などで使われて

きた石である。尾形家住宅の再現模型を制作する上で、外すことのできないモノであったが、整地作業の途中で行方不明になっていた。

そこで礎石などを一つ一つみて、ワラブチ石が混ざっていないかを確認していたが、なかなか見付からなかった。二〇一二年六月二二日はたまたま、現場に行き、再び石を探そうとしていた。そこに尾形さんの奥さんと息子さんが見られた。そこで、いっしょに石を探した結果、奥さんが勝手口にあった水道の栓をみつけて、そこから自分の体の感覚を頼りに台所の大きさ、囲炉裏の位置、土間の上がり框の長さなどをたどっていき、石の場所を推定した。

半信半疑にスコップを置いたところ、コツンという音がして、石が発見された。石は整地作業によって土を被ぶっていただけで、掘り起こされたり、移動したりしたことはなかったのである。そして発見を喜んでいるところに、親類の老人（新屋のじいさん）がやってきて、突然、ワラブチ石についての記憶を語り始めた。以下は少し長いが、そのときの語りを映像データから起こしたものである。

《ワラブチ石についての語り》

尾形民子さん あら、こんにちは！どうも、しばらくで

す。

新屋のじいさん この石にはいい思い出があるんだよね。

尾形民子さん おじいさんは何十年もこの石を使いましたもんね。

新屋のじいさん 何十年もこの石を使ったの。

尾形民子さん そうですよ。

新屋のじいさん お正月の一日と言えば、必ずこの石を使うんだ。

尾形民子さん あと、暮れのススハキのときとね。

葉山（筆者） お正月の一日に何をするんですか？

新屋のじいさん 農が始まると書いて、ノウハダテ。この石が基本でやったのさ。親類がみんな集まってね、若い人がこの石を使ってワラをたたいて、中年以上は縄ない。

尾形民子さん 一年間使う縄をつくるとか言って、やってたようですよ。

新屋のじいさん 何年ぐらやっていたんだろう？ずいぶん長くやってたんだよね？

尾形民子さん 曾祖母（ピーちゃん）が生きていたときに、やっていたらしいから。私が嫁に来たときはやってなくて、おじいちゃんが

一人でやってたから。だから四〇年ぐらい前までやってたのかしらね。

新屋のじいさん そうだろうね。うちのおじいちゃんが生きてたときには、一緒にずいぶんやったんだよ。

尾形民子さん 一緒にね。

新屋のじいさん ノウハダテのあと、ひいばあさんが餅を焼いてね。

尾形民子さん さつき、千代志さん（注…尾形家の親類

で新屋のじいさんとは別の人物）と「あのときの餅は美味しかった」って話したところね。

新屋のじいさん 焼いた餅に黄粉をまぶしてね。そのときは鹿折（シシオリ）と大島、階上（ハシカミ）で漁業権問題が起きてたのね。

その日は県に交渉に行こうということになって、鹿折漁協の役員が集まって、港のところでバスに乗る準備をしていたの。そうしたら新聞記者が自転車であつたのね。

当時、港の道路は直角に曲っていたん

だけれど、記者はまさか道が直角に曲っていると思わないから、そのまま自転車
で犬と一緒に海に落ちちゃったの。

まだ、この道路がなかった時の話ね。
ここにワラぶち石があったから、この辺
までが板の間の上がり框ね。

このへんに炉があっただね。新聞記
者はその炉のところで旦那さんの着物を
着て座ってたのね。それで県会議員の人
たちと写真撮った。そういう記憶もある
ね。

あと、お宅のそちらに長屋門があっ
たね。ススハキのとき、俺、何かの理由で
遅く来たのね。「新屋、すぐに生まれ！」っ
て言うから、「はい」って言って、玄関
のところ上って行ったのさ。それで、手
で柱を掴んだら、冷たい（しゃらひゃつ
こい）の。

そうしたらへびを掴んでいて、へびと
一緒に下に降りたの。そうしたら（尾形
家の）旦那さんが、「我が家の宝物だけ

ら殺さないでけろ」って。だから殺さな
かったけど。

尾形民子さん アオダイシヨウ？いたったんだ？

新屋のじいさん いたの、いたの。これくらい
のへびに掴まって屋根に上ろうとした
ら、へびが降りてきてさ。

尾形民子さん へびがいたんですね、昔。

新屋のじいさん いたの。いろいろな経験があるよ。

歴博研究映像「モノ語る人びと―津波被災地・気仙沼から」
より会話を抜粋。

この出来事は、まるで聞き取りの教科書のようなもの
だった。しかしこの出来事によって、物質文化、モノをめ
ぐる語りのおもしろさ、重要さに気付かされたのである。

この語りのポイントは、一つのモノに対して、複数の時
間のなかで経験した事柄が具体的に語られている点であ
る。まず、新屋のじいさんはノウハダテの年中行事につ
いて語る。そのあと続けて、自分のおじいさんといっしょに
ノウハダテに参加した話をし、そのときに振る舞われる餅
のうまさについて語っている。さらにワラブチ石の周辺で
起きた出来事として新聞記者がやってきたときに、誤って



写真 12 整地された土地からワラブチ石を発見

海に落ちた話、あるとき年中行事に遅れてやってきて急いで長屋門に登ったところ、そこにへビがいて掴んでしまった話へと展開していく。このように時間の位相の異なる複数の話が、ワラブチ石という、かつて、おそらくその人の身体的な経験を支えたであろうモノをめぐって克明に語られるのである。

こうした経験を踏まえてみると、物質文化は人びとが経験した具体的な記憶にアクセスする手段として有効であると考えられる。そこで以下では、物質文化と語りのかかわりについて考察しよう。

《モノを語ることの意味》

一般的に文化財レスキュー活動とは、災害等に被災した地域で失われようとしている文書や民具などの物質文化を救う活動をいう。災害が起きると、その直後から地域の博物館や資料館、個人の住宅などに所蔵されていた地域の歴史や文化を伝える文書や民具などは、所在が不明になり、廃棄される危機に晒されたりすることが多い。とくに個人の住宅で所蔵している文書などは、その価値が認識されることがないまま、廃棄されることもある。こうした古い文書や民具などは、過去の遺物として未来の生活のなか

では必要のないものとみなされがちなのである。

そこで文化財レスキューという枠組みが、一九九五年の兵庫県南部地震をきっかけにできた。現在、文書や物質文化などの歴史資料を守り、地域の歴史を掘り起こすことを目的として歴史資料ネットワーク（以下、資料ネット）が各都道府県にできつつあり、日頃から資料の所在確認や被災した資料の修復・保存などの活動を続けている。組織化が進むなかで、次第に物質文化に注目する動きもみられるようになってきているが、資料ネットが注目してきたのはどちらかといえば、文書に書かれたテキストであった。つまり、行為や行為をめぐる記憶に注目するというよりは、書かれたものから地域の歴史を再構成する試みである。

一方、民具などの物質文化についても、博物館や大学が関わって保全し、その意味を調査から付与して地域文化を掘り起こしていこうとする試みが続けられている。たとえば、東北学院大学の加藤幸治は、宮城県石巻市鮎川で、東北方太平洋沖地震で被災した民具収蔵庫の資料を救い、保全するとともに、資料の背景情報を地域の人びとに語りてもらふことを通じて蓄積し、再資料化する試みを続けている（加藤 二〇一七）。

モノを博物館資料として收藏する場合、モノの背景情報

をどれだけ蓄積しているかは、極めて重要な要素となる。そこで加藤は資料カードが失われた資料群を博物館資料とするために、人びとがモノに対してもつ記憶と語りに注目した。筆者が人びとの語りに注目するようになったきっかけも、加藤が鮎川で行っている活動に少なからず影響を受けている。

ここで注目する「語り」とは、生活用具や文書などの物質文化（モノ⇨家財）について語る行為のことである。つまりモノについて語る、モノを起点として関連づけられる事柄について語ることが、ここで取り上げる「語り」である。

森一郎は物語の意味を、耳なし芳一の話とオデュッセイア第八歌を事例として考察している（森 二〇〇五）。森によれば、耳なし芳一の話では平家の亡霊が夜な夜な琵琶法師の芳一に平家滅亡の下りを話させ、それに涙する話も、またオデュッセイアにおいて王がトロイ戦争での出来事聞いて涙する話も、「物語る」行為を取り上げたものだとする。そして森は、両者の話は、「過去を背負い、記憶と想起という根本能力をもつ時間的存在である人間は、物語るといふ行為によっておのれの存在と折り合いをつける」「物語ることの意味」を確認する自己反省の作業（森 二〇〇五 四六頁）がモチーフになっていると指摘する。

語る行為も、津波という災害を経て、災害前の暮らしや災害の記憶を含む過去と人びとがどのように折り合いをつけて、未来に向けて生活を構築していくのかという点に注目した。被災地に関わるなかで理解したのは「復興」という言葉が元に戻ることを想定して使われるのに対して、実際は災害をきっかけとして新しい営みをはじめ、決して過去の状態には戻れないという現実であった。そうしたなかで、人びとは新しい暮らしを構築していくことになるが、それは過去との連続性や過去に対する位置付けのもとに構築されるものなのだというのを、人びとの「語る」という行為に接することで学んだのである。

先に述べたように、二〇一一年の災害のあと、宮城県気仙沼市の小々汐地区にあった築二〇〇年の住宅、尾形家住宅で文化財レスキュー活動として、生活用具や文書などの物質文化（モノ＝家財）を収集して保存する活動にたずさわってきた。私たちは当初、地域の人びとが被災した家屋や家財から必要なものを拾い出し、生業に必要な漁港を復旧する活動が進むなかで、尾形家住宅から家財を集めた。その後、重機が入り、被災したモノが瓦礫として撤去されるなかで、瓦礫を撤去する業者の援助を受けながら活動を続けた。

被災の現場に立ち、人びとの活動をながめながら、また自分も家財を集める活動に携わることによって、私は被災の現場で状況を傍観する立場ではなく、直接的に状況を観察し、また参与する立場に立つことになった。その結果、私たちが被災したモノのなかから引き出したモノを所有者や地域の人びとに見せることで、モノに関わる記憶が語られる現場に立ち会うことが多くなった。話を聞くなかで、モノの所有者や地域の人びとの語りは過去の一点のものだけではなく、いくつもの時点で起きた多様な経験であることに気付いた。

さらに家財の洗浄や資料化の過程においても、人びとが語る行為に出会うことになった。これまでみてきたように、二〇一一年六月以降、尾形家から集めた家財の泥や塩分を落とし、資料として保管する活動をはじめた。作業は気仙沼市内から集まった方々の力を借りた。整理作業には、被災によって一時的に職を失った方々が、緊急雇用に応募して来てくださった。集まった方々の多くは、長らく水産加工の工場に務めてきた人や飲食店の店主など、文化財や文化研究とは全く関係のない経験をしてきた。

文化財や文化研究に関わりがないから文化に無理解なのではなく、携わった人びとは活動を通して、モノをみて、

それについて語り、教え合うことで気仙沼という場所、あるいは自分の人生自体を位置付けていく過程が作業のなかにみられた。また資料をどのように扱うかという方針も、人びとが過去にそれぞれの職業を通じて培った技術や記憶が活かされてきた。そしてそれを行動で示し、人びとに理由を語って知識を共有してきた。

こうしてみると、モノを通して人びとは自らの記憶にアクセスし、それを具体的に語る事が可能になることがわかる。しかも発話することにより、発話した人は周囲の人びとと経験を共有することになる。つまりモノについて語ることは、共通の経験を共有し、あるいはそれぞれの経験を擦り合わせ、共通の記憶へと作り上げていく過程であると言える。

《歴史文化研究拠点としての「被災文化財」整理》

以上に見てきたような、モノについて語る行為の一つ一つは、他愛のないものである。つねに人が集まり、そこで作業をし、また作業の合間に経験を語る行為が連続していくことによって、結果として尾形家の被災家財の整理に関わってきた人びとは、地域の歴史や文化に詳しくなり、自分の住む土地を再認識するようになっていく。

このことは、災害をきっかけとして物質文化を収集し、それを整理する場が設けられたことが、結果として地域文化について深く知るための「場」として機能するようになっていくことを意味している。つまり、資料整理の過程そのものが被災した物質文化を活用し、地域文化の再発見をする場を形成していたのである。

先に述べたように、小々汐大家・尾形家の住宅を対象として被災した家財を救う活動は、文化財レスキューであると同時に、展示制作に向けた調査の意味合いをもっていた。それが文化財レスキューという活動の目的に照らし合わせて、良かったかどうかは判断のあるところだろう。しかし展示という目標があったことが、救う場面においても具体的な生活像を想定することになった。そして整理においても救った成果を地域文化を再発見する営みに活かすことができた。地域の人びとは自らの経験を語ることで、地域の生活をより精緻に知るようになっていったのである。

歴博は博物館型研究統合という考え方を掲げているが、その意味は調査（インプット）を経て、展示（アウトプット）を行い、アウトプットによって得られた反応を蓄積して、それらを資源とし、その資源を活用した調査・展示を



写真 13 作業場でモノを囲んでそれぞれの経験・記憶を語る

するという循環を構築することである。博物館型研究統合の理念は、アクション・リサーチと読み替えることもできるだろう。対象に対する働きかけに対してそのレスポンスを得て研究を進め、その研究の成果を資源として改めて対象に還元し、その還元したことによって得られた反応を研究に活かしていくという一連の流れをアクション・リサーチという。

こうしてみると、気仙沼市における尾形家資料の整理をしている作業場は、外部の研究者（歴博の職員）と地域の人びと、行政（気仙沼市教育委員会）が関わり形成された歴史文化研究の最前線であり、アクション・リサーチが行われている場として位置付けることができるだろう。

■参考文献

加藤幸治「復興キュレーション 語りのオーナーシップで作る伝える。くじらまち」社会評論社 二〇一七年。

森一郎「物語ることの意味…「耳なし芳一のはなし」と『オデュッセイア』第八歌」『東京女子大学紀要論集』五五（二）三一～五四頁 二〇〇五年。

●失われる風景のなかで

災害から八年が立ち、小々汐の姿は見違えるようになった。かつて尾形家住宅を含め住宅が建っていた海岸線は、作業小屋だけが建つ場所へと生まれ変わり、尾形家のあった場所は気仙沼大島の架橋に続く道として高い土塁の下となった。また小々汐に限らず、気仙沼の海岸線は高い防潮堤で囲われることになった。

本稿では、物質文化に焦点を当てて、その保全について述べてきたが、風景もまた人びとの身体を支えてきた構造物であったはずである。こうした風景、生活を構成していた構造物が大きく変わることは、津波を防ぐという一点をみれば良いことなのかもしれないが、一方で人びとの身体を支えてきた構造物の喪失であるとも言える。

そのことは、ワラブチ石の経験でみたような具体的な生活の記憶を失う過程として理解することもできる。つまり身体を支えてきた風景が失われることによって、記憶は引き出される機会を失い、それは永遠に語られなくなっていくってしまうのである。

人間さえ生き残れば、記憶はいくらでも語ることができるとするのは幻想であって、人びとは経験を語るときにや

はり言葉を発するきっかけが必要なのである。

ガレキ撤去の事業のなかで、生活を構成していた物質文化が失われ、大規模な土地改変によって風景が失われていく。一見、全く異なる事柄のようであるが、どちらも人びとの記憶のよすがであり、物質文化や風景が人びとの記憶や生活文化を担保しているとも言えよう。

つまり物質文化や風景の喪失は、記憶の喪失のきっかけであり、また文化の存続を危うくする出来事なのである。だからこそ、人びとは記憶のよすがとして、供養碑や記念碑を建てて出来事を記念し、思い出すきっかけをつくらうとしてきたのだとも言える。

災害時だから、緊急時だからとして、文化は後回しになり、新しいインフラができたときには、すでに振り返る手段階が残されていないということは、被災地においてしばしば起きることである。しかし過去を振り返ることは、昔を懐かしむということ以上に、それまでの生活の有り様を検証し、新たな生活を営むときに必要なことである。そうしたことのために、物質文化は保存される必要があるのだらう。



写真 14 被災前の小々汐の姿（1985年、川島秀一氏撮影）



写真 15 2018年2月現在の小々汐の姿



資料編

この資料編は2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震による津波被害を受けて、国立歴史民俗博物館（歴博）が宮城県気仙沼市小々汐の尾形家住宅で2011年4月から同年12月にかけて実施した被災家財の収集の記録である。

これらの報告を作成したのは、おもに当時、気仙沼で中心となって活動した本ブックレットの筆者である葉山茂である。筆者は2011年4月20日に小池淳一教授から声をかけられて、尾形家の家財収集に関わるようになった。これらの記録を残した目的は2つあった。

一つは当時、館内においても文化財レスキュー活動についての情報が十分ではなかったことが挙げられる。こうした状況のなかで館内に情報を共有することが目的であった。もう一つの目的は、館外に活動とその意味を周知することであった。これは、当時、多少なりとも文化財レスキュー活動が社会に知られるようになっていくなかで、活動の成果を広く社会に共有することが結果的に活動を続ける原動力になるという目論見があった。

一つめの目的については、当時の館内研究部でも、一部に文化財レスキューに懐疑的な研究者がいた。被災地で地域の人びとの生活に何が起きており、何が問題になっているのかがほとんど伝わっていない状況があったのである。まして、私たちが集めていたのは指定文化財ではなく、専門家による価値付けがされていない家財であった。そこで、記録を作って問題を共有し共通の問題意識をもつことが、この活動を続ける上での重要な課題となっていたのである。

二つめの目的については、いくつかの具体的な対象があった。一つには、地域の方々である。もちろん被災直後ということもあり、インターネットなどの情報インフラも整っていない状況もあったため、すぐに届く可能性は低いことは想定できたが、被災の現場で私たちが何をしているのかを説明することは重要であると考えた。

もう一つの対象は博物館に目を向けて、気にかけてくださるの方々である。そうした方々に情報を共有することで、博物館が現在、何に直面し、どういう挑戦をしようとしているのかが伝わり、気にかけてくださる方が一人でも増えるという願望であった。

さらにもう一つの対象は、マスメディアである。被災の現場で活動を続けて

いく際、マスメディアとの関係の作り方は非常に難しい問題であった。被災地での文化財レスキュー活動は、場合によっては被災文化財の救出のためにガレキ撤去作業を止める場合もあった。そのことは「文化財レスキュー」という活動が、一部のマスメディアにとっては津波災害に遭われた方々の願いを無視し「文化」を御旗に復興に向けた作業を遅らせるだけの存在に映っていたようだ。そこで少しでも、取材の現場で我々がマスメディアの関係者と出会う前に情報を提供しておこうという目論見であった。

いずれの目論見もそれほど成功したわけではない。ただ結果的に詳細な記録をとったことで、その記録を振り替えて本編に述べたようなモノと人びとの記憶に結びつくヒントを蓄積することができた。ここで2011年の資料を提示するのは、物質文化を救う意味を考え、検討してきた軌跡をひとまとめにしておこうと考えるからである。

この資料編に載せた資料は、基本的には歴博のホームページ (https://www.rekihaku.ac.jp/others/news/effort/hisaichi_houkoku/) に掲載したものである。しかし筆者が提供した資料のなかには、私から事務に資料が手渡されホームページで公開される過程で大きく改変されたものがあった。具体的には書かれた内容のなかで、事務で不要と考えた文章を削除し、写真だけを残して掲載したものが少なくとも3件ある。それらの資料については、資料性を考慮して、ホームページに掲載されたバージョンを「ホームページ公開バージョン」と表記して本稿にも掲載した。一方、ホームページ公開バージョンに対して非公開にされた原本も並列して掲載することとし、「原稿の原本」と表記した。

一方で作業の参加者については、原本には詳細な記述があるが、活動に参加されたボランティアの方々については個人情報保護の観点から消去し、「組織名：○名」あるいは「ボランティア：○名」のように表記することとした。したがってかつてのホームページ公開バージョンよりも、個人名については管理を厳しくしている。

本資料の筆者は、とくに記述がない場合は葉山茂が担当したものである。別の筆者については各報の始めに筆者名を明記した。また本ブックレットは縦書きを基本としているが、活動報告は横書きである。したがって本ブックレットの終わりから前方に向けてページを並べることで横書きに対応した。

●掲載した報告書一覧（公開状態・執筆者・作成日を含む）

活動報告の号数	公開状態	執筆者	作成日
第1報	ホームページにて公開	松田睦彦	2011年4月6日
第2報	ホームページにて公開	葉山茂	2011年4月25日
第3報	ホームページにて公開	葉山茂	2011年4月30日
第4報	ホームページにて公開	葉山茂	2011年5月8日
第5報	ホームページにて公開	葉山茂	2011年5月14日
第6報	ホームページにて公開	葉山茂	2011年5月24日
第6報（原稿の原本）	公開のための改変前の原稿	葉山茂	2011年5月24日
第7報	ホームページにて公開	葉山茂	2011年6月3日
第7報（原稿の原本）	公開のための改変前の原稿	葉山茂	2011年6月3日
第8報	ホームページにて公開	葉山茂	2011年6月12日
第8報（原稿の原本）	公開のための改変前の原稿	葉山茂	2011年6月12日
第9報	ホームページにて公開	葉山茂	2011年6月21日
第10報	ホームページにて公開	葉山茂	2011年6月28日
第11報	ホームページにて公開	葉山茂	2011年7月5日
第12報	ホームページにて公開	葉山茂	2011年7月12日
第13報	ホームページにて公開	葉山茂	2011年7月19日
第14報	ホームページにて公開	葉山茂・柴崎茂光	2011年7月25日
第15報	ホームページにて公開	葉山茂	2011年8月3日
第16報	ホームページにて公開	葉山茂	2011年8月9日
第17報	ホームページにて公開	葉山茂	2011年8月24日
第18報	ホームページにて公開	葉山茂	2011年9月6日
第19報	ホームページにて公開	葉山茂	2011年9月13日
第20報	ホームページにて公開	葉山茂	2011年9月20日
第21報	ホームページにて公開	葉山茂	2011年9月27日
第22報	ホームページにて公開	葉山茂	2011年10月4日
第23報	未公開	葉山茂	2011年10月7日
第24報	未公開	葉山茂	2011年10月25日
第25報	未公開	葉山茂	2011年10月30日
第26報	未公開	葉山茂	2011年11月15日
第27報	未公開	葉山茂	2011年11月28日

注：公開状態の欄で「ホームページにて公開」としているものは、すべて2011年中に国立歴史民俗博物館のホームページ（https://www.rekihaku.ac.jp/others/news/effort/hisaichi_houkoku/）に掲載したものである。

[第1報] 気仙沼被災状況視察報告

1. 日程

4月4日 ・気仙沼港湾，市場周辺を視察

・リアス・アーク美術館到着，川島副館長より被災状況，館の活動の現況，今後の予定等をうかがう。食料品を中心とした支援物資も届ける。

4月5日 ・小々汐地区ではオーイ（総本家）の尾形夫妻が出迎えてくださった。被災状況を観察，確認の上，説明を受け，写真・ビデオ等で撮影。避難所となっている浦島小学校へ支援物資を届ける。

・リアス・アーク美術館で展示スペースの損傷状況の説明を受ける。併せて写真撮影。

2. 必要な支援（川島副館長との面談から）

- ・民具，生活用具の保全
- ・古文書，写真等の保全
- ・聞き取り

3. 支援体制の構築

- ・被災地と歴博のネットワークの構築
- ・伝承の断絶に備える
- ・支援の視点・方法の発信，連携の模索

〔第2報〕 気仙沼被災文化財支援に向けての調査報告

1. 日程

- 4月22日 ・エース・ポート（大島行連絡船事務所）2階の被災漁具を調査。搬出作業にも従事（リアス・アーク美術館に預かる）
・気仙沼市水産振興センターで近代史料の状況を確認（全て流出）
・岩井崎プロムナードセンターで被災状況を確認（壊滅。2階部分は調査不可能、若干の表面採集のみ実施）
- 4月23日 ・一関市博物館視察（震災の被害は展示には及んでいない模様）
気仙沼市小々汐、梶ヶ浦地区被災状況を調査。小々汐は集落の集会所等は撤去。解体を拒む尾形家の看板を確認。続いて同市唐桑町宿浦の早馬神社を踏査。被災状況は小々汐、梶ヶ浦等と同様かそれ以上。
- 4月24日 ・小々汐において熊谷総業の主導による「尾形家修復保存計画プロジェクト」の会議に参加。解体～保存～再建の方向性を確認。

2. 状況整理

(1) 文化財救出の現状

瓦礫の片付けはそれほど進んではいない。従って文化財の救出もほとんど手つかず。ただし、行方不明者搜索等が優先されることから、集落単位での多様な文化財の救出はあまり現実的ではなく、民俗文化財、生活用具等を中心に関連する（であろう）史料の保全を図るのが現実的であろう。

さしあたっての救出ポイントとなるのは、公営の施設における文化財の安否確認と救出活動であろう。具体的にはエース・ポートや岩井崎プロムナードセンターとその周辺における漁具等の表面採集作業であり、それを現地の研究者の指導のもと、民俗学の知識のある者が行い、救出した物はリアス・アーク美術館に搬送した上で、洗浄、調査カード作成などを行う。

(2) 尾形家住宅の現状

小々汐地区は行方不明者搜索のために、自衛隊による瓦礫の移動が既に行われた。それに伴い、集会所は撤去された。尾形家の屋根部分は撤去を拒むかたちで保存されている。24日には、2009年に屋根の葺き替えを実施した熊谷産業（石巻市）が中心となって実行委員会を作り、残された屋根及び屋根組みの部分の解体・保存、さらには将来的には現地での再建をめざすことが確認された。さしあたり連休期間に解体作業を行い、行方不明者搜索に協力するとともに、屋根下に流出を免れた文化財がないか、どうかの調査を実施することとなった。この事業は地元の承認、莫大な資金が必要であり、先行きは明瞭とはいえないが、文化財の地元保存のため、また尾形家の意向を最大限尊重するためにも、これに協力していくべきであろう。

3. 被災地文化財の支援プログラム案

- (1) 地元の要請に基づいて被災場所を選択し、そこでの民俗文化財等の救出作業を行う。

これには地元の博物館相当施設であるところのリアス・アーク美術館のチームに歴博から機関研究員が加わり、支援をする。

- (2) 救出した文化財はリアス・アーク美術館で保存し、洗浄作業を行う。これをさらに整理し、資料台帳を作成する（後日の返却を期する）。この作業にも歴博から研究支援推進員を派遣し、支援する。
- (3) 尾形家住宅に関しても上記1、2の一環として、注意して対応し、被災した生活用品、文書類の保全を行う。
- (4) さらにリアス・アーク美術館を拠点として被災と復興を主題とした共同研究を立ち上げ、有形・無形の民俗文化財の継承・保存、地域の研究力の復興を目的とした組織作りを行う。中長期的には一連の作業の過程を記録し、さらにそこから明らかになる文化財支援の留意点や課題を発信する。
- (5) 平成25年3月の民俗展示オープン時に、以上の活動の成果をテーマとした副室における特集展示を行い、博物館型研究統合の実践例として発信する。

【第3報】2011年4月30日作成

【第3報】気仙沼被災文化財支援に向けての活動報告および5月の活動の予定

I 活動報告：元興寺文化財研究所における被災文化財支援レクチャー

8名で奈良県生駒市にある元興寺文化財研究所・保存科学センターを訪問し、同研究所研究部の雨森久晃伝世資料修復室長および同研究部の上田直見副部長・保存科学研究室より被災文化財救出に関わる基礎的な知識およびノウハウをレクチャーしていただいた。

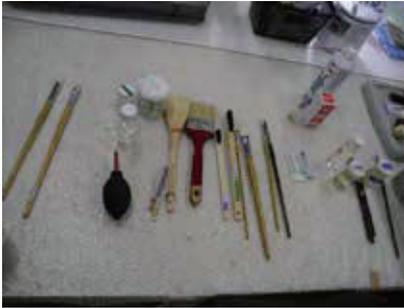
津波によって被災した文化財の救出では乾燥とクリーニングを基本とし、状況に応じて脱塩作業をする。以下、被災文化財支援に必要な基礎知識の要点を列挙する。

1. 現場での被災文化財への緊急対応ではまず、どれだけ文化財を回収できるかが問題となる。津波によって流失した文化財が多いことが予想されることから、まずは回収に全力をあげる必要がある。
2. 津波によって文化財の金属劣化が起こり、続いて木質部の変化が起こることが予想される。したがって致命的な劣化・破損が生じる前に文化財を救出する必要がある。
3. 被災文化財を発見・回収したときの状況を写真や映像を含めて記録しておく、文化財が津波によって分解している場合にも後々修復・復元しやすい。
4. 発見・回収した資料はタグで管理する。またタグにカラービニールテープを用いると文化財の回収地域や種別などを区別しやすい。洗浄によってタグに記載した内容が消えるのを避けるため、水に溶けず鉛筆書きができるマイラー紙（製図用トレースタ）を用いるとよい。
5. 回収した文化財は乾燥してブラシや刷毛、筆などを使ってクリーニングするのが基本である。文化財の状態によるが、墨書などの文化財は水洗によって破壊することもあるので注意が必要である。
6. 文化財に付いた泥が多く、水洗が可能なときは水洗をしてから乾燥させることもできる。
7. 文化財を乾燥するときは文化財の材質に注意する。文化財は材質によって適度に湿気を与えながらの乾燥が必要なものと速乾が必要なものがある。木材は過乾燥によって変形する危険性があるため、適度に湿気を与えながら乾燥する。また金属と木材の複合品では木材のケアを優先して乾燥する。
8. 湿気を与えながらの乾燥ではカビの発生に注意をする。カビが発生するとカビの色素が文化財に付くことがある。発生したカビはブラシなどで落として70%のエタノール水溶液を噴霧し、カビの繁殖を防ぐ。
9. 文化財の塗料が剥がれ落ちていたり、部品が壊れかけていたりするときは部位・部品類の離散を避けるため、破片や部品などを集めて袋などに入れて保管する。
10. 上記の処置をして腐食や繊維の崩壊などが起きるときには、文化財の脱塩が必要となる場合もある。脱塩には本来、イオン交換水をつかうが、現地での緊急対策としては水道水をつかった脱塩で十分である。水槽にいった水は1週間を目安に交換する。
11. 分解している文化財は無理に接着剤などを使って接着せず、ひもで縛るなどしてひとつにまとめておく。接着剤は落ちにくいので、のちの修復が困難になる場合も多い。
12. 現場での文化財に対する応急処置は完璧を期すことは困難であり、日常生活でのカビ対策や汚れの除去などの知識に基づいて活動をすればよい。

II 活動のために必要となると予測されるもの

- 記録用：タグ用マイラー紙（製図用トレースタ）、カラービニールテープ、タコ糸
- 資料の離散防止：チャック付きビニール袋
- クリーニング：各種刷毛・ブラシ・筆類、ピンセット、綿棒、竹串、歯ブラシ、手動式ブロワー、スプレー式ブロワー、霧吹き、薬剤保存瓶、古布、マスク、手袋
- 過乾燥の防止：新聞紙、和紙、サラシ、ブレンマー（水溶性木材形状安定剤）

- 乾燥・カビ防止：ドライヤー、エタノール
- 脱塩：タッパー、コンテナ、バケツ、衣装ケース等水槽、ブルーシート、資料の緩衝材（フェルトなど）



クリーニング用品各種



クリーニング用に毛先を加工した筆



マイラー紙に 用途別タグ分類用ビニールひも
よる資料整理
タグ



金属片の脱塩作業

Ⅲ 5月中の被災文化財支援の予定

以下の予定で機関研究員・葉山がリアス・アーク美術館の川島秀一副館長の指示と助言のもとで気仙沼市での被災文化財の状況確認を行い、同時に歴博、リアス・アーク美術館と連絡をとる。葉山が日報を提出することを通じて、第4展示室リニューアル委員会メンバー及び館全体で活動の現状と課題を共有する。葉山の日報と連絡にもとづいて民俗研究系教員を中心に被災文化財の救出を行う。

●葉山の気仙沼市における活動予定：5月

- 5月6日（木）-9日（月）：尾形家屋根部分解体に伴う民具等の救出（文化財救出の実験）
- 5月11日（水）-13日（金）：民俗文化財の救出および洗浄（洗浄・保存環境の準備）
- 5月18日（水）-20日（金）：民俗文化財の救出および洗浄（洗浄・保存の実験）
- 5月26日（水）-28日（金）：民俗文化財の救出および洗浄（救出地域の拡大の模索）

[第4報]気仙沼被災文化財支援の調査報告

1. 作業内容

気仙沼市小々汐地区・尾形家の屋根内の状況確認調査

2. 経緯説明

5月5日、気仙沼市小々汐地区の尾形健氏の住宅屋根部分の解体をしている熊谷産業(釜石市)の担当者、田揚裕子氏に葉山が解体作業の状況を確認したところ、屋根内に入れる状況になっていることが報告された。また9日には屋根の解体をすべて終わるとの見通しが示されたため、解体される以前の屋根内の状況確認と資料回収が急がれると判断し、尾形健氏および川島秀一リアス・アーク美術館副館長に連絡の上、川島氏と小池・松田・葉山で屋根の梁下の資料回収を行った。

なお田揚氏に連絡した際、すでに屋根から神棚を回収したこと、部屋と屋根が一緒に移動したとみられ、屋根の下に仏壇などが残っている可能性が高いことなどが報告された。

3. 日程

- 5月6日 ・気仙沼市小々汐地区にて川島秀一リアス・アーク美術館副館長、岡野学芸員合流。
尾形家住宅屋根部分の内側に入って屋根内部の残留物の調査を行う。
・川島・山内氏と松田氏でオシラサマ、お札など、発見したものの一部をリアス・アーク美術館に運ぶ。その間に小池・葉山で尾形家の屋敷神、墓の状況を確認。
- 5月7日 ・気仙沼市小々汐地区、尾形家住宅の屋根内（土間部分）に入り、屋根内部の残留物を搜索。
・川島秀一リアス・アーク美術館副館長が文化庁調査官・宮城県文化財担当者とともに尾形家屋根を見学。尾形健さんと合流し状況説明を行う。
・尾形家住宅屋根内部（座敷部分）に入り、残留物の搜索を行う。仏壇を発見。
・川島リアス・アーク美術館副館長と合流。

4. 屋根内の状況

土間と居間の間が壁となって屋根内が2つの空間に分断されている。梁の下に残ったものから判断すると、田揚氏の推察どおり、屋根と柱・床部分は津波によってほぼ一緒に移動し、現在の場所に着地したと考えられる。屋根の形状を手がかりに、屋根の下に残るものの状態を確認すると、部屋の位置とものが発見できる位置とがほぼ一致している。

屋根の梁の下は深いところで2m、浅いところでも1m程度、津波によって運ばれたものが散乱している。また土間付近の梁の下からは瓦屋根が発見できたため、他の家屋または尾形家の別棟の建造物が屋根の下に入り込んでいると考えられる。海水は屋根の一部では津波当時、1mほど冠水したものと予測される [写真1]。

屋根部分についてはほぼ原型をとどめている [写真 2]。ただし場所によっては梁が折れている箇所などが散見される。梁からは大きな空間になっており作業はしやすい状況だが、出入口が非常に狭く中に入るまでに苦労した [写真 3]。



写真 1. 津波によって冠水した部分
(瓦礫から発見したオシラサマ[中央])



写真 2. 屋根裏の状況
(屋根裏は概ね形状を保っている)



写真 3. 屋根裏への入り口

5. 作業成果

屋根の解体作業によって、梁の下に残っているものが破壊される可能性があることを勘案し、今回の作業では物品を救出することを優先した [写真 4]。したがって物品の救出以外の保存・保全処理については泥を多少拭う程度で、それ以外についてはほとんど作業をしていない。



写真 4. 文書の搜索状況

今回の作業で屋内から救出したものの概略

- 紙モノ：はがき類、土地利用関係法改正に関わる書類、お札各種、絵画、書の額、掛け軸、経典、写真類

- 木製品：位牌、仏壇、槌（藁打ち槌?）、糸巻き（障子張りのときに障子戸を立てかけるためにつかわれていた）、曲げ物、大黒、エビス、熊の置物
- 土製品（焼き物）：エビス
- 木・紙複合品：御幣（12本）
- 布製品：オシラサマ
- 金属製品：屋号の焼印（山七：やましち）

基本的に発見できたものに関してはそのまま回収という方法をとったが、仏壇は梁下およそ2mの位置で逆さの状態で見えられた。仏壇は作り付けで壁と一体化しており全体を救出することは、スペースの上でも時間の上でも困難だったため、現場で解体して部材として回収するという方法をとった〔写真5〕。



写真5. 仏壇が発見された隙間：
屋根内部で仏壇があった付近を特定し外部から搜索した結果、外部からみえる隙間の奥2m程度、瓦礫の最深部に逆さの状態の壇を発見した。仏壇は内部から瓦を除去して、隙間にもぐりこんで救出した。

6. 気づいたこと

(1) 作業に関して

- 瓦礫と重要な資料との見分けはかなり難しく、現場に入ってから見分けがつくまで時間を要する。結果的に作業の後半にならないと資料が発見しづらい。
- 津波によって岸に打ち上げられたヘドロが乾燥し、かなりの量が土埃になって空气中に舞っているため、作業中はマスク、場合によってはゴーグル等を着用するほうがよい。
- 鎌など刃物やキリ、釘などの危険物が散乱しており、作業では踏抜き防止インナーソールなどを着用して足を保護することが必須である。
- 運んだ資料のなかにカビが発生しているものがあり、美術館内（建物内）に運ぶことに関して、リアス・アーク美術館から検討を要請された。とくに民俗学で資料となる可能性のある民具などは、使用時からカビや埃が付着している場合も多く、博物館施設に搬入する際のマニュアルを作成する必要がある。
- 民俗を専門としない人たちに運搬の手伝いをお願いする際には、かなり細く適切な指示をする必要がある。付属品などの重要性を伝えておかないと、せっかく発見したものが瓦礫の中に落下して埋没してしまう危険性が高い。今回の作業では運搬をお願いした仏壇の付属品が落下している例が見られた。
- 今回3人で作業を行ったが、3人ではモノの救出が優先してしまい、なかなか記録に手が回らない。映像・写真といった記録もさることながら、環境によってはメモ等の記録も難しいため、作業後に記憶をたどって記録することが多くなる。
- 出入口が極めて狭い場合が想定できるため、資料の運び出しには丈の低いトレイ状のもの、テン箱などを用意することが望ましい。

- 今回の作業は緊急性が高かったことから、回収も最低限のことしかできていない。しかし流出した民具・資料等の回収は極めて時間がかかると認識しておく必要がある。

(2)資料に関して

- お札類など、長い間にわたって蓄積されてきたものは、津波前に大量のねずみの糞が付着するなどしているケースがあり、糞を取り除くなどのクリーニングも必要である。
- お札類、はがきなどの紙モノは濡れたままガラス板などに貼って乾燥させると管理しやすくなる可能性がある。
- 震災から50日程度が経っているが、カビの発生は想像していたより少ない。
- 紙モノで紙と紙が折り重なっているものの多くはカビが生えていないことが多い。
- とくにカビの発生が著しかったものは賞状の筒である。中身はカビが生えていないものの、筒にはカビが発生していた。
- 木材や竹材などで作られた民具はとくに急いで脱塩などの処置をする必要はないと考えられる。
- 大型の家財は現場の状況に応じて解体して回収する必要がある。現場が暗く、全体像が予め把握できていない場合には解体までにどのように全体像を記録するかを検討する必要がある。

7. 今後の課題

今回の作業では緊急性が高かったため、物品の回収を最優先に進めた。その結果、保存作業にほとんど時間を使うことができなかった。今後の課題として以下3点挙げておく。

1. 保存のための体制づくりを急ぐ必要がある。とくにリアス・アーク美術館と話し合いを行い、どこでどのように保存作業を進められるか、具体的に検討する必要がある。
2. 記録が必要であれば、すべてを記録する係を専属に設けることが必要である。回収に携わる人数が少ない場合、作業に集中してしまうことが多いため、方法を確立することが必要である。
3. 保存のため泥落とし用の刷毛・筆・ブラシなどを早急に準備する必要がある。また消毒用のエタノール、霧吹きなど、最低限の準備をしておく。

8. 次回の調査予定

・2011年5月12日(木)～14日(土)

解体が終わった尾形家の下に堆積した瓦礫から、家財・民具等を回収する作業を行うことを最優先にする。場合によっては警察・自衛隊の搜索活動が行われる可能性もあるため、その現場に立ちあって、少なくとも記録等をしておくことが必要であると考えられる。

【第5報】気仙沼被災文化財支援の活動報告

1. 作業内容

気仙沼市小々汐地区・尾形家屋根の下にある瓦礫層からの被災文化財救出活動

2. 経緯説明

前回の被災文化財支援活動（5月6～7日）の際、宮城県気仙沼市小々汐の尾形家住宅屋根部分の解体を担当する熊谷産業・田揚裕子氏より11日に解体を完了するとの見通しが示された。そこで屋根材・梁などが撤去された直後の被災文化財の状態確認と救出を目的として5月12～14日の日程でリアス・アーク美術館と国立歴史民俗博物館が合同で尾形家住宅跡の被災文化財救出作業を行った。

3. 日程

- 5月12日 ・気仙沼市小々汐、尾形家にて川島秀一リアス・アーク美術館副館長・岡野学芸員と合流。屋根の解体がほぼ終了したことを確認。屋根下の瓦礫層で文化財を搜索。
・降雨のため、これ以上の作業は困難と判断し日程を終了。
- 5月13日 ・川島秀一リアス・アーク美術館副館長および岡野学芸員と合流して作業開始。
・12日の搜索で見つけた被災文化財をトラックに回収。応急処置の体制づくりと資料の保管状況の確認を兼ねて、川島・岡野両氏と小池・内田・葉山の計5名でリアス・アーク美術館に運搬。5人がリアス・アーク美術館に行っている間、青木・丸山両氏が尾形家の被災文化財を搜索。
・リアス・アーク美術館において川島・岡野両氏から資料の保管状況および収容可能スペース、修復作業スペースについての説明を受ける。
・川島・岡野両氏と小池・内田・葉山、小々汐・尾形家跡に戻る。
・川島・丸山両氏合流し、気仙大島における神奈川大学の被災文化財支援の取り組みの視察・情報交換のため大島に向かう。小池・青木・内田・葉山で小々汐・尾形家周辺において被災文化財の表面採集を実施。
・リアス・アーク美術館にて川島・丸山両氏と合流し作業終了。
- 5月14日 ・小池・青木両氏、被災文化財クリーニングのための資材を調達。
・内田・丸山・葉山、尾形家跡に到着し、小々汐地区全体に搜索域を広げて被災文化財の表面採集を行う。
・小池・青木両氏、小々汐到着、表面採集に参加。沢水をつかった簡易クリーニングおよびエタノール溶液による殺菌を試験。

- ・小池・青木両氏、リアス・アーク美術館に資材を運搬。この間、内田・丸山・葉山、小々汐・尾形家跡周辺にて表面採集を実施。
- ・小池・青木両氏、小々汐・尾形家跡に戻り、表面採集を実施。

3. 屋根下および集落内の状況

12日の午後2時には屋根が完全に解体され撤去された〔写真1〕。今回の作業では屋根の下に残されていた瓦礫の層に取り残された被災文化財を比較的簡単に回収できるようになった。

一方で梁が撤去されたことで、家のどの部分を探しているのかが分かりづらくなった。また前回の活動時には梁の上を歩くことで比較的安定した足場を確保できていたが、梁が撤去されたことで安定した足場を確保しづらくなり、古釘によるケガの可能性が高まった〔写真2〕。また屋根が解体されたことで外気が容易に入り込むようになったことや雨が直接家財に当たるようになったこと、外気温が上がってきたことなど、文化財を取り巻く環境が急激に変化したことで、被災文化財にカビが発生する事例がみられた。



写真1. 屋根部分の解体が終わった尾形家住宅



写真2. 屋根と梁のなくなった瓦礫層

4. 作業成果

12日の作業では、屋根の解体が終了したことで残された被災文化財を早急に救出する必要があると判断し救出を最優先にした。また被災文化財にカビが発生する例が多く見られるようになったことから、エタノールを噴霧してごく簡易的な防カビ処理をした。なお尾形家住宅に尾形氏のご家族がいらっやっており、記憶をもとに助言をいただいて作業をした。

13日はリアス・アーク美術館を訪問して資料の保存状況を確認し、リアス・アーク美術館での一時保管・クリーニングの課題が浮き彫りになった。現在、リアス・アーク美術館



写真3. 瓦礫の山での表面採集

の外倉庫、トラックヤード、バックヤードに回収した被災文化財を保管している。ただしバックヤードは展示室に近く、展示室内の作品等にカビなどの影響が及ぶ可能性が高いため、大量に運びこむことが難しい。外倉庫、トラックヤードともに保管できる被災文化財の量は限られており、クリーニング体制を早急に整える必要があることがわかった。

13日と14日の文化財救出作業は強風のため、屋根の下の瓦礫層を覆った雨除けのブルーシートを外したり、再びかけたりする作業が危険であると判断し、小々汐の集落全域を対象とした表面採集を行った。

■ 今回の作業で発見した被災文化財

- ・ 紙モノ：常民文化研究所が過去に調査した文書類の一部、お札類、お盆用の掛け軸等掛け軸多数、日記、家計簿、手紙類
- ・ 紙製品：選挙につかった達磨
- ・ 木製品：古文書が入っているとされる和箆筒（3棹、うち1棹は解体した状態で発見）、箱階段、アバ（網漁に使う木製の浮き）、ナワカゴ（延縄の仕掛けを収めておく箆状のかご）、箆、カゴ、釜の蓋
- ・ 金属製品：釜

5. 気づいたこと

(1) 被災文化財の救出活動について

- ・ 前回の作業では梁や屋根は結果的にどこに何があるかを知るための手がかりになっていたが、今回の作業では梁や屋根がすべて撤去されたことでモノの位置を想定しにくくなった。
- ・ 降雨によって視界が悪くなると作業がしづらく、足元も滑りやすくなる。
- ・ 家屋の瓦礫が散乱している状況では釘や木材の刺などが多く出ており危険である。作業に関わる際、破傷風の予防注射などの疾病対策も検討すべきである。
- ・ 屋根が外されたことで、外気が入り込むようになりカビの繁殖が急激に進んでいる。
- ・ 尾形さんのご家族に対する聞き取りから明らかになった津波の流れ方にもとづいて集落全体に搜索範囲を広げて表面採集を試みた結果、集落全体に尾形家の被災文化財が点在していることが改めて確かめられた。
- ・ 集落全体に散乱した被災文化財を救出するために、瓦礫の山ごとに場所を決めて瓦礫を移動しながら搜索することが最適であると考えられる。
- ・ 今回の作業で紙モノの文化財や書籍などを発見した場所は瓦礫の山の下のほうが多かった。紙モノは警察や自衛隊などの搜索活動などによってたまたま表面に出てくることもあるが、多くの紙モノの文化財は瓦礫の底のほうに固まっている可能性がある。

(2) 被災文化財の処理について

- ・ カビ防止のためにカビが発生した被災文化財にエタノールを噴霧したが、その影響については少し時間をかけて検証する必要がある。経過を観察したい。
- ・ 応急処置の際、沢の水が利用できる可能性がある。津波被害によって井戸水の塩分濃度が上がっているとする報告もあるが、沢の水は山の上から流れてくるものなので、応急処置の初動の措置にはつかえるかもしれない。とくに小々汐地区では現場近くで現在も水道が復旧しておらず水道水を得られないので、検討したい。

6. 今後の課題

- ・ 救出作業の際、現地ですでにできる応急処置は何か、美術館・博物館などの施設に運びこんでからすべき作業は何かについて検討が必要である。
- ・ リアス・アーク美術館の一時保管場所が逼迫しており、早急に応急処置のための体制づくりをする必要がある。技術的問題も含めて早急に検討したい。

7. 次回の予定

- ・ 次回の支援予定：5月20日～21日
- ・ 活動内容
 - (1) 回収した被災文化財をクリーニングする方法について実際の作業を行って検証する
 - (2) 尾形家の屋根下の瓦礫層および集落内における被災文化財の救出

[第6報] 気仙沼被災文化財等救出支援活動の報告

1. 活動日時

2011年5月20日～21日(2日間)

2. 作業内容

- ・小々汐地区から回収した被災文化財をクリーニングする方法について検証する
- ・尾形家の屋根下の瓦礫層および集落内における被災文化財の救出

3. 経緯説明

・前回の活動の際、リアス・アーク美術館における被災文化財の保管状況に関して、泥がついたりカビが発生したりしてクリーニングが終わっていない被災文化財を仮保管しておく場所が少ないことがあきらかになった。そのためクリーニング方法を確立し、クリーニングを軌道に乗せることが急務であると判断した。また震災から2ヶ月以上が経ち、小々汐地区においても復興が急がれており、梅雨が近づきカビの発生などによって救出が終わっていない被災文化財がさらに破損する可能性が高まっていることから救出が急がれている。以上の問題を解決するため、気仙沼においてクリーニングと救出活動を行った。

4. 日程

- 5月20日
- ・被災文化財のクリーニングに必要な資材を検討し一関市内ホームセンターにて購入。
 - ・リアス・アーク美術館に到着し、川島秀一副館長と合流。内田・丸山・大木の3名で被災文化財のクリーニング開始。川島氏と葉山の2名で救出した被災文化財の運搬するため小々汐に向かう。
 - ・川島氏・葉山、小々汐地区から救出した被災文化財をリアス・アーク美術館に搬入。
- 5月21日
- ・リアス・アーク美術館に到着し、内田・大木の2名でクリーニング開始。丸山・葉山は小々汐地区に向い、表面採集を行う。
 - ・文化庁・東京文化財研究所・東北大学の合同グループが岩井崎プロムナードセンターに展示し、被災した文化財を回収しリアス・アーク美術館に搬入、意見交換。

5. 今後の活動予定

気仙沼市における今後の被災文化財救出支援活動は以下のように予定している。

- (1) 5月31日～6月3日(4日間)
- (2) 6月8日～10日(3日間)
- (3) 6月15日～17日(3日間)
- (4) 6月22日～24日(3日間)
- (5) 6月28日～30日(3日間・調整中)



写真1 救出したアバ



写真2 アバのクリーニング



写真3 木製札のクリーニング



写真4 紙製札のクリーニング



写真5 オシラサマの箱の
クリーニング



写真6 クリーニング前のオシラサマ



写真7 クリーニングしたオシラサマの布



写真8 小々汐地区の河川を清掃する
自衛隊

20110524/

【第6報】気仙沼被災文化財等救出支援活動の報告

内田順子・丸山泰明・大木洋子・葉山茂

活動日時

2011年5月20日～21日（2日間）

1. 作業内容

- ・小々汐地区から回収した被災文化財をクリーニングする方法について検証する
- ・尾形家の屋根下の瓦礫層および集落内における被災文化財の救出

2. 経緯説明

前回の活動の際、リアス・アーク美術館における被災文化財の保管状況に関して、泥がついたりカビが発生したりしてクリーニングが終わっていない被災文化財を仮保管しておく場所が少ないことがあきらかになった。そのためクリーニング方法を確立し、クリーニングを軌道に乗せることが急務であると判断した。また震災から2ヶ月以上が経ち、小々汐地区においても復興が急がれており、梅雨が近づきカビの発生などによって救出が終わっていない被災文化財がさらに破損する可能性が高まっていることから救出が急がれている。以上の問題を解決するため、気仙沼においてクリーニングと救出活動を行った。

3. 参加メンバー

国立歴史民俗博物館：内田順子・丸山泰明・大木洋子・葉山茂

リアス・アーク美術館：川島秀一

4. 日程

5月20日

- 10:30 トヨタレンタカーノ関駅西口店に集合し、出発
- 11:00 被災文化財のクリーニングに必要な資材を検討し一関市内ホームセンターにて購入
- 13:40 リアス・アーク美術館に到着し、川島秀一副館長と合流
- 14:00 内田・丸山・大木の3名で被災文化財のクリーニング開始。川島氏と葉山の2名で救出した被災文化財の運搬するため小々汐に向かう
- 16:00 川島氏・葉山、小々汐地区から救出した被災文化財をリアス・アーク美術館に搬入
- 17:30 作業を終了し、一関市内の宿へ

5月21日

- 7:30 一関市内の宿を出発
- 9:00 リアス・アーク美術館に到着し、内田・大木の2名でクリーニング開始。丸山・葉

山は小々汐地区に向い、表面採集を行う。

14:00 文化庁・東京文化財研究所・東北大学の合同グループが岩井崎プロムナードセンターに展示して被災した文化財を回収しリアス・アーク美術館に搬入、意見交換。

17:30 作業終了、一ノ関駅へ

19:55 一ノ関駅から新幹線で帰京。

5. 作業成果

(1) クリーニング

今回の活動では被災文化財のクリーニングを試した。クリーニングにあたって、段階的な試験した。まず第1段階は日常生活のなかでも投げられたり、海水につけられたりというように比較的扱い上の注意が少ない木製の民具、アバ（漁網につけるウキ）のクリーニングを試した。第2段階では表面に書や印刷が施された木製品、木製札のクリーニングを試した。木製札のクリーニングをするうち、札の多くに紙がまかれている場合が多いことがあきらかになった。そこで紙単体での扱いを検証するため、紙製札をクリーニングした。このほかに救出したオンラサマの布部分のクリーニングを試みた。クリーニングは基本的に2度水に浸けて泥をとる方法をとった。

a. アバ

アバに関しては日常生活のなかでも海水への投入、急激な乾燥が繰り返されていることを踏まえて、比較的洗浄しやすいと判断した [写真1]。

1日目の作業では2度のクリーニングをした。1度目は固めの刷毛で表面の泥を落とし、孔の部分に竹串を挿し込んで泥を落とす作業をした [写真2]。2度目のクリーニングでは柔らかめの刷毛で泥を落としキッチンペーパーで表面の水分を拭き取った。その後80%程度のエタノール溶液を霧吹きで噴霧した。

2日目の作業でも2度の水洗いをしたが、資料の状態と点数の多さや作業効率などを考え、2度目の水洗いも固い刷毛を使った。クリーニングが終わったアバはキッチンペーパーで水分を拭き取りエタノール溶液を噴霧し、再びキッチンペーパーで包んで乾燥させた。



写真1. 救出したアバ



写真2. アバのクリーニング

b. 木製札

木製札も2度洗浄した。まず水に浸けた上で、柔らかい刷毛をつかって泥を落とした。その上で水を入れ替えて、柔らかい筆で二度目の洗浄を行った [写真3]。洗浄が終わった木製品はキッチンペーパーで水分を拭きとった後エタノール溶液を噴霧し、キッチンペーパーに包んで光の当たらない室内に搬入して乾燥させた。



写真3. 木製札のクリーニング

c. 紙製札

紙製の札は乾いた状態で多少泥を落とした後、水に浸けて筆を使って泥を落とした。乾いたまま泥を落とそうとすると、紙の表面を破損する可能性があったことから、早めに水に浸けた。

一度泥を落とした札はもう一度水を替えて細かい泥を落とし、キッチンペーパーで水気を吸ったあと、エタノール溶液をかけてキッチンペーパーに包んで光の当たらない室内に搬入して乾燥させた。



写真4. 紙製札のクリーニング

d. オシラサマ

救出したオシラサマは油と泥と水が付着していた。そのまま放置した場合にカビが発生し布に色移りする可能性があったことから、緊急と判断した。

オシラサマの場合、かかっている布の順番が重要と判断しすべての布を一度外から内に向かって、順番にすべて写真撮影を行った。その上でオシラサマ2体が入っていた木製の箱と蓋をクリーニングした [写真5]。クリーニングでは刷毛を使って水洗いをした。2度、水の中でクリーニングを行い、表面の水分をキッチンペーパーで拭きとった後、再びキッチンペーパーで箱と蓋を包んで光の当たらない室内に搬入して乾燥させた。

2日目の作業で、布部分をクリーニングした [写真6]。布部分についてはオシラサマの性質上、布の順番を重視し、外側から一枚ずつ水洗いする方法をとった。本来的には最初にすべて順番をつけて乾燥させてから落とせる汚れを落としてから水に浸けて、汚れを落とすのがよいとされているが、作業スペースが狭く布を乾燥させる場所を確保できないことから、一枚ずつ剥がして洗浄し、メッシュの袋に入れて袋にタグを付けて管理する方法を考えた。



写真5. オシラサマの箱のクリーニング



写真 6. クリーニング前のオシラサマ



写真 7. クリーニングしたオシラサマの布

洗浄は 2 回行い、1 回目に水洗いで大方の汚れを落とし、水を替えて 2 回目に細かな汚れを落とした。その後、吸水性の高いスポンジタオルで表面の水分をとった後、エタノール溶液を噴霧した。

最初、乾燥させるときにキッチンペーパーの上に直接置いてみたところ、キッチンペーパーへの色移りが起きた。そこでメッシュの袋の上に置くという方法に切り替えた [写真 7]。

■ 今回、クリーニングした被災文化財
アバ (47 点)、木製札 (20 点)、紙製札 (2 点)、オシラサマの布 (11 点)

(2) 救出活動

今回の救出作業では、前回の最後、書物や手紙類が多く出てきた地点において、瓦礫を取り除いて搜索した。今回の救出作業では作業をした人数が 2 名と少なかったこと、重点的に行なった地点に被災文化財がほとんど存在しなかったことなどから、ほとんど成果がなかった。行政に関わる書類を 3 点救出するにとどまった。

6. 小々汐地区の現状

20 日小々汐・尾形家住宅とその周辺で救出した被災文化財を運搬するため小々汐を訪れた際、自衛隊が集落を流れる川に残された瓦礫を撤去する作業をしていた [写真 8]。

神奈川大学が以前に整理をした文書入り封筒が発見された付近で作業を行っていたこともあり、自衛隊にも文書類が発見された際には保存しておいてもらうようお願いし、一応の了承していただいた。今回の作業では発見されなかったが、今後も関係各機関、作業者をお願いしてなるべく確保していくことが必要である。

現在のところ、尾形家に関しては尾形さんが家財の運び出しをしているため瓦礫撤去が急激に進む可



写真 8. 小々汐地区の河川を
清掃する自衛隊

能性は少ないものと考えられる。しかし今後、復興に向けた作業が本格化すると自衛隊や第三者による瓦礫の撤去作業などが行われる可能性もあることから、取り残されている被災文化財の捜索と救出が急務である。

7. 気づいたこと

(1) クリーニング

- ・ 作業スペースが狭いため、十分に被災文化財を広げることができない。その結果、乾燥をするなど、スペースが必要な場合に柵を用意するなどの工夫が必要である。
- ・ 作業をしている場所が海に近く、風が吹くことが多い。厚さの薄い文化財をあつかう際に風で飛んでしまう危険性があるため、工夫が必要である。
- ・ 文化財が乾燥していると油汚れなどがわからないことが多い。水洗いをしてみると油が浮いてくることが多い。
- ・ オシラサマの場合、分解して洗うことはこちらでできるが、再度重ねあわせる（巻く）ときには持ち主の意向を踏まえる必要があると予想される。
- ・ 布の乾燥では退色のおそれがあるため、日光に当てずに乾燥させる必要があるが、スペースが確保しづらい。
- ・ カビの繁殖を抑えるためのエタノール溶液の効果を検証する必要がある。またエタノールが使える場面をきちんと検証したほうが良い。
- ・ カビについては掃除機等で吸うなどの対策を考えたほうが良い。

(2) 救出活動

- ・ 人数が少ないと瓦礫を動かすことが難しく、なかなか効率的に作業が進まない。
- ・ 少なくとも3人程度で組になってやったほうが効率的である。
- ・ 救出活動に直接関係ないが、被災文化財を捜索している際に地元の漁業者から声をかけられ、震災についての経験、漁業についての見通し、集落の生活の思い出などについて聞きとった。震災や将来の見通しなどが語られるようになってきていることを考えると、被災文化財の救出作業と同時並行で、聞き取りを行っておく必要があると感じた。
- ・ 集落の人びとの間では尾形家住宅の復元を願う声の思いの外強いことがわかった。

8. 今後の課題

気仙沼大島で活動している神奈川大学が小々汐・尾形家住宅から救出した被災文化財のクリーニングに協力していただけたとの話が川島秀一アス・アーク美術館副館長を通じてあった。神奈川大学が以前、整理をした文書類については川島氏の依頼によって実際に神奈川大学のメンバーがクリーニングを行なっている。

神奈川大学と協力してクリーニングをする、もしくはアス・アーク美術館がほかの研究機関にもクリーニングを要請した場合に対応するため、資料につけるタグや連絡方法について共通のフォーマットを用意することが必要であるとする。あるいは状況を伝達するためのノー

トをリアス・アーク美術館内に置いておくなどの対策も考えたい。

また被災文化財の救出に関しても上記のように復興への活動が活発化していることを踏まえ、救出を急ぐ必要がある。

9. 購入すべき資材

現在、クリーニング作業に必要な資材を列挙する。

卦算、洗濯物干しのピンチ、はさみ、濡れても良いテーブル、半紙、メッシュの袋、タグに用いる製図用の紙（マイラー紙）、浅めの容器（大きめの料理用バットのようなもの）、子供用プール、ホース、ジェット噴射ができる噴水器、ちりとり、箒、掃除機

10. 今後の活動予定

気仙沼市における今後の被災文化財救出支援活動は以下のように予定している。

- (1) 5月31日～6月3日（4日間）
- (2) 6月8日～10日（3日間）
- (3) 6月15日～17日（3日間）
- (4) 6月22日～24日（3日間）
- (5) 6月28日～30日（3日間・調整中）

【第7報】気仙沼市被災文化財救出支援活動の報告

1. 活動日時

2011年 5月 31日～ 6月 3日 (4日間)

2. 活動の内容

- ・小々汐地区で救出されていない尾形家の被災文化財の早急な救出
- ・被災文化財のクリーニング

3. 参加メンバー

- ・国立歴史民俗博物館： 内田順子 (6/2-3)、柴崎茂光 (6/1)、山田慎也 (6/1)、松田睦彦 (6/1-3)、葉山茂 (5/31-6/3)
- ・リアス・アーク美術館： 川島秀一 (5/31-6/3)

4. 日程

- 5月31日 ・被災文化財の救出・クリーニングに必要な資材を購入。
・リアス・アーク美術館に到着し、川島秀一副館長と面談、救出の手順等打合せ。
・クリーニング中の被災文化財の経過について確認作業を行う。
・川島氏・葉山の 2名で小々汐地区の状況確認を行う。
- 6月1日 ・リアス・アーク美術館に到着、川島秀一副館長、神奈川大学日本常民文化研究所佐野賢治所長と合流し被災文化財救出の方法、処理、今後の見通しなどについて打合せ。
・小々汐にて尾形家御当主の尾形健さんと方針を打合せ。
・小々汐にて柴崎・山田・松田の 3氏と葉山が合流し、被災文化財を搜索。
- 6月2日 ・松田・葉山の 3名、小々汐地区に到着し搜索開始。
・発見した被災文化財をリアス・アーク美術館に搬入し、川島氏と合流、応急処置を行う。
- 6月3日 ・内田・松田・葉山の 3名でリアス・アーク美術館に到着し、川島氏と合流、応急処置済みの被災文化財の状況を確認。
・松田・葉山、小々汐地区に移動し被災文化財を搜索。内田、リアス・アーク美術館にて救出した文化財のクリーニング作業を行う。

5. 次回の予定

2011年 6月 8日～ 10日 (3日間)



写真1 神奈川大学が整理返却した古文書が発見された瞬間



写真2 古文書の収納作業



写真3 封筒から古文書を取り出す



写真4 古文書の乾燥作業

【第7報】気仙沼市被災文化財救出支援活動の報告

内田順子・柴崎茂光・山田慎也・松田陸彦・葉山茂

1. 活動日時

2011年5月31日～6月3日（4日間）

2. 活動の内容

- ・小々汐地区で救出されていない尾形家の被災文化財の早急な救出
- ・被災文化財のクリーニング

3. 参加メンバー

- ・国立歴史民俗博物館：
内田順子（6/2-3）、柴崎茂光（6/1）、山田慎也（6/1）、松田陸彦（6/1-3）、葉山茂（5/31-6/3）
- ・リアス・アーク美術館：
川島秀一（5/31-6/3）

4. 日程

5月31日

- 9:30 一ノ関駅前よりレンタカーで出発（葉山）
- 10:00 被災文化財の救出・クリーニングに必要な資材を購入
- 13:00 リアス・アーク美術館に到着し、川島秀一副館長と面談、救出の手順等打合せ
- 13:30 クリーニング中の被災文化財の経過について確認作業を行う
- 15:00 川島氏・葉山の2名で小々汐地区の状況確認を行う
- 18:00 作業終了

6月1日

- 9:00 リアス・アーク美術館に到着、川島秀一副館長、神奈川大学日本常民文化研究所佐野賢治所長と合流し被災文化財救出の方法、処理、今後の見通しなどについて打合せ
- 10:30 小々汐地区に向けて出発
- 11:00 小々汐にて尾形家御当主の尾形健さんと方針を打合せ
- 13:00 小々汐にて柴崎・山田・松田の3氏と葉山が合流し、被災文化財を搜索
- 18:00 作業終了。柴崎・山田、帰京。内田、合流。

6月2日

- 9:00 内田・松田・葉山の3名、小々汐地区に到着し搜索開始。
- 13:00 発見した被災文化財をリアス・アーク美術館に搬入し、川島氏と合流、応急処置を行う。
- 18:00 作業終了。

6月3日

- 9:00 内田・松田・葉山の3名でリアス・アーク美術館に到着し、川島氏と合流、応急処置済みの被災文化財の状況を確認。
- 10:00 松田・葉山、小々汐地区に移動し被災文化財を搜索。内田、リアス・アーク美術館にて

救出した文化財のクリーニング作業を行う。

16:40 松田・葉山の2名、リアス・アーク美術館に戻り、内田と合流。作業終了。

19:55 一ノ関駅より新幹線にて帰京。

5. 被災地の現況と活動の状況

震災・津波被害からおよそ3ヶ月になり被災地でも瓦礫撤去などの復興のための活動が加速している。一方で被災文化財の救出という側面からみると、被災してすぐのころに自衛隊によって人命救助のため建物群が破壊され、被災した文化財が移動した先が想像しにくい状況になっている。

梅雨が近づき高温化・多湿化が進んでおりカビが発生しやすい条件が進んでいるため、まだ瓦礫の下にある被災文化財がおかれた状態も次第に悪化している。有機物の腐敗によってウジやハエが大量発生しており、衛生環境の悪化も懸念される。

6. 作業内容

今回の活動では被災から日にちが経ち被災文化財のおかれた状況が悪化していることに加え、未救出の文書およそ900点の存在が指摘されていたことから、被災文化財の捜索に力をいれた。古文書の救出では神奈川大学が以前に整理をして尾形家に返却した古文書類の救出を念頭におきながら、聞きとりとこれまでの活動の記録を勘案しながら流出場所を予測して捜索を行った。その結果、近世から近代にかけての漁場利用に関する文書を中心に130点を救出した。

また今回の活動ではクリーニングは最小限にとどめた。クリーニング作業を行う場所、クリーニングをした資料の乾燥場所、保管場所などが逼迫していることもあり、前回の作業でクリーニングした被災文化財の経過観察と今回の捜索で発見した古文書類のクリーニング・乾燥処理を中心にした。

(1) 救出活動

今回の救出活動では以前、神奈川大学が整理をした古文書類を発見した瓦礫の山付近を中心に捜索した。この瓦礫の山には尾形家のなかで石倉と言われる倉庫に入っていたものが多く集まっていると予想されている。

5月31日の救出作業では川島氏と集落の瓦礫の山を再度検討し、同時に瓦礫の山からの表面採集を行った。表面採集により竹製の魚入れカゴ（バンジョウカゴ）、木製樽を発見し回収した。

6月1日の救出活動では筒状になり柿渋を塗布された新聞紙の塊のなかから裏張りに使われたと思われる古文書を発見した [写真1、写真2]。また網漁で使う浮きであるアバ、屋根葺きに使った掛矢（大型の木槌）、日記・尾形家の戦争経験などに関わる冊子類など、数多くの被災資料を救出することができた。

6月2日の救出作業では同じ瓦礫の山のなかで場所を変えて捜索を行った。その結果、神奈川大学が以前に整理をして返却した古文書類のうち130点を発見した [写真3]。これで以前に発見した80点と合わせて、神奈川大学が整理した古文書の



写真1. 筒状・柿渋を塗布された新聞紙の塊



写真2. 筒状・柿渋を塗布された新聞紙の塊のなかの文書

うち2割を発見することができた。

6月3日の救出作業では2日に古文書類が発見された場所をさらに捜索した。この日の作業では和綴じの印刷物数点を発見するにとどまった。

捜索では積まれて捨てられた漁網や瓦礫に絡まったロープ類が効率的な作業を阻んでおり、同時に足をとられるなどの危険も高かったことから剪定ばさみを購入して対処した。



写真3. 神奈川大学が整理し返却した古文書が発見された瞬間

(2) クリーニング

①前回クリーニングした資料の経過観察

リアス・アーク美術館の川島副館長から神奈川大学常民文化研究所に乾燥処理をお願いしていた尾形家の古文書類80点について乾燥状態を確認し、改めて神奈川大学が用意した資料用の封筒に入れる作業を行った [写真4]。これらの古文書類に関しては神奈川大学に依頼して、奈良文化財研究所に運び真空凍結乾燥処理・復元処理をお願いする予定である。



写真4. 古文書の収納作業

また乾燥した札類、アバ、オシラサマを入れていた箱をテンバコに入れて保管するための準備を行った。札類とオシラサマの箱については一枚一枚、キッチンペーパーの上に置いて乾燥させたため、十分乾燥した状態になっていた。またアバに関しては乾燥場が確保できないためキッチンペーパーにくるんでカゴのなかに積んでいたが、重なった部分が10日経っても十分乾燥しておらず、札類を移動したあとの場所に一点一点並べる作業をした。

オシラサマの布は前回の作業で洗って乾燥させたものを確認したところ、乾燥した布の表面にヘドロが表出していることが確認された。船の油分が付着していること、泥を落とそうとしてこすりすぎて布の繊維を傷つける可能性があることなどの条件を考慮すると、水洗いではこれが限度である可能性が高い。今後の作業ではまず布を乾燥させて泥や汚れを落とし、あとの水洗いする方法を試したい。



写真5. 封筒から古文書を取り出す

②古文書の応急処置

6月2日に発見した古文書類130点は泥をかぶり、同時に古文書を入れていた封筒と文書の癒着するなど状態が悪化していたため、緊急に古文書類を袋から出して乾燥する必要があると判断し、応急処置を行った [写真5、写真6]。

作業の過程で、封筒と一体化しつつあるもの、乾燥して封筒と癒着しているものなどが発見された。これらの古文書については一度トレイ上の容器のなかに封筒ごと、文書を浸して水分を含ませたのち、封筒と分離して文書をすくいとり、キッチンペーパーで吸水するという方法をとった。一枚ものの文書を掬い上げる際には台所の三角コーナーなどにつかうネットをつかいて掬い上げると、古文書の損傷を最小限に抑えることができる、乾燥後もキッチンペーパーと癒着しないなどの利点がある。三角コーナーのブ



写真6. 古文書の乾燥作業

ラスティック製の網は重宝した。

生乾きの状態で開いて古文書に損傷のないものに関しては、その場で一枚ずつ開いて乾燥させた。開くときにピンセットなどを使い、下の神と剥がれるものについては丁寧に剥がした。

一晚乾燥させた後、乾燥したものについては柔らかい筆で最低限の泥を払った上で袋に入れた。袋に入れる際は、もともと半分に折ってあったものであっても紙自体の破損を避けるため、A4サイズの封筒に折らずに入れられるものに関しては開いたまま入れた。封筒に入れたものは130点のうち21点である。また一晚経っても水分が多いものに関しては、キッチンペーパーを替えて対処した。乾燥が進み広げられない資料についてはエタノール溶液を噴霧した上で、剥がれるものは剥がして広げた。

7. 気づいた点

(1) 救出作業

- 被災文化財は無秩序に散乱するわけではなく、まとまりで移動する可能性が極めて高いことがわかった。つまりある被災文化財が発見された場合、一点に集中して捜索をしたほうがより効率的であると考えられる。
- 漁網や針金、ロープ類、木片など、作業の障害となるものが多いため、場合によっては金属カッターや鋸、ニッパーなどの工具を用意するほうがよい。トタンやプレハブ、アルミサッシなどは怪我の危険もあり、切断が必要と考えられる。
- 復興に向けた動きが加速するため、時間的な猶予が少なくなっている。
- 瓦礫の山に梁などの大きな部材が多くあり作業の効率化のため、重機・オペレーターの雇用なども可能性として検討したい。
- カビの発生、文書類への泥の侵入など、震災から時間がたったことで被災文化財が損壊する危機が迫っている。
- 気温が上がり集中力が低下することによる怪我の可能性が高まっている。とくに釘の踏抜き、金属による怪我、頭部の打撲などの危険性が高い。
- 有機物の腐敗が進み、腐敗臭がきつくなっている。またハエが大量発生するなど、衛生環境の悪化が著しい。破傷風などの感染症には十分気を付ける必要がある。

(2) クリーニング

- エタノールをどのタイミングで使うのかについて検討が必要である。つまり資料を水洗して水からあげた時点でエタノールを使うのか、もしくは水分をある程度取り除いてからエタノールをかけるのかなどを検討する必要がある。
- 凍結乾燥をする場合の現場での応急処置について検討が必要である。
- 紙物では開くのに最適なタイミングがある。かなり水を含んだ状態では紙自体が崩壊してしまう可能性が高く、一方で乾きすぎた状態では表面の剥離などの破壊が起こる可能性がある。したがってある程度水を吸水して生乾きで適度に水を含んだ状態になったときに開くのがよいようである。
- 紙物の泥落としには化粧筆のような柔らかいものを使ったほうがよいようである。

8. 今後の課題

今回、幹線道路沿いにおいて瓦礫撤去の動きが見られた。そうした作業がいつ行われるのかは住民

のみなさんにも正確には伝わっておらず、住民のみなさんのなかにも慌てて瓦礫のなかから家財を探す動きが見られた。したがって瓦礫の撤去は時間の問題になりつつあり、様々な方法をつかって被災文化財の救出を急ぐ必要がある。

救出した文化財のうち、箆筒など木材が膨張してあかなくなったものについて開け方を検討し、箆筒にはいったものを救出する必要がある。箆筒自体も古いものであり、文化財としての価値があると考えられるため、なるべく破壊しないで開ける方法が望ましい。

テンバコなど、クリーニングが終わった被災文化財を保管しておくための物品が圧倒的に不足しており、早急な対策が必要である。今回、現場から連絡しテンバコ 10 箱の確保をお願いした。今後も状況に応じて、リアス・アーク美術館の意向を踏まえて準備をしていきたい。

9. 次回の予定

2011 年 6 月 8 日～ 10 日 (3 日間)

■活動内容

- ・クリーニングの継続
- ・気仙沼市内で申し出のあった家屋の被災文化財の救出
- ・小々汐地区における被災文化財の救出活動

〔第8報〕気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告

1. 活動日時

2011年6月8日～6月10日（3日間）

2. 活動の内容

- ・気仙沼市小々汐の尾形家における民具・文書資料等被災文化財の救出
- ・気仙沼市唐桑町の被災住宅・行政施設の被災文化財の救出
- ・前回救出した被災文化財のクリーニング作業

3. 参加メンバー

- ・国立歴史民俗博物館：丸山泰明（6/8-9）、葉山茂（6/8-10）
- ・リアス・アーク美術館：川島秀一（6/8-10）
- ・熊谷産業・工学院大学：学生等4名

4. 日程

- 6月8日
- ・リアス・アーク美術館 クリーニング中の被災文化財の状態確認作業。
 - ・気仙沼市小々汐の尾形家住宅 熊谷産業・工学院大学学生ボランティアと合流。熊谷産業・工学院大学チームは尾形家住宅の礎石搜索作業。丸山・葉山の2名は被災文化財の救出作業。
- 6月9日
- ・気仙沼市小々汐の尾形家住宅 文化財救出作業。
 - ・被災文化財救出の依頼があった気仙沼市唐桑地区の個人宅 被災文化財の救出および津波被害の聞き取り調査。
 - ・気仙沼市唐桑支所の漁村センター 収蔵されている漁具類のコレクションの被災状況を調査。担当者とは今後の対応を検討。
- 6月10日
- ・気仙沼市小々汐集落 尾形家に関わる被災文化財を搜索。
 - ・リアス・アーク美術館 トラックヤードで乾燥作業をしていた文書類を封筒に収納し、神奈川大学に引き渡すための準備作業。
- （文書類は6月11日に神奈川大学が引き取り、その後、奈良文化財研究所で処置予定）

5. 次回の予定

2011年6月14日～17日（4日間）



写真2. ボランティアの瓦礫撤去作業



写真1. 瓦礫の山の搜索活動



写真3. 古文書の収納作業



写真4. 唐桑の個人宅で発見されたアルバムの状態



写真5. 漁村センターの状況



写真6. 割れたホルマリン漬け資料

〔第8報〕気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告

2011年6月12日

1. 活動日時

2011年6月8日～6月10日（3日間）

2. 活動の内容

- ・気仙沼市小々汐の尾形家における民具・文書資料等被災文化財の救出
- ・気仙沼市唐桑町の被災住宅・行政施設の被災文化財の救出
- ・救出済みの被災文化財のクリーニング作業

3. 参加メンバー

- ・国立歴史民俗博物館：丸山泰明（6/8-9）、葉山茂（6/8-10）
- ・リアス・アーク美術館：川島秀一（6/8-10）
- ・工学院大学：4名

4. 日程

6月8日

- 9:30 一ノ関駅前よりレンタカーで出発。
- 10:00 被災文化財の救出・クリーニングに必要な資材を購入。
- 12:30 リアス・アーク美術館に到着。クリーニング中の被災文化財の状態確認作業を行う。
- 13:10 気仙沼市小々汐の尾形家住宅に移動。
- 13:40 現場到着、熊谷産業・工学院大学学生ボランティアと合流。熊谷産業・工学院大学チームは尾形家住宅の礎石搜索作業を行う。丸山・葉山の2名は被災文化財の救出作業を行う。
- 16:00 熊谷産業・工学院大学チーム作業終了。
- 17:30 丸山・葉山、作業終了。

6月9日

- 8:40 リアス・アーク美術館に到着。
- 9:20 気仙沼市小々汐の尾形家住宅に到着、文化財救出作業開始。
- 13:20 リアス・アーク美術館に到着、川島氏と合流。
- 13:50 被災文化財救出の依頼のあった気仙沼市唐桑地区の個人宅に移動。被災文化財の救出および津波被害の聞き取り調査。
- 15:00 気仙沼市唐桑支所の漁村センターに収蔵されている漁具類のコレクションの被災状況を調査。担当者とは今後の対応を検討。
- 17:10 リアス・アーク美術館に到着、作業終了。丸山、帰京。

6月10日

- 9:00 葉山、気仙沼市小々汐集落到到着、尾形家に関わる被災文化財を捜索。
- 13:40 リアス・アーク美術館に移動し、川島氏と合流。トラックヤードで乾燥作業をしていた文書類を封筒に収納し、神奈川大学に引き渡すための準備作業を行う。
(文書類は6月11日に神奈川大学が引き取り、その後、奈良文化財研究所で処置予定)
- 19:55 一ノ関駅より新幹線にて帰京。

5. 被災地の現況と活動の状況

作業を行った3日間は晴天に恵まれた。晴天が続いたためか、ハエやウジが前回の作業時に比べて少なくなり、多少作業がやりやすい環境になった。

尾形家のある小々汐地区を含め、気仙沼港対岸の地域では瓦礫撤去作業の進みが他地域にくらべて緩やかである。今回、旧唐桑町内の集落を訪問して被災文化財を救出したが、旧唐桑町大沢地区などの瓦礫は大部分は撤去されていた。小々汐地区を含めた一帯の瓦礫撤去がどのように行われるかは今のところわかっていないが、いずれにしろ残された時間は少ないと認識すべきであり、尾形家をはじめとする小々汐地区の被災文化財の救出活動を急ぐ必要がある。

6. 作業内容

今回は前回同様、小々汐地区・尾形家の被災文化財の救出活動・クリーニング活動に加えて、気仙沼市唐桑町内の被災文化財調査を行った。唐桑町内では2件の調査をした。1件は津波の被災後リアス・アーク美術館・川島副館長に直接申し出のあった個人宅であり、もう1件は現気仙沼市唐桑支所(旧唐桑町役場)に隣接する漁村センター内に収蔵された漁具類である。

(1) 小々汐地区での被災文化財救出活動

小々汐地区での被災文化財の捜索は前回と同様、神奈川大学日本常民文化研究所(以下、常民研)が過去に整理し尾形家に返却した文書類を探すことをおもな目的とした[写真1]。また今回、熊谷産業と工学院大学の学生ボランティアが尾形家住宅の基礎を探す目的で現地入りして調査・瓦礫撤去をしており、その現場に立ち会って協力しながら被災文化財の発見を試みた[写真2]。

今回の捜索では常民研が整理した文書を見つけることはできなかった。小々汐地区では火事も起きたため、確実にどこかにあるということではない。しかし文書を失った場合に過去の生活を知る手段が失われることを考えると、瓦礫を一つずつ撤去しながらその場所に文書が存在しないことを確認していく以外に方法はないだろう。

捜索のなかで、掛矢と呼ばれる茅葺屋根を葺くときにつかう大型の木髓を救出した。そのほか手紙、はがき、アルバムなど、軍帽や第2次世界大戦当時の世界地図など戦争に関わる資料が数点、さらに江戸時代のものと思される和綴じの印刷物を発見した。



写真1. 瓦礫の山の捜索活動



写真2. ボランティアの瓦礫撤去作業

熊谷産業・工学院大学ボランティアによる尾形家の礎石捜索作業の現場では、漁具を中心に被災文化財を発見した。突き漁などにつかう鉤、延縄漁の仕掛けを収納しておく縄籠、タモ（魚をすくう掬い網）、箕などを発見して回収した。



写真3. 古文書の収納作業

■今回発見されたモノ

紙モノ：手紙・はがき類、アルバム、和綴じの印刷物、戦中の世界地図

木製品：掛矢、縄籠、箕

木・鉄混合：鉤、タモ

布製品：軍帽

(2) クリーニング作業

今回、クリーニング作業は行っていない。前回救出した文書類は川島氏の判断で常民研に託し、奈良文化財研究所で保存処理をする方針になった。今回は常民研に引き渡すための準備として、乾燥中の文書類を文書の整理番号を書いた封筒に入れた[写真3]。その際、完全に乾燥した文書は1点1点、なるべく折らないようにして封筒に入れた。また水分を含んで乾燥が終わっていない文書類は間に挟んでいたキッチンペーパーを新しいものに取り替えた上で、ビニール袋に入れて荷造りした。梱包した文書類は6月11日（作業をした翌日）に常民研が引き取り、処理することとなっている。

(3) 唐桑町の被災文化財受け取り

唐桑地区で津波被害を受けた個人宅から昭和初期に作られたアルバムが発見されたので、必要ならば引き取ってよいとの連絡があったことから、川島氏・丸山・葉山の3人で個人宅を訪問した。

唐桑地区は津波被害がしばしばあった場所であり、昭和8年の津波では気仙沼市役所唐桑支所のある場所の下まで波が来たときれている。今回、被災した個人宅は昭和8年当時には水田だった場所である。今回の津波では役場近くまでは到達しておらず、以前とくらべると津波の規模は小さかったという。津波当時は裏山に登って難を逃れたという。

アルバムは戦前の出兵時の風景・戦中の訓練風景の写真を中心にしながら戦後の観光やイベントの様子などが貼られたもので、とくに戦争当時の状況を伝える資料としては貴重であると考えられる。アルバムの状態は悪く、向かい合ったページの写真同士が張り付いている箇所が多くみられる[写真4]。

提供を申し出た方は当初、戦争の写真だけ持って行って良いとのことであったが、確認したところアルバムにまとめられているひとまとまりに意味があると判断し、一旦リアス・アーク美術館に預けていただくこととした。その上で歴博とリアス・アーク美術館が協力して復元方法を検討し、復元後に一度、ご本人に確認した上で扱いを検討することとした。

このアルバムは津波被害によって散乱した家財の中から発見されたもので、発見されたご本人も記憶のないものだという。このように、存在を記憶されていなかった貴重な資料が津波によって発見される場合は多く、小々汐地区・尾形家の被災文化財救出活



写真4. 唐桑の個人宅で発見されたアルバムの状態

動をはじめとして多くの被災文化財救出活動のなかでも意識しておくことが必要である。

(4) 気仙沼市役所唐桑支所漁村センターの被災文化財状況調査

気仙沼市と合併する前の唐桑町であったときに、唐桑の漁具を中心に集められた漁具を中心とした民具類、生物標本が漁村センターの一室に保管されている〔写真5〕。これらの資料は地震被害によりホルマリン漬けのガラス容器が破壊され、大量のホルマリンが床に流れだした状態になっている〔写真6〕。また収集された民具について知識のある人が町村合併によって異動してしまい、分かる人がいないなど、廃棄の対象になりかねない状況に陥っている。

今回の津波被害では沿岸部の漁村の多くが津波で流されたこともあり、民具が残されていないことから、過去につかわれていた民具類が残されていること自体が大変貴重である。ホルマリンが人体にとって有毒であることから一刻も早い対策が必要であり、民具類については一度リアス・アーク美術館に引き取って保管する方針を決めた。ただし小々汐地区・尾形家の被災文化財救出作業を優先する必要があることから、引き取りは尾形家での作業が一段落したあとに行うことになった。



写真5. 漁村センターの状況



写真6. 割れたホルマリン漬け資料

7. 気づいた点

(1) 救出作業

- ・今回、壊れたトタン屋根を除去するために金属鋸を購入した。トタン屋根のように幅広いものについては金属バサミなども検討したほうがよいようである。
- ・漁網などは絡まっているため一見切ったほうが簡単にみえるが、もともとひとかたまりのものであるため、切断するより丁寧にほぐしたほうが結果的には早く除去ができるようである。

(2) クリーニング

- ・文書類を封筒に入れる作業をするなかで、カビが発生しているものを発見した。カビが発生した文書は前回、封筒と癒着していたために水に浸けて封筒から剥がすことを試みたものである。このことからほかの文化財レスキューの作業でも指摘されていることであるが、被災した文書は海水をかぶったことで塩分を多く含み、結果的にカビの発生が抑えられていたと考えられる。
- ・乾燥する方法に工夫が必要である。今回、新聞紙の上にキッチンペーパーを2枚重ねて、その上に濡れた文書を置いていたが、間にプラスチック製の網などを置いて通気をよくする必要がありそうである。

8. 今後の課題

- ・今回の作業では文書が多く存在すると考えていた場所で、文書類をほとんど発見することができなかった。捜索場所の変更を含めて検討が必要である。

瓦礫撤去の動きは今回は止まっていた。しばらく瓦礫撤去はないようであるが、時間が迫っていることは間違いなく、なるべく早い救出が必要である。

物品については今回、宮城県を通じて気仙沼市の教育委員会にも必要なものを買う用意があることが伝えられ、現場視察が行われた。タバコ等必要なものを山形県の博物館から1000箱寄付されており、気仙沼市でも美術館・教育委員会を通して要求することとなった。

9. 次回の予定

2011年6月14日～17日（4日間）

■活動内容

- ・クリーニング作業をすすめる。とくに筆筒等、開かないものについて早急な対策をとる。
- ・小々汐地区・尾形家における被災文化財の救出活動。
- ・陸前高田市における被災文化財のクリーニング作業、情報交換。

（次回は民博チームと合同で作業を行う予定であり、こちらとしても扱いに苦慮しているものの処理方法について相談をする予定である）

【第9報】気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告

2011年6月21日

1. 活動日時

2011年6月14日～6月17日（14日は移動日、活動日合計3日間）

2. 参加メンバー

- ・国立歴史民俗博物館：青木隆浩(6/16)、小池淳一(6/17)、柴崎茂光(6/14-16)、葉山茂(6/14-17)
- ・国立民族学博物館：日高真吾(6/15, 6/17)、和高智美(6/15-17)
- ・リアス・アーク美術館：川島秀一(6/16-17)

その他：陸前高田市立博物館スタッフ、岩手県立博物館スタッフ、遠野市立博物館スタッフ、北海道開拓記念館スタッフ

3. 活動内容

6月14日

- ・15日朝からの活動に備えて柴崎・葉山、一関市入り。

6月15日

- ・陸前高田市の旧生出小学校にて救出された被災文化財のクリーニング作業。

6月16日

- ・気仙沼市のリアス・アーク美術館において被災文化財のクリーニング計画について民博チームと協議
- ・小々汐地区、尾形家にて被災文化財を救出。

6月17日

- ・小々汐地区・尾形家にて被災文化財を救出。
- ・作業終了後に帰京。

4. 被災地・被災文化財の状況

(1) 陸前高田市の状況

陸前高田市では市内の広い範囲で津波によって壊滅的な被害を受けた。現在は平地の多くの部分が急速に瓦礫撤去が進んでおり、整地作業も行われている。

陸前高田市立博物館も壊滅的な被害を受けたが、博物館資料の多くは海に向けた側面に窓がない作りの建物に守られ、流失せずに館内に残った。こうした博物館資料の多くは陸前高田市立博物館のスタッフと自衛隊の手によって、市内の旧生出小学校の校舎内に運ばれて保管されている。8人の体制で博物館の被災文化財の救出とクリーニングを行っている。現在はほぼ被災文化財の救出は終わっているが、まだ館内に残された大量の土砂のなかに細かい被災文化財が残っており、救出作業が続いている。一方、被災した文化財が多く、クリーニング作業に手間取っている状況にある。

(2) 気仙沼市の状況

気仙沼市では津波被害に遭った場所でも建造物が多く残り、瓦礫の撤去もそれほど急速には進んでいない。津波で流され陸地に残った漁船が少しずつ海に戻され、漁港の機能が復活するなど、復興に向けた動きは着実に進んでいる。

気仙沼・本吉地区の被災文化財の多くは拠点施設であるリアス・アーク美術館に運びこまれることが多くなっている。しかし尾形家の被災文化財をはじめとして多くの被災文化財が運びこまれたことによって、被災文化財を仮置きする場所が少なくなっており、クリーニングをする体制を早急に整えることが必要になっている。

5. 作業内容

(1) 陸前高田市におけるクリーニング活動

陸前高田市立博物館の被災文化財は市内の旧生出小学校の校舎内に保管されているが、仮保管されている被災文化財の量が極めて多い。被災文化財をクリーニングするための人手も足りておらず、対応に苦慮している状況にある [写真 1]。

今回の作業では作業スペースを確保することが第一であるとの判断のもと、保存科学を専門とする国立民族学博物館（民博）の日高氏に指導していただきながら、小学校のエントランスを埋め尽くしていた大量の博物館書籍類をクリーニングし、そのなかで状態の悪いものを選んで奈良文化財研究所に送る準備をした。

①書籍類のクリーニング

作業をするなかで、日高氏よりクリーニングの基本を教わった。一般に素人がクリーニングをしようとするとき、しばしば完璧なクリーニング、すぐに博物館資料として使える状態に持っていくことを目指しがちである。しかし完璧を目指すと、クリーニングが進まず結果的に被災文化財の処理がいつまで経っても終わらないという状況に陥ることが多い。

そこで被災文化財のクリーニングは次のように考えることが望ましい。被災文化財のレスキューという緊急時の対は、まず乾燥と泥落としの工程を何度か繰り返しながら、文化財から泥を落とすことを目的とする。その際、1度目のクリーニングですべて落とす必要はなく、数回に分けて乾燥と泥落としをくり返しながら、徐々に博物館に入れられるものにしていく。

今回の作業で泥落としをした書籍類は1度、陸前高田市立博物館のスタッフが泥落としをして再び乾燥させていたものである。一度クリーニングしたことで開けるようになった書籍類の表紙と裏表紙あたりの泥を落とす。

②被災文化財の奈良文化財研究所への移送ための準備作業

書籍類をクリーニングする中で乾燥具合が悪く、水分を多く含んだ和綴じの文書類については奈良文化財研究所に送ったうえで凍結乾燥処理をすることとなった。



写真1. 陸前高田市立博物館で被災し救出された文化財



写真2. 和綴本の移送準備

今回の作業では濡れた本を10センチ程度の高さになるようにまとめてビニール袋に入れ、合計で104パック10箱をつかって、奈良文化財研究所に送る準備をした[写真2]。準備をした荷物は翌日、奈良文化財研究所に向けて発送された。

(2) 気仙沼市リアス・アーク美術館におけるクリーニング活動

今回、民博から保存科学の専門家にお出でいただき、我々のこれまでのクリーニングの問題点、今後の方針について話し合いをした。その結果、クリーニングに関しては多少、丁寧すぎるクリーニングをしていたことがわかった。

陸前高田市立博物館でのクリーニング作業のところにも述べたように、文化財レスキューでは乾燥と泥落としがクリーニングの基本である。それ以上の作業については人手が余っているなどの状況にあるときに考えればよく、まずはカビが生えない安定した状況までもっていくことが出来れば良い。

クリーニングに関しては次回6月23日に気仙沼市教育委員会のメンバー、歴博チーム、民博チーム共同で作業を行ってクリーニング方法を習得することとなった。その上で、以後、気仙沼市教育委員会・歴博チームでクリーニングできる体制を作っていくことを確認した。

(3) 小々汐集落・尾形家における被災文化財救出活動

16日午前中の活動ではこれまで通り、神奈川大学日本常民研研究所(常民研)が過去に整理をして尾形家に返却した文書類の発見を試みた。しかし予想した地点では文書類を発見することは出来ず、今後とも発見の可能性は低いと判断し、文書類の発見はひとまず打ち切ることとした。

一方、民博チームの和高氏に被災文化財の表面採集をお願いしたところ、16日の午前中だけで椀類や調理器具、藁製の釜敷きなどの民具類、位牌などの発見があった。その結果からまだ表面採集で救出することのできる被災文化財が多くあると判断し、午後の作業では集落全域で被災文化財の表面採集を行った。

17日の捜索では尾形さんのご家族に立ちあっていただきながら、母屋の屋根が着地した地点の被災文化財の救出を行った。その結果、仏壇の後ろの壁の部分、仏花、経机、仏壇の付属品、仏壇周辺の引き出し類、筆筒類、壁にかけていた暦の冊子類などを救出した。



写真4. 仏壇の壁面の救出

6. 気づいた点

(1) クリーニング

- ・クリーニングに関しては今回、専門家を招いて状況を見ていただいたこと、陸前高田市立博物館でのクリーニング作業に参加したことで問題点を把握することができた。クリーニング作業では乾燥と泥落としを交互に繰り返すことが重要であり、水洗いは最小限にとどめて良いことがわかった。
- ・被災した文化財については、クリーニング作業を効率化すること、最小限に留めることで結果的に博物館施設に収容できる可能性が高まるため、完璧なクリーニングよりも現段階で必要な程度のクリーニングを心がけるほうが有効である。
- ・津波の被害で被災した文化財については脱塩処理が必要であると思われるがちであるが、塩水をかぶった程度の被害であれば、文化財レスキューの段階では脱塩処理を気にする必要はない。脱塩処

理は博物館に収容できる状態にしたあとの段階で検討すべき課題である。

- 塩水をかぶって開かなくなった筆筒などは乾燥によって木が収縮して開けやすくなるまで乾燥を続けることが大切である。

(2) 小々汐地区・尾形家の捜索に関して

- 表面採集によって集めることのできる被災文化財がまだまだ多いことがわかった。これまで瓦礫をどけて、瓦礫の山に埋れた被災文化財の救出に力を入れてきたが、今回、外部の視点から改めて被災文化財の救出を見ていただいたことで、これまで見落としがちだった地表面に落ちている被災文化財の救出について改めて重要性を知ることができた。
- 民家での被災文化財の捜索では、ご家族に立ち会っていただくなど、ご家族の同意を得ながら被災文化財を収集していくことが大切である。

7. 今後の課題

- クリーニングに関しては、早急に体制づくりをする必要がある。この点に関しては次回、民博チームをお願いしてクリーニングの実践的な方法を学ぶ。同時に気仙沼市教育委員会のメンバーにもクリーニングに参加していただき、クリーニング作業を軌道に乗せることが必要である。
- 被災文化財の捜索については、当面、母屋部分の捜索を中心に行う。その後の捜索計画についても検討が必要である。

8. 次回の予定

2011年6月22日～24日（3日間）

■活動内容

- 民博チームと合同で被災文化財をクリーニング
- 小々汐地区・尾形家の被災文化財救出活動

〔第10報〕気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告

2011年6月28日

1. 活動日時

2011年6月22日～6月24日（3日間）

2. 活動の内容

- ・気仙沼市小々汐の尾形家における民具・文書資料等被災文化財の救出
- ・これまでに救出した被災文化財のクリーニング作業

3. 参加メンバー

- ・国立歴史民俗博物館：青木隆浩、内田順子、松田睦彦、加藤秀雄、葉山茂
- ・リアス・アーク美術館：川島秀一
- ・国立民族学博物館：日高真吾、和高智美
- ・気仙沼市教育委員会：庄司さだ子、橋本和子、斉藤千歳、菊池寿美、藤本愛
- ・ボランティア（熊谷産業の募集による）7名

4. 日程

6月22日

- ・気仙沼市尾形家において被災文化財の救出活動を行う。

6月23日

- ・リアス・アーク美術館において救出した被災文化財のクリーニングを行う。
- ・小々汐集落より救出した被災文化財をリアス・アーク美術館に搬入する。

6月24日

- ・リアス・アーク美術館において救出した被災文化財のクリーニングを行う。

5. 被災地の現況と活動の状況

東北地方は21日から梅雨入りし、気温・湿度ともに高くなってきた。今後しばらくは天候不順が続くことが予想され、小々汐地区での瓦礫の中からの被災文化財救出活動は危険回避の観点から控える日が増えそうである。

気仙沼市では現在、津波で陸に打ち上げられていた漁船が港に次々に戻す用意が行われている。また漁港が復活し、カッオの巻網船が数日のうちに入港する動きもみられる。このように被災地の経済の本格的な復興に向けた動きは急速に進みつつある。

今回から気仙沼市教育委員会の文化財整理作業業務をされている5人の方々が救出した被災文化財のクリーニング作業に携わっていただけることになった。これまで人員不足のため被災文化財の救出を優先しクリーニング作業が遅れてきたが、今後は人員の面での問題は解決され順調にクリーニング作業が進むものと期待される。

6. 作業内容

今回の作業では小々汐地区・尾形家において被災文化財を救出する活動と救出した被災文化財をクリーニングする作業の両方を行った。とくにこれまで捜索・救出活動に力を入れてきた結果、リアス・アーク美術館での被災文化財の仮置き場が逼迫する事態が生じていた。そこで今回は国立民族博物館(民博)の保存科学の専門家2名においていただき、被災文化財のクリーニングについて指導を仰ぎながら作業を進めた。

(1) 小々汐地区での被災文化財救出活動

小々汐地区での被災文化財の捜索は前回、報告したように神奈川大学日本常民文化研究所(常民研)が過去に整理し尾形家に返却した被災文書の救出は断念した。代わって今回の活動では母屋が着地した場所(屋根が津波で着地した場所)で、被災文化財を救出する作業をした[写真1]。

母屋の土間部分は別の棟の瓦屋根が潜り込んでいた。この点は5月7日に土間部分の屋根の下に入った際に確認していた。今回の作業ではこの潜り込んだ屋根を上から剥がして撤去し、その下から発見される手紙類を救出した。手紙類はおもに戦前のものであり、先代の尾形家ご当主が残した私信である。私信であるため今後どのように処置するかについては検討が必要であるが、現状ではこのままでは激しく傷むことが予想されること、戦前・戦中の貴重な資料になりうることなどから、ひとまずリアス・アーク美術館に搬入して保存のための処置を行うこととした。

今回の捜索では尾形家の屋根の解体に携わった熊谷産業が作業のために募集したボランティアの方々が参加してくださった。そのなかでボランティアを交えた作業がどのように協力し合えるのかについて課題が残った。とくに民家からの被災文化財の救出ではこれを残し、これを捨てるという明確な判断をしにくい状況にあり、民俗学を専門とする人間であっても現場で判断しながらの作業となる。そこにボランティアがやってきた場合に、作業にどのように組み込めるのかは検討の余地がある。



写真1. 小々汐での母屋での被災文化財救出作業

(2) クリーニング作業

今回は懸案となっていたクリーニング作業について、気仙沼市教育委員会の方々をお願いをしてリアス・アーク美術館に来ていただき、継続的にクリーニング作業ができる体制が整った。

今回の作業ではなるべく大きなもの、クリーニングしやすいものを中心に作業を行った。民博チームの指導による作業方針は以下のようである。

1. クリーニングしやすいものから片付けていく(逆に作業しにくい、処理に迷うものはおいておき、後回しにする：漆を使っている製品、乾燥によって剥離すると予想される塗装品、紙・木材の複合品など)。
2. クリーニングではまず泥落としをしたあと、水洗いできるものは水洗いする。
3. 水洗いしたものは一旦、軽く水を切るためにおいておく。
4. 新聞紙など吸水性のいい紙類で文化財の表面についている水滴を拭き取る。
5. この時点でバックヤードなどに移動させて、安定した環境のもとでゆっくり乾燥させる。
6. クリーニング以降、できるだけ毎日、クリーニングを終えた文化財をひっくり返して、カビの

発生などの状況を確認して、乾燥をする。カビの発生が見られたときにはエタノールをかけて、カビの発生を抑える。
7. 完全に乾燥した後に、取蔵庫に収容する。

以上の手順を確認した上で、木製品を中心にこれまでに救出してきた被災文化財のうち、約70点近くをクリーニングした[写真2]。

また木製品のクリーニングと並行して、オシラサマのクリーニングを行った。オシラサマについては以前に水洗いをして乾かすという方法をとったことを報告した。その際、色落ち、繊維の痛みなどが気になるなどの問題点があった。今回の作業ではオシラサマの布がほとんど乾燥したこともあり、乾燥したまま泥落としをする方法に切り替えた。オシラサマのクリーニングは以下の手順で行った。

1. まず三角コーナー用のネットと札を用意（このネットに最終的に布を入れて保管する）。
2. 札にオシラサマの布がかかっていた順番を記録する。
3. 札をネットに結びつける。
4. 札と布を並べて照合用の写真を撮影する [写真3]。
5. 布の泥落としをする。
6. 布をネットの中に入れて保管する。



写真2. ボランティアの瓦礫撤去作業



写真3. 布に番号をつける（オシラサマのクリーニング）



写真4. 巻いた洗紙から発見された広告

布をネットに入れて保管しているのは、布に穴をあけないための配慮である。ただ三角コーナー用のネットはオシラサマの布よりも小さいため、現時点では布を半分に分けてネットに入れている。今回、クリーニングしたオシラサマの布は6月23日が2体合計で50枚、6月24日が2体合計で64枚である。オシラサマ1対のうち、一方は中の結んである塊に到達するまでに90枚の布がかぶさっていたのに対して、もう一方は57枚しかなかった。このことから、救出する以前に津波の被害のなかで混ざってしまったか、もとからその状態だったのか、検証する必要があるがでてきた。一般に、両方のオシラサマに毎年一枚ずつ布をかけていくことを考えると、どこかで両者が混ざった可能性は捨てきれない。まずは次回以降、作業前にすべてをめぐって撮った写真をもとに検討をする。

オシラサマの内部の塊については7月の後半に作業を行う予定である。現在のところ、布の状態は安定しており、カビの発生などの問題は生じていない。

また以前、洗紙で巻かれて棒状になった紙をほぐしてみたところ、気仙沼地区の古い広告類が多数発見された [写真4]。

7. 気づいた点

(1) 救出作業

- ・梅雨時期を迎え、晴天に恵まれると高温になることから、救出作業の際は当たり前のことではある

が、水分などを十分用意し、補給しながら行う必要がある。

- 今回の作業では水分をおよそ30分毎にとりながら作業を行った。それでも頭痛などの症状が出たことから、熱中症対策のため、クーラーボックス、身体を直接冷やすためのものを用意する必要があると考えられる。
- 母屋の作業でも大きな民具は発見されなくなってきた。そのため、今後の活動プランを検討する必要がある。
- ボランティアなどが参加した際の役割、出来ることについてはこちらで整理をしておく必要がある。

(2) クリーニング

- 民博チームから教えられたとおり、被災文化財のなかで注意する必要がある、時間をかけて作業をしなければならないものは意外にも少ない。
- 作業をしようとするのが難しいもの、時間のかかるものから手をつけようとしたがるが、とにかく簡単なものを確実にクリーニングしていくほうが、今後の作業スペースの確保のためには重要であり、また有効である。
- 塗料の塗ってあるものでも、剥離が予想されるほど厚手に塗っていないものに関しては水洗いはできる。

8. 今後の課題

小々汐地区での活動に関して、被災文化財の発見が少なくなってきたこと、瓦礫の撤去時期が未定ながら遠くないと予想されること、気仙沼・本吉地区内でほかの場所からも被災文化財の救出要請が出てきていることなどの現状を勘案すると、今後の活動の全体計画を練りなおしておく必要がある。

9. 次回の予定

2011年6月28日～30日（3日間）

■活動内容

- クリーニング作業をすすめる。とくに筆筒等、開かないものについて早急な対策をとる。
- 小々汐地区・尾形家における被災文化財の救出活動。

〔第11報〕気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告

2011年7月5日

1. 活動日時

2011年6月28日～6月30日（3日間）

2. 活動の内容

- ・気仙沼市小々汐地区の尾形家における民具・文書資料等被災文化財の救出
- ・南三陸町志津川の古民家における被災状況の確認
- ・救出した被災文化財のクリーニング作業

3. 参加メンバー

- ・国立歴史民俗博物館：加藤秀雄、葉山茂
- ・リアス・アーク美術館：川島秀一
- ・気仙沼市教育委員会：幡野寛治、庄司さだ子、橋本和子、菊池寿美（7/30）、藤本愛（7/30）

4. 日程

6月28日

- ・29日朝から活動を行うため、佐倉から一関市に移動。

6月29日

- ・尾形家、被災文化財のクリーニング。
- ・南三陸町志津川の古民家の被災状況を確認。

6月30日

- ・尾形家、被災文化財のクリーニング。
- ・本館館長、副館長による現地視察。

5. 被災地の現況と活動の状況

梅雨の期間にしては天気が良い日が続いた。気仙沼市では港が整備され、27日にはカツオ漁をする船が港に荷揚げを行ったという。このように産業の復興が少しずつ進んでいる。

尾形家に関しては作業をどこまでに行う必要があるかなど、今後の見通しを含む検討が必要になってきた。小々汐地区に限らず、今後、瓦礫の撤去、復興に向けた活動が進むと考えられる。そのなかで民俗学的な見地・地域社会の文化の保存の見地から必ずやっておくべきこと、活動の目的、計画を再確認しておく必要がある。

6. 作業内容

今回の作業では小々汐地区・尾形家で救出しリアス・アーク美術館に搬入した被災文化財のクリーニング作業を効率的にするための作業と南三陸町志津川の古民家における被災文化財の状況確認調査

を中心にした。また本館館長および副館長が気仙沼市小々汐地区をはじめとして現地視察を行った。

(1) 小々汐地区・尾形家の被災文化財救出のクリーニング

今回の作業では、気仙沼市教育委員会から29日に2名、30日に4名の方がクリーニング作業に参加して下さった。メンバーが少しずつ変わりながらクリーニングが続けられることが予想されることから、誰が見ても分かりやすいように資料の状態を示す分類を検討した。

今回はカラーのスズランテープ、白色、緑色、赤色、青色、黄色の5種類をつかって被災文化財の状態ごとに分類をした。分類は以下のようにした。

- ①緑：泥落としクリーニングが必要
- ②赤：クリーニングに注意点有り
- ③青：水洗いが必要
- ④黄：クリーニング禁止
- ⑤白：予備

クリーニングの基本的な流れは前回報告したように、泥落とし→水洗い→乾燥という手順をたどる。緑色のスズランテープはその第一段階である泥落としが済んでいないことを表している。赤色は本体に金粉が付いているなど、クリーニングをするにあたって注意をする必要のあるもの、状態が悪く、場合によっては後回しにするものである。青色はすでに泥落としが終了したが水洗いが終わっていないものを示している。また黄色は漆製品で、漆が剥げかけているなど、クリーニングすることで破損するおそれがあり、クリーニングを後回しにするもの、現時点では解決方法がなくクリーニングを禁止しているものを示している。

このように色によって被災文化財の状況を分類することで、作業をする人・作業をお願いする人の両方が状況を把握できるようにした。

クリーニングが進み、収蔵庫に入れられるものが増えてきたことから、今後は被災文化財一点一点にタグを付けるなど、状態と履歴がわかるように準備を整える予定である。図1はタグの素案である。図のようなタグをつかって資料の来歴を管理することで、今後、被災文化財がどこからきたのか、どのように処理したのかなどをわかるようにしておきたい。

歴博が関わっている民家の被災文化財の場合、台帳等がなく、放置しておくとも来歴やその後の扱いなどが分からなくなる危険性



写真1. スズランテープを使った作業状態の分類の例 (上から緑、赤、黄)

○
No. _____
名前 _____
発見・回収日時 _____
発見・回収地 _____
所有者情報 _____
発見当時の状況 _____
<input type="checkbox"/> 乾燥① _____
<input type="checkbox"/> 泥落とし _____
<input type="checkbox"/> _____
<input type="checkbox"/> 水洗 _____
<input type="checkbox"/> 乾燥② _____
<input type="checkbox"/> 収蔵 _____
脱塩処理 無 <input type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/>
発見・回収 _____
国立歴史民俗博物館
収容先 _____
リアス・アーク美術館

図1. 被災文化財の管理用タグ(案)

が高い。そのため早急に目録づくり、管理体制づくりをする必要がある。

(2) 南三陸町志津川の古民家に関して

今回訪問して状態の確認を行ったのは、南三陸町志津川の街道筋にある古い農家で現用の住宅である。築300年の農家とされている。今回の津波で母屋が20mほど流され、壁を失う、柱の一部が折れるなどの被害を受けた。

これまで農業のほか、養蚕や商業などいくつかの生業を営んできたとされており、南三陸町・気仙沼市周辺の物流を考える上でも重要な資料があると予想された。

①現状

この古民家にあった古文書類のほとんどは宮城文書ネットワークの手によって救出されて、凍結乾燥が行われた。一部、残された文書類についても、ご当主が丁寧に乾燥させており、当座の保存には何ら問題のない状態になっていた。

民具はご当主らが救い出してビニールハウスに保管している。ビニールハウスに救出した民具は、全体のごく一部だという。津波で家にあった民具の多くが裏の畑に流されたが、瓦礫の撤去と復興が急がれるなかで、救えた民具はごく一部だったという。

経済的な復興が急がれるなか、民具類はゴミ・瓦礫として扱われてしまう場合も多い。したがって被災文化財の救出はどうしても復興と同時に進むべき急務を要する事案であることを民俗学の専門家の側も肝に命じておく必要があるだろう。

②課題

現在のところ、この住宅からご当主が救出した民具類は農業用のビニールハウスの一角に乾燥しながら保管されている。今後、これらの民具類は南三陸町教育委員会に預ける予定である。その過程でクリーニングなどが必要な場合や収蔵場所に困った場合などには、人員の派遣など何かしらの支援が必要であろう。

(3) 本館館長、副館長らによる現地視察

6月30日、本館の平川館長、久留島浩副館長らが小々汐地区を訪れ現地視察・確認を行った。尾形さんご家族からの被災状況の聞き取り、現地の現状についての確認、被災地における歴博の活動について確認した。

7. 気づいた点

・色分けによる情報伝達・情報共有の方法は有効であると考えられる。とくに作業者が多くなった場合に、どの部分に手をつけてよく、どの部分に手をつけてはいけないのかなど、具体的な指示が可



写真2. 流されて大きく壊れた古民家



写真3. ビニールハウスに収容された民具類



写真4. 救出された大八車

視化できることは作業の効率化とミスの回避に役立つと思われる。今後もさらにアイデアを出しながら、効率のよい作業環境を作っていきたい。

- 作業を人に頼む場合に、どれくらいの結果をだしてほしいのかを具体的に知らせておくことが必要である。そのためにも一緒に作業をするなどの環境を折にふれてつくっていくことが大切である。

8. 今後の課題

今回、南三陸町志津川の被災文化財について現状を確認したが、このように被災文化財が所有者の手で救出されながら扱いに困っている例は多くあると考えられる。地域文化を残しながら将来に伝えていくことを考えた場合に、救出すべき被災文化財はまだ多くあるものと推定される。

小々汐地区・尾形家の被災文化財については前回の報告で今後の活動計画を再確認すべき時期に来ていることを書いたが、次回の活動のなかで一度、ご当主の尾形健さんとの話し合いをする予定である。

9. 次回の予定

2011年7月5日～7日（3日間）

■活動内容

- 小々汐地区・尾形家被災文化財のクリーニング作業と整理作業
- 小々汐地区・尾形家における被災文化財の救出作業

〔第12報〕気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告

2011年7月12日

1. 活動日時

2011年7月5日～7月7日（3日間）

2. 活動の内容

- ・気仙沼市小々汐地区の尾形家における民具・文書資料等被災文化財の救出
- ・救出した被災文化財のクリーニング作業

3. 参加メンバー

- ・国立歴史民俗博物館：小池淳一（7/7）、柴崎茂光（7/6）、山田慎也（7/6）、加藤秀雄、葉山茂
- ・リアス・アーク美術館：川島秀一
- ・気仙沼市教育委員会：秦野寛治、庄司さだ子、橋本和子、斉藤千歳、菊池寿美、藤本愛、

4. 日程

7月5日

- ・リアス・アーク美術館に収容した被災文化財のクリーニング
- ・小々汐地区・尾形家の状況の確認

7月6日

- ・小々汐地区・尾形家における被災文化財の救出活動

7月7日

- ・小々汐地区・尾形家における被災文化財の救出活動
- ・今後の活動に関する会議

5. 被災地の現況と活動の状況

大通り沿いの瓦礫撤去が進むなど、都市の機能が少しずつ回復している。また漁港にカツオ漁船が入港し、少しずつ港も活気を取り戻しつつある。仮設住宅の建設が進み、住宅への入居が始まるなど、復興への活動は本格化している。

小々汐地区・尾形家の住宅からの被災文化財救出作業は、尾形家のご家族や尾形家の住宅再生に関わる方々との調整が必要となり、今回、今後の活動に関する会議を行った。小々汐は大雨と晴天が繰り返り、資料の保存上は好ましくない状況が続いている。早急な救出活動が必要である。

6. 作業内容

今回の作業ではおもに母屋の屋根が着地した地点を重点的に搜索した。同時に気仙沼市教育委員会の方々の協力を得て、救出した被災文化財のクリーニングが急ピッチに進んだ。気仙沼市教育委員会の方々の協力を得たことで、これまで滞りがちであった被災文化財のクリーニング作業が、搜索・救

出活動と同時並行で進めることができるようになり、救出してすぐのクリーニング作業ができるようになった。

(1) 小々汐地区での被災文化財救出活動

今回の作業では尾形さんのご家族に立ちあっていただき、母屋の屋根の下に入り込んでいた駐車場の屋根を撤去し、その下から戦前、戦中の手紙類など紙類を中心とする被災文化財を救出した。

第10報で報告したように、母屋の屋根の下に入り込んでいた駐車場の屋根の撤去は6月22日から始めていたが、その後雨天が続いたこと、クリーニングの体制を整えるために時間を使ったことなどの事情から作業が止まっていた。今回、歴博から4人が参加し晴天に恵まれたことから、この駐車場の屋根の部分で鋼鉄製の梁など一部を残してほぼ撤去した [写真1]。

屋根を撤去した結果、その下の小々汐地区集会場の床部分の上に10cmほど堆積したヘドロの層の一番下の部分から戦前・戦中にやり取りされた手紙や葉書などを発見した。これらはほとんどが粘土状になったヘドロのなかからみつかったため、濡れた状態だった。この場所から発見されたものはおもに紙類である。

7月7日に小々汐地区に重機が入った。気仙沼市のほうで重機をつかって瓦礫の一部を移動して、水道の破裂箇所を特定して水を止める作業を行うとのことだったので、瓦礫の移動に立ちあわせていただいた [写真2]。瓦礫を移動した場所は尾形家の石倉から流れ着いたものを積み上げた場所であり、以前から注目していた場所であった。

重機で瓦礫を撤去する過程に立ちあって検証した結果、この場所では被災文化財はほとんど発見されなかった。作業の際、尾形家のものと思われる住宅の部材が数本見つかった。これらに関しては工事の担当者の方が非常に丁寧に拾い上げてくださり、これまで部材を集めてきた場所に置くことができた。

(2) クリーニング作業

クリーニング作業は気仙沼市教育委員会から応援に来ていただいた方々が主体となって、丁寧に泥落としをしてくださった。1日目は8名、2日目・3日目は9名の方々が作業に携わってくださった。

クリーニング作業は大きな民具類のクリーニングが一段落し、おもに紙ものの札類や冊子類などのクリーニングが中心になりつつある [写真3]。

おかげで小々汐地区で救出した被災文化財の多くが次の日には乾燥作業に入ることができるようになり、迅速な被災文化財のクリーニング体制が確立しつつある。

紙モノに関してはゆっくり作業をすること、一度にすべてを落とすのではなく、取れるところをゆっくり落とし、落とせない部分や湿った部分についてはもう一度乾燥したのちに改め



写真1. 瓦礫の中の被災文化財の搜索



写真2. 気仙沼市の事業にもとづく重機による瓦礫の移動作業



写真3. 気仙沼市教育委員会の方々によるクリーニング作業

て泥落とすることを求め、比較的ゆっくりしたペースで丁寧に作業が進められている。

漆製品については乾燥して漆が反り返ってしまった部分についてはクリーニングせずに置いたままにしておき、比較的破壊の進んでいない部分を刷毛で泥落としている。漆に関しては漆屋で育って一定の専門的な知識・技術を身につけた方が担当している。

(3) 今後の活動に関する会議

気仙沼市による瓦礫の撤去の動向などを踏まえて、小々汐地区・尾形家の被災文化財の救出活動に関して最低限やっておくべきことを検討すること、尾形家再生プロジェクトと現在直面している問題点や検討すべき課題・方向性などを共有することを目的としてリアス・アーク美術館において会議を行った。会議には尾形健氏をお招きして、川島秀一リアス・アーク美術館副館長、尾形家再生プロジェクトのコーディネーターである田揚裕子氏、本館の小池淳一准教授・葉山・加藤が同席した。

今後の歴博の活動については以下のことを確認した。

- ・小々汐地区・尾形家における被災文化財の集中的な救出作業を8月のお盆前までを目処に行う。
- ・お盆前までに行う救出作業では母屋の屋根が着地した部分に集中する。
- ・お盆以降は瓦礫が撤去されるまでの間に出来る限り被災文化財の収集に努める。
- ・瓦礫撤去の際は立ちあって、新たな被災文化財がないかを確認する。
- ・お盆以降の救出活動については尾形家に関しては瓦礫が撤去された時点で打ち切る。

そのほかに尾形家再生プロジェクトの今後の活動方針、つまり再建に向けた取り組みなどが報告された。また必要に応じて現在瓦礫を撤去している作業について、注意点を共有した。

7. 気づいた点

(1) 救出作業

- ・今回、車庫の屋根を撤去したが、この屋根の入り方、ヘドロの入り込み方から被災当時の状況が推定できる。まず尾形家の母屋の部分が流されて着地後、建物内にあった手紙・はがきなどの紙モノが集会所の床に散乱し、そこに引き波とともに車庫の屋根とヘドロが入り込んだようである。
- ・ヘドロをみると一番下の層に到達したような感覚になり見落としがちである。しかし今回の例のように被災文化財が先に散乱し、その上に引き波とともに運ばれたヘドロが堆積することがあるので、見落とさないように捜索をする必要がある。
- ・このように物が散乱したあとにヘドロが堆積する例はほかにもあると予想できることから、今後の捜索の際には少し地面を掘って確認してみる必要がある。

(2) クリーニング

- ・ダンボール紙と和紙は泥まみれになると色や形状がよく似てきて見分けはつかないときがある。クリーニングして泥落としをして初めて、それが単なるダンボール紙だったことが判明することも多い。ただし多少無駄になっても、被災文化財をなるべく多く残すという見地から、モノを確認しながら作業をすすめることが望ましい。
- ・クリーニング作業に携わる人々の人数が増えたことで、競争意識が多少生じている。この競争意識が作業の効率化にとって良い面もあるが、同時に文化財を壊してしまう危険性もはらんでいること

から、もう一度、被災文化財を救出・保存する意義について確認することが必要である。

- 第11号で被災文化財につけるタグを用意したが、救出作業が優先したために、どこから来たかははっきりしていても、搬入した日時などについての情報が失われているものも多い。したがってタグについてはすべてを埋めるのではなく、なるべく情報を残しておくという方針で進める必要がある。

8. 今後の課題

テンバコが不足するなど、クリーニングが終わった被災文化財を保管しておくための道具類、場所に多少問題が出始めている。今週、気仙沼市教育委員会が宮城県のレスキュー委員会から100箱のテンバコを調達してくださった。ただし被災文化財の救出作業、クリーニング後の被災文化財の収納など、あらゆる場面でテンバコが必要となるため、新たに調達しておく必要がある。

これまで救出したものの開けていない筆筒の一部に関して、尾形さんから中身を優先してほしいとの指示があったため、早急に解体するなどの対策をとる必要がある。

9. 次回の予定

2011年7月13日～14日（2日間）

■活動内容

- 救出した被災文化財のクリーニング作業をすすめる。
- 小々汐地区・尾形家の母屋部分における被災文化財の救出活動。

【第13報】気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告

2011年7月19日

1. 活動日時

2011年7月13日～7月14日（2日間）

2. 活動の内容

- ・気仙沼市小々汐地区の尾形家における民具・文書資料等被災文化財の救出
- ・前回救出した被災文化財のクリーニング作業

3. 参加メンバー

- ・国立歴史民俗博物館：松田睦彦（7/13）、加藤秀雄、葉山茂
- ・リアス・アーク美術館：川島秀一
- ・気仙沼市教育委員会：庄司さだ子、橋本和子、斉藤千歳、菊田寿美、藤本愛、阿部和男、村上富士夫、伊藤俊章、佐々木和弘

4. 日程

7月13日

- ・松田、加藤、葉山の3名、気仙沼市小々汐地区・尾形家にて被災文化財の救出活動。
- ・気仙沼市教育委員会のメンバー、リアス・アーク美術館にて被災文化財のクリーニング。
- ・リアス・アーク美術館の川島副館長、気仙沼市教育委員会の幡野氏と今後の活動の打ち合わせ。

7月14日

- ・加藤・葉山の2名、気仙沼市小々汐地区・尾形家にて被災文化財の救出活動。
- ・気仙沼市教育委員会のメンバー、リアス・アーク美術館にて被災文化財のクリーニング。
- ・リアス・アーク美術館の川島副館長、気仙沼市教育委員会の幡野氏と今後の活動の打ち合わせ。

5. 被災地の現況と活動の状況

梅雨が終わり晴天が続いた。気温が摂氏34度まで上昇する真夏のなかでの搜索活動となった。気仙沼市内に駐屯していた自衛隊の一部が撤収するなど、復興が本格化していることをうかがわせる。

小々汐地区の瓦礫撤去はお盆明けまで待ってもらいながら搜索を進めるということが前回の会議で決まっていたが、7月18日頃から小々汐地区の瓦礫撤去が始まるという情報が尾形さんのご家族を通して入った。実際には7月14日から瓦礫撤去が始まった。気仙沼市教育委員会を通じて確認していただいたところ、尾形家周辺に関しては搜索を待って撤去を行うとのことであったが、いずれにしろ時間的な余裕はほぼ無くなったと判断できる。

6. 作業内容

気仙沼市小々汐地区・尾形家住宅に関しては、上記のように瓦礫撤去までに残された時間が少なく

なってきたことを考慮して、まだ搜索の終わっていない母屋の屋根が着地した地点を重点的に搜索した。その結果、土間の囲炉の框とその周りの部材や箱階段などを発見して回収した。また床下の部材を発見するなど、建築の面から見ても重要と思われる部材を救出した。今回の搜索では母屋の部分の7割程度を搜索し終えた。

クリーニングでは前回、リアス・アーク美術館に運び込んだ戦前・戦中の手紙・はがきを中心に泥落としを行った。またクリーニングが終わった被災文化財については、回収場所・作業工程などを記したタグを作成して1点1点に取り付ける作業を行った。

(1) 小々汐地区での被災文化財救出活動

① 囲炉裏の框とその周りの部材の回収

囲炉裏の框は、3週間ほど前に尾形さんからその存在を知らされていた。ただ囲炉裏の框に2本の太い柱が乗っており、間にスチール製の事務机が挟まった状態でその柱の上に大量の瓦礫が乗っていたため、回収できずにいた。

今回の作業ではまず柱を取り除くために、柱の上やまわりに積み重なっていた土壁や木材などの瓦礫を撤去した。その後、スチール製の事務机を除去し、2本の柱を移動した [写真1]。

この一連の作業のなかで、囲炉裏の框に土間の上がり框がくっついた状態で残っているのが確認できた [写真2]。この土間の上がり框は桜材を使っており、ご家族も思い入れのある部分である。そこですでに被災から3ヶ月が経っているとはいえ、屋根のある安定した環境に収容して保管することが重要と判断した。

ただし囲炉裏と土間の上がり框は非常に大きくトラックに乗らないことから、囲炉裏と土間の部分を外して収容することとした [写真3]。囲炉裏や土間の上がり框はすべて組み木になっており、釘を使っていないことから、比較的簡単に、かつ部材を傷つけることなく解体することができた。

② 箱階段

箱階段の一部はすでに救出が終わり、リアス・アーク美術館でクリーニングをして保管している。今回はまだ発見されていなかった箱階段の下側の部分を発見して回収した [写真4]。

箱階段はバラバラになった形で発見された。一段ずつご家族に確認していただきながら、部材を拾い集めた。一方で箱階段のなかにも下駄などの民具が大量に入っていたことから、これらも合わせて回収した。

③ 床の梁と仏壇の周辺

床の梁は当初、ご家族も別の家のものが流れこんだものと考えていた。床の梁は柱など濃い茶色の部材とは異なり、黄土色の部



写真1. 柱の除去作業



写真2. 囲炉裏の框と上がり框の部材



写真3. 土間の上がり框の解体



写真4. 箱階段の救出

材であり、見た目には違っていた。それらの部材を別の場所に移動した際に、梁に換気扇がついていたことから、ご家族がそれを家の部材であると確認した [写真5]。

床下の梁が5本ほど散乱していたが、これらを取り除いた結果、その下から座敷の仏壇のまわりの生活用具が発見され、位牌の一部も発見された [写真6]。



写真5. 移動した床下の梁

(2) クリーニング作業

クリーニング作業は先週に引き続き、気仙沼市教育委員会の方々にお願いして、前回、尾形家から回収した手紙・はがき類をクリーニングしていただいた。紙類については乾きが遅く、またヘドロが大量に付着していることから、取り除く作業に時間がかかっている。

クリーニングの作業と並行して、これまでにクリーニングしたものの来歴を明らかにするために、モノ1点1点にタグを付けた [写真7、8]。タグには前回の報告に載せたように、救出した場所や日時、所有者、クリーニングの方法、クリーニングした日時などを書けるように書式を作った。

タグは水をかぶってもよいように水に強い製図用の用紙を使って、記録は鉛筆で行うようにした。ただこれまでに回収したモノについては救出した場所・所有者についてはわかるようにしていたが、救出日時は分からなくなっているものが多い。



写真6. 仏具などを探す



写真7. タグをつけた被災文化財

(3) 瓦礫撤去に備えた準備

先に述べたように小々汐地区で急遽、瓦礫撤去が始まったことから、14日に今後の活動のなかで搜索すべき地点を集落地図上にマッピングした。このマップは気仙沼市教育委員会、リアス・アーク美術館と共有し、気仙沼市教育委員会から気仙沼市の瓦礫撤去班に状況をお伝えいただくようお願いした。



写真8. クリーニング・整理が終わった被災文化財

7. 気づいた点

(1) 救出作業

- 前回の報告に書いたように当初、8月のお盆前までを目処に母屋の搜索を終えることを目標としていたが、急遽、瓦礫撤去が始まった。瓦礫撤去が始まったことで、計画を前倒しして搜索をする必要が出てきたようである。
- 被災文化財を救出する目的で瓦礫を撤去するときには、対象としている家のご家族も記憶のない、または見たことのないものが出てくることも多い。そのときにそのものがどの部分であるかなどを特定するには時間がかかるため、時間を共有しながらコミュニケーションを図っていくことが大切になる。

(2) クリーニング

- 紙類のクリーニングには乾燥、泥落としという工程を何度か繰り返す必要がある場合が多く、時間がかかる。
- 作業場となっているトラックヤードが午後になると、太陽光が入り込み高温になる。直射日光を避けるための対策は必要である。

8. 今後の課題

瓦礫撤去が始まったため、速やかに母屋の屋根が着地した部分の被災文化財を搜索し、救出する必要がある。また瓦礫撤去に伴って新たに被災文化財が発見される可能性があることから、瓦礫撤去の場になるべく立ち会う。そのほか、これまで課題としてきた開かなくなった箆筒のなかのものを救出する作業を進める。

9. 次回の予定

2011年7月20日～22日（3日間）

■活動内容

- 小々汐地区・尾形家における被災文化財の救出活動。
- 被災文化財のクリーニング活動
- 箆筒のなかのものの救出

【第14報】気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告 ・陸前高田市における文化財レスキュー活動報告

2011年7月25日

《気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告》

1. 活動日時

2011年7月20日～7月22日（3日間）

2. 活動の内容

- ・気仙沼市小々汐地区の尾形家における民具・文書資料等被災文化財の救出
- ・救出した被災文化財のクリーニング作業

3. 参加メンバー

- ・国立歴史民俗博物館：岩淵令治（7/21）、青木隆浩（7/21-22）、加藤秀雄、葉山茂
- ・リアス・アーク美術館：川島秀一
- ・気仙沼市教育委員会：幡野寛治、庄司さだ子、橋本和子、斉藤千歳、菊池寿美、藤本愛、村上富士夫、伊藤俊章、佐々木和弘、阿部和夫

4. 日程

7月20日

- ・リアス・アーク美術館に収容した被災文化財のクリーニング
- ・気仙沼市小々汐地区・尾形家における被災文化財救出活動

7月21日

- ・リアス・アーク美術館に収容した被災文化財のクリーニング
- ・気仙沼市小々汐地区・尾形家における被災文化財救出活動

7月22日

- ・リアス・アーク美術館に収容した被災文化財のクリーニング
- ・気仙沼市小々汐地区・尾形家における被災文化財救出活動

5. 被災地の現況と活動の状況

小々汐地区の瓦礫撤去は気仙沼市内に近い方から少しずつ進んでいる。尾形家があった場所とその周囲は気仙沼市教育委員会の方々のご尽力により8月15日（お盆）が終わるまでは瓦礫撤去を行わないことが決まった。したがって8月15日頃までが手作業で瓦礫を探す期間となる見込みである。

7月20日から22日にかけては台風が日本列島を通過し、台風が運んできた冷たい空気によって気温が20度前後と過ごしやすく、比較的野外での作業がはかどった。

6. 作業内容

前回の作業に引き続き、今回も尾形家の母屋の屋根が着地した地点を中心に被災文化財を探した。

また母屋部分の捜索に引き続いて、これまで表面採集で見つけることができていない土間部分と土間に埋め込まれていた藁打ち石を探した。

被災文化財を探す一方で、前回の作業で救出した囲炉裏の框・土間の上がり框など、雨に濡れることで劣化する可能性が高かった部材をリアス・アーク美術館に運び込んだ。今回も気仙沼市教育委員会にご協力をいただき、リアス・アーク美術館に運び込んだ被災文化財のクリーニングを進めた。被災文化財の救出、クリーニング作業とともに順調に進んでいる。

(1) 小々汐地区での被災文化財救出活動

今回の作業では、前回に引き続いて尾形家住宅の屋根が漂流して着地した地点の被災文化財を探した。とくに今回はこれまで手をつけていなかった奥座敷を中心に作業を進めた [写真 1]。その結果、尾形家住宅の屋根が着地した部分に散らばっていた大型の瓦礫や家屋の屋根をすべて撤去・回収することができ、この場所の捜索はヘドロを掘って埋まった文化財を探すのみになった [写真 2]。



写真 1. 奥座敷部分の捜索

尾形家住宅の屋根部分が着地した場所の被災文化財の捜索に目処が立ったことから、今回は新たに土間に埋め込まれていた藁打ち石を探す目的で、本来の尾形家住宅があった場所で土間を探す作業をした。



写真 2. 瓦礫・尾形家住宅の部材を移動したあとの状況

①母屋の屋根が着地した場所の捜索

母屋の屋根が着地した場所の瓦礫や部材を取り除く過程で、欄間に絡まるようにして砕けた襖が見つかった。この砕けた襖の内側から裏張りに使われた近世文書と思われる文書類が数点見つかった。襖が砕けていたために、裏張りの近世文書も破けてバラバラになっていた [写真 3]。また文書の一部は柱など、住宅の部材に張り付いたり、絡まったりしていた。こうした状況から、文書は部分がわからなくても、拾えるものはすべて拾うという方針で作業をした。



写真 3. バラバラになった襖から発見された裏張り文書の束

またスチール製のラックに張り付いたまま発見された文書については、無理に剥離することが危険と判断して、スチールラックごと回収してリアス・アーク美術館に運び込んだ。

母屋の屋根が着地した部分の捜索では文書類のほかにも、位牌の一部や神社の木札などが見つかった。屋根の下には全体に5cm～15cm程度のヘドロが堆積している。位牌の一部や神社の木札などはヘドロの層の一番下のあたりから掘り出したものである。



写真 4. スチールラックに張り付いた近世文書

これまでにも述べているように、今回の作業では瓦礫や住宅の部材はすべて取り払うことができた。屋根の下の部分に関して残すところはヘドロの層のみである。母屋の屋根が着地した部分の

探索は次回、ヘドロの層をすべて取り除いて被災文化財を探し終えた時点で終える予定である。

②土間の藁打ち石の探索

尾形家の住宅はこれまでの報告のなかで触れてきたように、およそ100m移動している。本来、家屋があった場所は現在、瓦礫に埋もれており、礎石を含めて発見しづらい状況にある。礎石の発見は熊谷産業の田揚氏を中心にして進められることになっているが、家屋のなかでも民俗学的な意味でも重要な存在である土間の部分とそこに設置された藁打ち石を探した。



写真5. 発見された土間の土

尾形家の土間は尾形家住宅のなかでもとくに社交の場、生業活動の場、生活の場、信仰の場として重要な位置を占めてきた。そのなかでも藁打ち石は尾形家の土間の一つの象徴的な存在だった。

これまでの作業のなかでも度々、藁打ち石を探すために表面からの確認をしてきたが見つからないままになっていた。今回、尾形さんとご家族、尾形家をよく知る川島秀一・アリス・アーク美術館副館長に立ちあっていただいて、土間と土間の藁打ち石の位置を再度、確認した。その結果、隣家の漁網などが流れ着いて堆積して瓦礫の山になっている場所の下に土間があることがわかり、そのまわりの瓦礫・漁網を取り除く作業をした。

瓦礫や漁網を取り除いていった結果、土間の部分と思われる硬い土の層を見つけた。この土間の部分は尾形家住宅が健在だった時にはゴツゴツとした起伏に富んだ形状になっていた。今回の作業ではそのゴツゴツとした土の層を確認することができた。ただ今回、土間と思われる場所に到達した場所は藁打ち石があるとされた場所からおよそ1m程度離れた場所だった。次回の作業では藁打ち石があったとされる推定される場所の上に乗っている大量の漁網類を別の場所に動かして、藁打ち石を見つける予定である。

(2) クリーニング作業と被災文化財の搬入作業

前回に引き続き、クリーニング作業は気仙沼市教育委員会から応援に来てくださった方々が引き受けてくださった。1日目には6人、2日目には7人、3日目には9名の方々が作業をしてくださった。また気仙沼市教育委員会の好意でトラックを用意していただき、またクリーニング作業に来た方々も加わっていただき、前回の作業までに小々汐で救出した被災文化財をアリス・アーク美術館に運んでいただいた。とくに先にも述べたように、土間の囲炉裏の框、土間の框など、箱階段の一部、筆筒類、カキダル（牡蠣の養殖などで浮きとして使った樽）など比較的大きく重いものを運んでいただいた [写真6]。



写真6. 被災文化財の搬入作業

クリーニング作業では、1日目は先週までの作業に引き続き、救出した戦前・戦中の手紙・はがき類の泥落としを進めていただいた。紙類は乾燥に時間がかかり、泥落としも1度で終わらすことが難しいため、少しずつ進めていただいている。また今回、小々汐地区からアリス・アーク美術館に運んでいただいた大型の



写真7. 囲炉裏の框のクリーニング

被災文化財も、刷毛をつかって泥落としをしたのち、水洗いをして陰干ししていただいた [写真 7]。

7. 気づいた点

(1) 救出作業

- 第12報でも書いたように、ヘドロの層の一番下の部分から被災文化財が見つかる可能性がある。どの精度で被災文化財を救出するかはその時々状況に応じて判断せざるをえないが、できることならばヘドロをさらう作業をする方が救出漏れを防ぐ意味ではよい。
- 漁網類を瓦礫の中から取り出すときには見えるところを切り刻んでいくよりも、なるべく切らずに網に引っかかった瓦礫類を少しずつ外していったほうが、早く撤去することができる。ナイロン製の糸の細い網については絡まりが激しく、また引っ張ると切れてしまうことも多いため、切らずに少しずつ引き出していくことは難しいが、木綿やナイロン製でも太い糸を使ったものについては絡まっているものを外して網を引き出すほうが作業効率が良い。
- 土間のように長い時間をかけて固められた土は、ヘドロのような湿った土が長時間乗っていたとしても溶けてしまうことなく残っている。今後、こうした生活の場のディテールも何らかの方法で保存していく方法を考える必要があるだろう。

(2) クリーニング

- 救出した被災文化財の一部から木喰い虫が見つかった。これらについては博物館資料であれば防虫剤・殺虫剤などをつかって除去できるが、現在のところ処遇の決まっていない個人の所有物については今後も使われる可能性があり、むやみに防虫剤や殺虫剤は使えない。この場合、ビニール袋に密閉した上で、車のなかのように日中、高温になる場所に置いておくこと効果的であることを教えられた。
- 当然のことであるが、他人にクリーニングをお願いする場合は、自分や所有者がこだわっている部分についてはきちんと伝えることが必要である。この点は忘れやすいため注意を要する。

8. 今後の課題

本報告の5に書いたように、小々汐地区の瓦礫撤去は8月15日以降に行われることとなった。当初、8月のお盆までに終了する予定だった母屋の屋根が着地した部分での被災文化財の搜索・救出活動はほぼ目処が立ち時間的に多少の余裕が生まれた。今後はより生活文化を精緻に残すために、搜索範囲を再度広げながら、まだ見つからない土間や土間の藁打ち石の搜索、古文書の搜索を中心に作業を行う。

またこれまでの報告で度々、作業を予定しながら進められていない筆筒類の解体と中身の救出についても、天気や瓦礫撤去までの残された時間との兼ね合いにはなるが、早急に時間をとって進める。

9. 次回の予定

2011年7月27日～29日(3日間)

■活動内容

- 救出した被災文化財のクリーニング作業をすすめる。
- 小々汐地区・尾形家の母屋部分における被災文化財の救出活動。

《陸前高田市における文化財レスキュー活動報告》

1. 活動日時

2011年7月20日～7月21日（2日間）

2. 活動の内容

陸前高田市旧生出小学校に保管されている陸前高田市立博物館被災文化財および陸前高田市海と貝のミュージアム被災文化財の救出活動を行った。

3. 参加メンバー

- ・坂本 稔（国立歴史民俗博物館、7/21）、柴崎茂光（国立歴史民俗博物館）、山田康弘（国立歴史民俗博物館）、ほか19名
- ・陸前高田市関係者：10名

4. 日程

7月20日および21日

- ・陸前高田市旧生出小学校に保管されている陸前高田市立博物館被災文化財および陸前高田市海と貝のミュージアム被災文化財の救出活動を行った。

5. 被災地・被災文化財の状況

6月中旬以来、約1か月ぶりに陸前高田市を訪問し、レスキュー活動を行った。館内からの被災文化財の救出作業は6月に終了し、今月は、被災文化財の応急処置（クリーニング作業・防カビ作業）を中心に行っている。前回の状況と比較すると、玄関や廊下に置かれていた雑誌類の応急処置や整理作業も進むなど、救出作業が格段に進んでいた。



写真8. 被災文化財の搬出作業

6. 作業内容

体育館や旧生出小学校2階の教室に置かれていた民具400点以上を校庭に運び出し、応急処置（クリーニング作業・防カビ作業）を行った上で、体育館に収納した（写真9）。このほかに、陸前高田市立博物館関係者を中心に、雑誌類、土人形、貝類の各種クリーニング作業や、自衛隊によって運び出された土器資料の移管作業、支援されたコンピューターを活用した骨角器のデータベース



写真9. 開扉裏の框のクリーニング

スおよび照合作業を行った（写真9）。

7. 気づいた点

- 脱塩作業まで広げるのではなく、応急処置（クリーニング作業・防カビ作業）を優先的に行うことが効率的・効果的であるという専門家の（先月訪問時の）助言を受けて、応急処置により特化させて作業を行ったことが、著しい進展につながった。
- 6月時点では、漁網が校庭の一角に固めて置かれていたが、7月上旬に現地スタッフの判断で、漁網を校庭いっぱい広げて乾燥した上で、体育館に収蔵していた。専門家の助言を聞くだけでなく、試行錯誤を重ねながら、地道に救援事業を行ってきた現地関係者の努力に敬意を表したい。
- 今後は、被災した文化財のデータベース構築支援や、長期的な視点に立った上での支援・物資提供が必要といえる。

〔第15報〕気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告

2011年8月3日

1. 活動日時

2011年7月27日～7月29日（3日間）

2. 活動の内容

- ・気仙沼市小々汐地区の尾形家における土間周辺の搜索活動
- ・尾形家から救出した被災文化財のクリーニング作業

3. 参加メンバー

- ・国立歴史民俗博物館：内田順子、丸山泰明、加藤秀雄、葉山茂
- ・リアス・アーク美術館：川島秀一
- ・気仙沼市教育委員会：幡野寛治、庄司さだ子、橋本和子、村上富士夫、伊藤俊章、佐々木和弘、阿部和夫

4. 日程

7月27日

- ・小々汐地区・尾形家の土間の瓦礫の撤去作業
- ・救出した被災文化財のクリーニング

7月6日

- ・小々汐地区・尾形家の土間の瓦礫撤去とワラ打ち石の搜索
- ・救出した被災文化財のクリーニング

7月7日

- ・小々汐地区・尾形家の土間の瓦礫撤去とワラ打ち石・土間の保護
- ・救出した被災文化財のクリーニング

5. 被災地の現況と活動の状況

小々汐地区では瓦礫撤去が始まってから頻繁に海岸線沿いの道路に砂利を敷く作業が続いている。土地の沈降が激しく、満潮・大潮のときに道路が冠水することが原因である。同時に震災と津波で傷んだ道路を砂利を敷いて嵩上げすることで大型の重機やトラックが通りやすい状況を作っている。

小々汐地区の瓦礫撤去は順調に進んでおり、撤去範囲が尾形家のまわりに近づいてきた。前回の報告でも述べたように、尾形家のまわりについては8月15日を過ぎるまでは撤去作業を行わないことになっているため、多少搜索に費やすことのできる時間が残されている。

今回の作業では田揚裕子氏をはじめとする熊谷産業の方々、青山学院大のボランティアの方々がかつ汐地区で尾形家の礎石探しの作業をされていた。

6. 作業内容

今回の作業では2つの作業を行った。ひとつは小々汐地区・尾形家がもともとあった場所でワラ打ち石を捜す作業である。もう一つはこれまでの報告で度々課題として挙げていた文化7年の建前手伝い帳を救出した和筆筒から捜しだす作業である。また被災文化財のクリーニングは引き続き、気仙沼市教育委員会の方が担当して手紙・はがき類のクリーニングを進めてくださった。

(1) 小々汐地区での被災文化財救出活動

7月27日の作業では先週の活動で尾形さんご家族、リアス・アーク美術館の川島秀一副館長に確認していただいたワラ打ち石があると想定される場所のまわりの瓦礫を取り除いた〔写真1〕。

ワラうち石があると想定された場所には漁網と隣家の屋根瓦、生活用具などがからみ合って積み重なっており、それらをつづつ取り除く作業をした。その結果、土間と考えられる面から石が並んだ場所を見つけることができた。

7月28日の作業の前に尾形さんご家族にその石の列について報告し、再度、ワラ打ち石の場所を確認した。その結果、27日に見つけた石の列は土間の上がり框の下に敷かれていたものであったことがわかった。そこで28日の作業ではまず石の列がどのような状態にあるかを確認する作業を行い、ワラ打ち石があったと思われる場所の瓦礫・漁網を移動した。ワラ打ち石は漁網の下にあり、重油の混ざった厚さ10cm程度のヘドロの下になっていたため、ヘドロを取り除いて掘り起こした〔写真2〕。

ワラ打ち石を発見したあとは再度、ヘドロをつかかってその場所の周りを埋めなおした。これは土間の湿度を保ち土間が乾燥することによって起こるひび割れを防ぐこと、ほかの団体が瓦礫撤去や礎石捜しなどの作業する際に誤って土間を踏み壊してしまうのを避けることなどを目的としたものである。

7月29日の作業では土間と推定される場所の瓦礫をなるべく多く運びだして、なるべく土間部分を踏まずにほかの人びとが作業しやすい環境をつくることに務めた〔写真3〕。その上で土間の表面をヘドロが乗ったままの状態ですりシートをかけて保湿と保護を行った。

母屋が本来あった場所に堆積している瓦礫を移動する過程でハワイの土産などの民芸品を数点みつけた。これらの民芸品についてはリアス・アーク美術館の川島副館長が重要な指摘をされている。気仙沼の海岸線には大型漁船での労働に就いている人びとが多く、そうした人びとの土産としてハワイなど海外の民芸品が家に持ち込まれる例が多いという。今回、作業中に発見したものがそのような経歴でもたらされたものであるかは確認ができなかったが、個人の思い出を象徴的に表すものである点や気仙沼地域の生活の一端を端的に表すものとして重要である点を考慮して、これらの民芸品をリアス・アーク美術館に運んでお預かりした。



写真1. ワラ打ち石のまわりの瓦礫を取り除く



写真2. ヘドロから掘り起こしたワラ打ち石



写真3. 瓦礫の絡まった漁網を動かす

(2) 和筆筒内の文化財救出

文化7年(1810年)に尾形家が建てられた際に書かれ、200年間に渡って尾形家で大切に保管されてきた建前お手伝い帳が入っているとされる和筆筒について、尾形さんから筆筒を壊しても救出してほしいとの要請があったことから、今回、救出を試みた。この和筆筒はそれ自体も重要な文化財であることを考慮して、なるべく破壊せずに中身を救出するという方針からこれまで筆筒の木材が乾燥して収縮するのを待っていたものである。

今回、破壊することを前提として、どのように破壊すれば最小限に留められるかを検討した。尾形家で使われている一般的な和筆筒は裏側に比較的薄手の板のものが多く、しかしこの和筆筒は非常に重厚な作りをしており、分解という方法が困難なことがわかった。また筆筒の四隅に取り付けられた鉄製の金具が錆びてもろくなっていることから、分解をした場合には金具が失われる危険性もあった。

そこで全面の板が抜ける可能性を覚悟で引き出しを前に引き出す方法をとった。そして破壊をせずに2段の引き出しを開けることができた。引き出しの表面に「うちしき」と書かれた紙が貼ってあり、引き出しになかには多数の布が入っていた。これらは地元で「うつしき」「うちしき」と呼ばれる布である。この布は葬儀などのときにつかわれるという。

和筆筒のなかの布には多少、カビや油污れが見がれた。文化7年の文書は「うちしき」と一緒に入っており、一部、筆筒と同化していた[写真4]。これらを破壊せずに処理するには少々時間が必要なこと、作業を行った日の午後が雨で野外での作業が困難であったことから、ビニール袋に入れて筆筒のなかに入っていた時と同じ密閉状態をつくり、布や文書を保管し、来週の作業で保存・クリーニングの処理をすることとした[写真5]。



写真4. 筆筒に張り付いた文書



写真5. ビニール袋を使った応急処置



写真6. 気仙沼市教育委員会チームによるクリーニング作業

(3) クリーニング作業

今回もクリーニング作業は気仙沼市教育委員会の方々を中心となって進めていただいた。7月27日・28日は6名、29日は5名が作業をしてくださった[写真6]。

今回も前回に引き続いて紙類、とくにはがきと手紙類のクリーニングをお願いした。戦前・戦中はがき・手紙類がおもである。ほとんどが2度目、3度目の泥落としの工程に入っている。今後、小々汐地区であつめた被災文化財の全体を把握する作業が必要であり、リストをどのようにつくって行くかが次の課題である。

7. 気づいた点

(1) 救出作業

- ・尾形家の屋敷内に入り込んだヘドロは平均すると10cmの厚さに達していた。ヘドロには海の底に溜まった物質のほかに船から流れたと思われる重油が混ざっており、強烈な匂いがしている。

- 人命救助・被災者救出の作業の際に重機をつかって掘られたと思われる排水溝が尾形家の母屋の一部を破壊している。そのため、家の礎石が移動していたり、土間の一部が欠損している可能性が高い。
- 土間の上がり框の下に置かれていた石は一部、失われていた。これが重機による作業によって出来たものか、それとも津波によって流されたものかは判断しにくい。石が失われた部分については土間も一部壊れており、赤土がみられた。
- 今回、乾燥と踏みつけることによる土間の破壊を避けるためにブルーシートで覆った。土間の部分は乾燥してしまうとひび割れや崩壊が起こることが予想される。本来的に土間は湿った空間であることを考えると、保存のためには何らかの湿度を保つための処置が必要であると考えられる。

(2) 和箆筒からの文化財救出およびクリーニング

- 乾燥させることによって箆筒が開く可能性は高まる。ただし隙間ができることはカビを寄せ付けるということでもあり、開けて内部のものを保護することと箆筒自体の保護のどちらを優先するかは臨機応変に対応する必要がある。
- 箆筒内をものを救出する作業をする際は天気と時間を考慮する方がよい。箆筒内には布製品がある場合も多い。布製品についてはカビが発生したときには水洗いをして干してしまうことが有効であるとのアドバイスを国立民族学博物館の日高慎吾さんから頂いた。こうした作業をするには十分な時間とスペースを確保する必要があり、乾燥のことを考えると晴れた日を選び、なるべく長く作業をできる日を選んだほうがよい。
- 作業時間に制限があるなかで、カビが発生しているものを扱う場合はビニール袋に入れて箆筒のなかと同じ状態を保つことで、環境変化を避けて急激な文化財の劣化を避けることはできる。これがベストな方法ではないものの、対処療法として有効となる場合もある。

8. 今後の課題

尾形家の被災文化財については、母屋の搜索・土間の搜索ともに一応のめどが立った。今後は表面採集を行いながら、まだ救出が終わっていない被災文化財を救出して、瓦礫撤去までにより多くの被災文化財を救出することを目指したい。

9. 次回の予定

2011年8月3日～5日（3日間）

■活動内容

- 救出した被災文化財のクリーニング作業をすすめる。
- 民博チームに協力を仰ぎ、これまで処置が終わっていないオシラサマなどのクリーニング方針を立てる。
- 小々汐地区・尾形家の母屋部分における被災文化財の救出活動。

〔第16報〕気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告

2011年8月9日

1. 活動日時

2011年8月3日～8月5日（3日間）

2. 活動の内容

- ・気仙沼市小々汐地区の尾形家における民具・文書資料等被災文化財の救出
- ・被災資料（津波被害を象徴する資料）の収集
- ・救出した被災文化財のクリーニング作業

3. 参加メンバー

- ・国立歴史民俗博物館：加藤秀雄、葉山茂
- ・リアス・アーク美術館：川島秀一
- ・気仙沼市教育委員会：秦野寛治、庄司さだ子、橋本和子、村上富士夫、伊藤俊章、佐々木和弘、阿部和夫
- ・国立民族学博物館：和高智美
- ・千里文化財団：西岡圭司
- ・日本博物館協会：3名

4. 日程

8月3日

- ・リアス・アーク美術館にて比較的クリーニングが困難な被災文化財を洗浄

8月4日

- ・小々汐地区・尾形家にて被災文化財の救出活動・被災資料の収集
- ・リアス・アーク美術館に搬入した被災文化財のクリーニング、乾燥

8月5日

- ・小々汐地区・尾形家にて被災資料の収集
- ・リアス・アーク美術館に搬入した被災文化財のクリーニング

5. 被災地の現況と活動の状況

気仙沼市では旧市街地・港周辺などをはじめとして津波の被害のあった地域の瓦礫の撤去が急ピッチで進んでいる。小々汐地区で3週間前に始まった瓦礫撤去は尾形家周辺を除く地域で進められており、すでに集落の入口付近の瓦礫は撤去が終わった。避難所となってきたホテルなども8月一杯で被災者の方々の退去が決まるなど、避難生活に変化がみられるようになってきた。

小々汐地区の尾形家周辺はお盆のあとに瓦礫撤去が入ることになっており、現在のところ瓦礫撤去

は進んでいない。被災文化財は太陽のあたる場所に落ちているものは表面が劣化しているものの、比較的良好な状態を保っているものが多い。一方でモノの下になって常に湿っているものには、白カビなどが生えていることが多くなった。

前回の報告で書いたように、尾形家について最低限、救出しておくべき被災文化財の救出は終わった。ただし救出を終えたとはいえ、未だ発見されることなく瓦礫のなかに埋もれている文化財も多いことは言うまでもない。

6. 作業内容

これまでの活動では被災前の生活を残すこと、救出することに全力を挙げてきた。そして仏壇や神棚の救出などをはじめとして、多くの成果を挙げてきた。一方でこれまでほとんど手をつけてこなかったこととして、津波被害の状況を示すものの収集がある。博物館の役割を考えた場合、単純に古い生活を残すことが重要なだけでなく、被災という現象もまた、後世に伝える活動も重要になる。とくに21世紀に起こった自然災害の結果を示すようなモノの発見と収集は、今回の活動の意義を考える上でも重要になる。

今回はこうした視点に立って、表面採集を中心としながら、被災文化財の救出とあわせて津波被害をモノを通してどのように伝えることができるのかについて検討し、津波を表す資料の収集を試みた。

こうした活動とあわせて、気仙沼市教育委員会のチームが中心となって、被災文化財のクリーニングを進めていただいた。

(1) 小々汐地区での被災文化財救出活動

特定の場所を掘り下げて被災文化財を捜す活動は、上記のようにほぼ終了した。そこで表面をくまなく見ながら被災文化財を捜す表面採集に切り替えた。とくにこれまでほとんど捜していなかった小々汐地区の山側のエリアを中心に被災文化財を捜した。

小々汐地区はちょうど三角の入江のような形をしており、その先端は山に続いている。今回の津波で先端の沢の部分にまで津波が及んだ。その場所から海を見ると、津波が相当な高さまで上がったことを確認することができる [写真1]。

このエリアには漁具を中心に民具が散らばっていた。今回の作業ではカキ樽と呼ばれる民具を2個発見できた。カキ樽はかつて、カキ養殖の浮きとしてつかわれていたもので、木製の樽にコールターを塗って隙間を埋めた黒い樽である [写真2]。この樽は以前にも尾形家の母屋があった場所でみつきり、すでにリアス・アーク美術館に運んでいる。しかし破損が激しく、分解寸前になっていた。今回発見したものは、以前のものより形状を保っており、地域の生業活動の歴史を振り返る上でも重要な資料となりうるものである。

(2) 小々汐地区における津波被害を示す資料の収集

上記のように博物館の役割を考えた場合、津波被害もモノをつかって表現する準備は必要であろうという観点から、今回津波被



写真1. 津波の最終到達地点から海を望む



写真2. 救出後リアス・アーク美術館に運ぶ準備をしたカキ樽

害を示す資料を集めた。リアス・アーク美術館の川島副館長とも相談し、小々汐に限らない津波被害の資料の収集の可能性も検討した。しかし今回の国立歴史民俗博物館の活動を考えた場合、最終的にほかの地域のものも集めるにしても、できることならば小々汐地区の被害を表すものを集めておくことは必要であるという結論に至った。

津波被害の状況を示す資料を集める上で、以下の点を考慮した。

- ①被災して壊れているとはいえ、モノは所有者があり、その所有関係ははっきりさせる必要がある。
- ②被災された方々の感情面への配慮は十分行う必要がある。
- ③文化財を残すという観点からすると古いものに目が行きがちになるが、古いものだけではなく、21世紀というこの時代に起こった自然災害であることを示すものも含める必要がある。

①に関しては、基本的には尾形さんのものを中心に集めることとした。ご家族に立ちあっていただき、被災前にどのような状況にあったかなども含めて聞き取りをしながら、モノを集めた。

②に関しては、リアス・アーク美術館の川島副館長とも情報を交換しながら、尾形家のものを集めることが可能かどうかも含めて検討した。その上で尾形さんのご家族に意図を説明し、津波被害を示す資料を残すことの重要性についても説明した。これまでの活動は尾形さんご家族の深いご理解の上に成り立っていることを鑑みても、今後とも折に触れて意図を説明しながら、ご理解していただけるように努めていくことが重要であろう。

③に関しては、古いものとして漆器類などを集めた。こうしたものも綺麗にクリーニングしてしまうことで被害を伝える役割が薄らいでしまう可能性があることから、今後、泥のついた形で資料化の道も探っていく必要がある。また現代の生活用具として、まず家電類を集めた。液晶テレビやゲーム機など、現代の生活を示すような資料を集めることができた。ただし現代の生活を考えた場合、家電一辺倒の資料収集は非常に短絡的でもあり、表面的でもあると考える。そこで現代社会の課題を検討し、介護用のトイレやベットを集めるなど、モノのバリエーションを広げることも試みた。

このように今回、さまざまな観点から現代の生活を被災の現場で検討することとなった。この作業は現場でモノを見ながら進める以外に方法がなく、しかも時間のかかる作業となった。

(3) クリーニング作業

気仙沼市教育委員会のチームが中心となって、今回も紙類のクリーニングを中心に作業を進めていただいた。紙類のクリーニングはこれまで何度か報告をしてきたとおり、非常に根気のいる作業で時間がかかる。また一度でクリーニングが終わるものではなく、状況に応じてではあるが数度のクリーニングが必要となる場合も多い。こうしたことから、気仙沼市教育委員会の方々には多大なご苦労をおかけしている。

また5日には日本博物館協会のボランティアの方々と保存科学を専門とする国立民族学博物館の和高氏に来ていただき、これまでに救出したもののクリーニングに困っていた被災文化財のクリーニングについてアドバイスをいただき、また実際に困難な資料の救出を手伝っていただいた。

先週報告したように文化7年の文書類は状態が悪く、筆筒の引き出しのなかで筆筒に密着した形で発見された。これらの資料については国立民族学博物館の和高氏、日高氏に奈良文化財研究所と連絡をとっていただき、筆筒から引き離した上で、冷凍乾燥をする手はずをとっていただいた。

また同じ筆筒に入っていた布・衣類はシャワーノズル付きのホースでカビや泥を落とす天日で乾燥

させた。色落ちの激しい布類は天日で乾燥した。同じく筆筒から発見された掛け軸（仏具）は開いて乾燥させた〔写真3〕。

これまで懸案となってきたオシラサマについては、分解せずに表面に付着している泥をブラシでできうる限り落とす方法でクリーニングすることを確認した。



写真3. 筆筒から発見された掛け軸（仏具）の乾燥作業

7. 気づいた点

(1) 救出作業・津波被害資料の収集

- 生活道具の散乱が見られなくなった部分から津波が来た場所を推定できることから、モノの移動を見ていくことで改めて今回、津波被害の大きさ、津波の大きさを再認識することができた。
- 津波被害を表す資料を探してみると、意外にも生活用具自体はそれほど外見の損傷が少ないことに気付かされる。結局、津波の被害の一番大きいものは、ありえない場所にありえないものがあるということであり、個別の生活用具で被害を示すことは殊の外難しいことが改めてわかってきた。

(2) クリーニング

- 筆筒を開ける場合には天気を見ること、時間を見ることは大切である。なるべく天気がよく時間がたっぷりある日の午前中に筆筒を開け、午前中をかけてクリーニングを行った上で、午後には乾燥作業をするほうがよい。
- 前回の作業ではカビの飛散を避けるためにビニール袋に全てを詰めて密封する作業を行ったが、今後の作業では上記のように天気と時間には十分、気を使いながら作業を進める必要がある。
- クリーニングが必要な文化財と津波被害の状況を示す資料のようにクリーニングをしないほうがよい資料とが混在するようになってきたことから、クリーニングをするかどうかについて確実な意思の疎通が必要になっている。

8. 今後の課題

今回の報告で述べてきたように、津波被害をいかにして後世に伝えていくかは重要な課題である。博物館という施設・機関の役割を考える上でも看過できない課題であり、今後の作業でも時間のある限り考えながら作業を進めていくことが必要である。とくに瓦礫撤去までの時間がないこともあり、喫緊の課題である。

クリーニングに関しても今後、筆筒類を開けて中身を確認した上で、中身のクリーニングをしていくことが必要である。またオシラサマなど、方針の決まったものについては順次作業をしていきたい。救出した被災文化財が増えてきたことから、改めてタバコの確保が課題になっている。

9. 次回の予定

2011年8月10日～17日（8日間）

■活動内容

- 救出した被災文化財のクリーニング作業を進める。
- 津波被害の状況を示す資料の収集を進める。
- 津波被害のお盆に対する影響の調査を行う。

〔第17報〕気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告

2011年8月24日

1. 活動日時

2011年8月10日～8月17日（8日間）

2. 活動の内容

気仙沼市小々汐地区の尾形家における民具・文書資料等被災文化財の救出
救出した被災文化財のクリーニング作業
被災後初の盆行事に関する調査と記録

3. 参加メンバー

- ・ 国立歴史民俗博物館：小池淳一、山田慎也、松田睦彦、小島道裕、常光徹、柴崎茂光、加藤秀雄、葉山茂（※活動した期間はそれぞれ異なっており最長が8日間である）
- ・ リアス・アーク美術館：川島秀一
- ・ 気仙沼市教育委員会：幡野寛治、庄司さだ子、橋本和子、斉藤千歳、菊池寿美、藤本愛、村上富士夫、伊藤俊章、佐々木和弘、阿部和夫
- ・ その他：東北学院大学ボランティアステーションが派遣した学生ボランティア（関西学院大学、麗澤大学、桜美林大学ほか）

4. 日程

8月10日

- ・ リアス・アーク美術館にてクリーニングの状況を確認し、川島副館長と打ち合わせ
- ・ 救出した被災文化財のクリーニング

8月11日

- ・ 小々汐地区・尾形家にて被災文化財の救出活動
- ・ 被災資料の収集
- ・ ボランティア学生に対する説明会
- ・ 気仙沼市における行政による盆行事の調査
- ・ 救出した被災文化財のクリーニング

8月12日

- ・ 小々汐地区・尾形家にて被災資料・文化財の収集

8月13日

- ・ 小々汐地区・尾形家にて被災資料・文化財の収集
- ・ 尾形家当主、尾形健氏と今後の展開についての話し合い
- ・ 盆行事に関する調査

8月14日

- ・小々汐地区・尾形家にて被災資料・文化財の収集
- ・尾形家の展示方針に関する話し合い
- ・盆行事に関する調査

8月15日

- ・尾形家の盆の墓参りに関する調査
- ・小々汐地区・尾形家にて被災資料・文化財の収集
- ・盆行事に関する調査
- ・救出した被災文化財のクリーニング

8月16日

- ・遠野市立博物館の文化財レスキューに関する企画展を視察
- ・陸前高田市旧生田小学校における文化財レスキュー状況の視察
- ・小々汐地区・尾形家にて被災資料・被災文化財の収集
- ・救出した被災文化財のクリーニング

8月17日

- ・宮城県を中心に震災復興に関わるグッズの収集

5. 被災地の現況と活動の状況

お盆を迎え、津波で多くの犠牲者が出た三陸地方一帯で犠牲者を追悼する行事が行われた。その様子はテレビ・新聞などでも多く報道され、今回の活動ではそうした報道の結果も津波被害とその後の復興を知るための資料として集めた。8月15日の盆には家を流された人びとの間では、先祖の霊を迎える場所がないので今年はお盆行事をしないという声も聞かれた。一方で盆には多くの方が墓参りをする姿がみられた。

気仙沼市全域で進められている瓦礫撤去の作業は、お盆期間中のためすべて休止となり、我々の活動にとっては被災文化財を捜す最後の機会となった。尾形家住宅については今回の活動をもって瓦礫のなかから被災文化財・被災資料を捜す活動は一旦、終了することとなった。今後は救出した文化財のクリーニング・整理を中心としながら、現場の状況に合わせてできる範囲で瓦礫撤去が行われず保護される予定の場所を中心に、残ったものなかから被災文化財を捜す作業を行っていく。

6. 作業内容

今回の活動は7泊8日で行った。今回の活動には(1)小々汐地区・尾形家の被災文化財捜索に一定の目処をつけ瓦礫撤去に備えること、(2)震災・津波の被害を示す資料、被災資料を集めること、(3)災害発生後、初めてのお盆を人びとがどのように迎えるのかを記録すること、(4)博物館で震災や津波被害を展示する方法を検討すること、という4つの目的があった。

(1)に関してはほぼ当初の目標を達成した。また(2)に関しては現場で具体的にモノを収集しながら検討を繰り返し、収集可能な範囲の被災資料を集めることができた。(3)に関しては尾形家の墓参りに同行して調査を行った。(4)に関しては震災直後から陸前高田とその周辺で文化財レスキューに携わってきた遠野市立博物館、被災した陸前高田市立博物館の資料が収容されている旧陸前高田市立生田小学校を訪問して情報交換を行った。そのほか、被災文化財のクリーニングは気仙沼市教育委員会の方々と東北学院大学が派遣しているボランティアの学生が中心となって進めていただいた。

(1) 小々汐地区・尾形家での被災文化財救出活動

尾形家の被災文化財は瓦礫撤去がはじまるとほとんど失われるため、最低限捜すべきモノを再確認し、最終的な捜索を行った。

リアス・アーク美術館に運んだ資料を検討し、救出すべき被災文化財はほぼ救出し終えたことを確認した。しかし神奈川大学日本常民文化研究所（以下、常民研）が整理した文書が見つかっておらず、最後の捜索では文書の捜索を目的として作業を行うこととした。また現在も救出したものの尾形家周辺に置いたままになっている大型の被災文化財があったため、それらを一ヶ所にまとめてリアス・アーク美術館に運ぶための手はずを整えた（写真1）。



写真1. 一ヶ所にまとめた被災文化財（小々汐地区にて）

文書はこれまでに常民研の封筒が見つかった場所の周辺を範囲を広げて捜した。しかし結果として文書を発見することはできなかった。一方で文書を捜す過程で、瓦礫に埋もれていたお札や囲炉裏の自在鉤の一部などが見つかった。

(2) 震災・津波の被害を示す資料、被災資料の収集

災害の状況を記録・保存することも博物館の役割として重要である。これまでの活動では被災前の生活を復元するための手がかりを探すことに多くの時間を割いてきた。一方で被災を示すモノ資料を捜す時間をほとんど設けてこなかったことから、前回に引き続き今回も被災そのものを示すモノ資料を集める作業を集中的に行った。

今回は瓦礫のなかから現代の生活のなかで使われ津波で流されて壊れた玩具や生活道具などを集めた。またヘドロが入り込んだままの茶道具セットなど、津波によってもたらされた被害の一端を知ることのできる資料を収集した。

(3) 震災後初めての盆行事に関する調査・記録

今回の津波被害では多くの方が犠牲になった。そのような状況を人びとがどのように受け止めていくのかや、普段の生活のなかでは当然のように行われてきた盆行事が家を失い先祖を迎える場所を失うなかで無形の民俗文化をどのように継承していくかを記録する必要があるとの観点に立ち、尾形家のお盆の墓参りに関する記録、仮埋葬が行われた墓地における調査などを行った。

尾形家の墓参りでは実際に墓参りに同行し動画と写真で記録させていただいた（写真2）。尾形家ではお盆に先祖を迎える様々な儀礼や行事をしていたが、今年は家が津波で流され盆行事をほとんど行わなかった。当初、墓参りも見送る予定であったが、結果的に墓参りだけはされるとの決断をされたことから、許可を得て同行させていただき記録した。

仮埋葬が行われた墓地における調査では震災後、身元不明のまま埋葬されている犠牲者が数多くいることが改めてわかった。波路上牧地区・地福寺で行った聞き取り調査によると、行方不明者の家族がお盆を機に死亡届を提出し、葬儀を行う例もあるという。震災後、個々の被災者がどのような生活上の影響を受けているのか、また新たな出発に向けて災害をどのように納得をしていくのかを聞き取り調査などを通じて記録していくことも、今後、重要な作業になるだろう。



写真2. 尾形家による盆の墓参り

(4) 震災や津波被害を展示する方法の検討にむけて

遠野市立博物館で津波被害と文化財レスキューをテーマとした企画展を開催していることから訪問し、学芸員の前川さおり氏から展示について解説していただいた(写真3)。また文化財レスキューや展示についての情報を提供していただいた。



写真3. 遠野市立博物館学芸員による展示説明

遠野市立博物館は震災直後から岩手県沿岸部の博物館で文化財の救援ボランティア活動を行ってきた。その活動はふだんの人的ネットワークに支えられてきたという。企画展示は津波による文化財の被災状況とその救出の必要性を訴えるもので、救出されたモノを中心にして、その被害状況やクリーニングの過程などが展示されていた。我々の活動はこれまで一軒の民家に特化していたこともあり、今後、そうした活動の特徴を捉えながら震災に関してどのような展示が可能なのかを探っていくことが重要である。

(5) クリーニング

リアス・アーク美術館の川島副館長の指示のもと、気仙沼市教育委員会の方々を中心となって、救出された紙資料のクリーニングをしていただいた。クリーニング作業には東北学院大学の学生ボランティアの方々も参加された。

7. 気づいた点

- 被災文化財の救出活動を効率的に行うには、やはり場所を特定して目的を絞って作業を進めることが有効である。漠然とこの山の中から被災文化財を捜すということも重要であるが、むしろ目的意識をもったときに、そのなかで派生的に見つかるものにも目を配ることができるようになる。
- 被災文化財の救出に入った当初は多くの民具や文書などがみつきり成果が上がったが、現在は人力で捜すことのできる範囲はほぼ捜し終えており、新たに発見することは難しくなっている。

8. 今後の課題

尾形家を対象とした被災文化財の救出活動は今回の作業で一区切りがいった。ただ今後も尾形家のあった場所については瓦礫を残す可能性があることから、今後ともできうる限り規模を縮小しながらも捜索は行う。また救出してクリーニングを終えた被災文化財の保管場所、作業スペースについて、リアス・アーク美術館の状況の変化も踏まえながら検討していく必要がある。クリーニングについては新たな段階に入りつつあり、現在の一時保管から長期保管に向けた方法の検討を必要になる。

9. 次回の予定

2011年8月31日～9月2日(3日間)

■活動内容

小々汐地区・尾形家から救出した被災文化財のクリーニング

小々汐地区の復興に向けた動向の記録

旧唐桑町の漁民センターに収蔵され被災した文化財の救出に向けた準備

〔第18報〕気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告 陸前高田市における文化財レスキュー活動報告

2011年9月6日

《気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告》

1. 活動日時

2011年8月31日～9月2日（3日間）

2. 活動の内容

- ・気仙沼市小々汐地区の尾形家における民具・文書資料等被災文化財の救出
- ・救出した被災文化財のクリーニング作業と整理

3. 参加メンバー

- ・国立歴史民俗博物館：加藤秀雄、葉山茂
- ・リアス・アーク美術館：川島秀一
- ・気仙沼市教育委員会：庄司さだ子、橋本和子、斉藤千歳、菊池寿美、藤本愛、村上富士夫、伊藤俊章、佐々木和弘、阿部和夫
- ・その他：東北学院大学災害ボランティアステーションが派遣した学生ボランティア
明治学院大2名、立命館大、関西学院大

4. 日程

8月31日

- ・リアス・アーク美術館にて川島副館長と合流、活動内容について打ち合わせ。
- ・学生ボランティアと小々汐地区・尾形家に移動し、瓦礫撤去の状況を確認。
- ・リアス・アーク美術館にて救出した被災文化財のクリーニング。

9月1日

- ・リアス・アーク美術館にて救出した被災文化財のクリーニング。
- ・救出した被災文化財のリスト化に向けて状況を確認。

9月2日

- ・リアス・アーク美術館にて救出した被災文化財のクリーニング。
- ・救出した被災文化財のリスト化のための資料整理。

5. 被災地の現況と活動の状況

被害の大きかった気仙沼市錦町など、海岸に近い場所でも東北電力による電柱の設置が始まるなど、急速に復旧作業が進んでいる。またカツオー一本釣り漁の船が入港するなど、港の機能が回復するに従って気仙沼市の重要な産業である水産業の復興も進んでいる。一方で台風シーズンを迎え、今回の日程は大潮と重なり午後3時から5時ごろにかけて道路が冠水して車の通行を妨げるなど、土地が地震によって沈降したことが復興の作業に影響を与えている。

当初の予定通り、お盆過ぎから小々汐地区の尾形家周辺で瓦礫撤去の作業がはじまった。瓦礫の撤

去は家の復旧作業を予定している谷の奥の住宅のまわりを中心に進められている。一方で事前の打ち合わせ通り、尾形家住宅のあった元々の敷地と屋根が着地した場所は撤去を後回しにすることになっており、撤去までには多少の時間的余裕がある。文化財の救出を集中的に行う期間は前報にも書いたように終わったと考えているが、今後ともより精緻な情報を記録するため、救出活動は続けていく必要があるだろう。

6. 作業内容

今回は3日間にわたって作業を行った。今回の活動では(1)撤去作業開始後の小々汐地区と尾形家の状況を確認すること、(2)小々汐地区で集めた被災文化財をリスト化する準備作業、(3)回収した被災文化財のクリーニングの3つの作業をした。そのほか、ボランティア活動に参加している大学生に対する現地説明など、被災文化財の救出の目的や意義を広く知ってもらうための活動もあわせて行った。

(1) 撤去作業開始後の小々汐地区と尾形家の状況を確認

復興の流れが加速するなかで、小々汐地区でも住宅の一部を修復する動きがみられるようになった。住宅の修復作業をするにあたり、瓦礫を撤去して資材等を置く場所を確保する必要がでてきたことから、お盆を境に尾形家住宅が流された谷地でも瓦礫撤去が始まった。気仙沼市教育委員会から事前に連絡をいただき、当面は尾形家がもともとあった場所と屋根が着地した場所の瓦礫撤去は行わないことを知らされていた。今回は実際にどのように瓦礫撤去が行われているのかを確認した。



写真1. 小々汐地区の瓦礫撤去作業

瓦礫の撤去作業では工事関係者が尾形家住宅の部材を残すことを方針として共有しているようである。したがって住宅の部材は重機で引っ張り出す時点で確認が行われ、また集落内の集積場に運ばれて、大型のダンプカーに積み込まれるまでに再度確認が行われるなど、とても丁寧な瓦礫撤去作業が行われていることが確認できた。

瓦礫撤去作業は現在、谷の一番奥の部分から徐々に進められており、次第に作業範囲を広げていく予定のようである(写真1)。

(2) 小々汐地区で集めた被災文化財をリスト化する準備作業

これまでの作業では現場で被災文化財を集める作業に集中してきたが、前報で書いたように現場での作業は収束しつつある。一方でこれまでリアス・アーク美術館に運び込んだ被災文化財は、被災文化財の発見を急いだことや発見した順に運び込んだことなどの理由から、バラバラになった状態で保管されているものが多くあった。今回は被災文化財をリスト化するにあたり、バラバラに壊れた状態で保管されている部品を集める作業を行った。

作業は仏壇や仏壇周りの柵や引き出し、囲炉裏部分の天井、箱階段、土間の上がり框、囲炉裏などについて、被災前に撮られた写真をもとに場所を確認し、一点一点集めていく方法をとった。集めた部品は場所が特定できたものから、すべて「尾形家、仏壇」などのようにカードをつくってタグを付けた。その結果、これまでどの部分に使われていた部品、部材なのかはわからなかったものの多くがそれぞれ意味のあるものとしてまとめることができるようになった。今後、これらのものに通し番号

をつけて、クリーニング処理などの履歴と併せてリアス・アーク美術館に運び込んだ被災文化財のリスト化を進めていく予定である。

(3) 回収した被災文化財のクリーニング

今回も小々汐地区・尾形家からリアス・アーク美術館に運び込んだ被災文化財は、気仙沼市教育委員会の方々と東北学院大学災害ボランティアステーションが派遣する大学生ボランティアの方々にお願いして進めていただいた（写真2）。



写真2. 気仙沼市教育委員会とボランティアによるクリーニング作業

今回のクリーニングではこれまで開かないために乾燥を待っていた筆筒のクリーニングを中心に作業をしていただいた。今回、クリーニングをした筆筒は4本あったが、すべて運びこんでから1ヶ月から3ヶ月程度の時間が経っている。しかしほとんどの筆筒が水分を含んで膨張しており、引き出しを開けることが難しい状況にあった。そこで最小限の破壊は仕方ないものとして背板を外して引き出しを後ろから叩く方法で開けた。この作業で多くの衣料品や掛け軸などが発見された。発見した衣料品は干して泥落としをした。

7. 気づいた点

- 被災文化財の救出に携わることによって、被災前の状況がわからなくても、モノの全体像を想像できるようになる。今回、津波で解体してしまった被災文化財を再度集めて、ひとまとめにする作業を行った際は、拾い集めた時の状況・記憶をたどることで効率的に作業ができた。
- 震災後6ヶ月が過ぎようとしている現在では、震災や津波の被害が次第に報道されなくなってきたおり、ボランティアに参加した学生のなかにはすでに瓦礫はほとんど撤去されていると想像してきた人もいた。被災文化財の救出活動でボランティアを受け入れる際には、時間が許す限り現場を見てもらい、どのような作業に携わっているのかを知ってもらうことが、より効率的な作業につながり、同時に被災文化財を救出する作業への理解を広めるきっかけにもなると考えられる。

8. 今後の課題

数は少ないものの、まだ小々汐地区に集めて運んでいない被災文化財もあるため、それらを運ぶ手立てを考える必要がある。これまでに発見したものなかで、部材の足りていないものが発見されたため、それらをさがすことも必要である。

9. 次回の予定

2011年9月7日～9月8日（2日間）

■活動内容

小々汐地区・尾形家から救出した被災文化財のクリーニング
救出した被災文化財のリスト化作業

《陸前高田市における文化財レスキュー活動報告》

1. 活動日時

2011年8月31日～9月2日（3日間）

2. 活動の内容

・陸前高田市旧生出小学校に保管されている陸前高田市立博物館被災文化財および陸前高田市海と貝のミュージアム被災文化財の救出活動を行った。

3. 参加メンバー

青木隆浩（国立歴史民俗博物館）、山田康弘（国立歴史民俗博物館）、柴崎茂光（国立歴史民俗博物館）、日高真吾（国立民族学博物館）、和高智美（国立民族学博物館）、

ほか大学関係者・博物館関係者ボランティア16名

陸前高田市関係者10名

4. 日程

8月31日～9月2日

・陸前高田市旧生出小学校に保管されている陸前高田市立博物館被災文化財および陸前高田市海と貝のミュージアム被災文化財の救出活動を行った。

5. 被災地・被災文化財の状況

今回も、前回と同様に被災文化財の応急処置（クリーニング作業・防カビ作業）を中心に行っていた。また応急処置が終了した文化財に関するデータベースづくりも本格化していた。



写真3. 民俗資料の一次洗浄風景

6. 作業内容

3日間で、旧生出小学校2階の教室に置かれている民俗資料580点に対して、一次洗浄（クリーニング作業・防カビ作業）を行った（写真3）。また、一次洗浄作業が終了した民俗資料を棚に保管するスペースを作ったうえで、ここに一部を保管した。このほかに、支援されたコンピューターを活用した民俗資料のデータベースおよび照合作業を行った（写真4）。



写真4. 民俗資料データベースの作成作業

7. 気づいた点

・一次洗浄作業も地道に続けられており、今後もこのペースで進むことが予想される。なお、全国各地の博物館・大学・研究機関に送られてレスキューされている被災文化財が戻ってきた場合の保管場所をどのように確保するのかということは、今後懸念される問題としてあげられる。

【第19報】気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告

2011年9月13日

1. 活動日時

2011年9月7日～9月8日(2日間)

2. 参加メンバー

- ・ 国立歴史民俗博物館 : 加藤秀雄、葉山茂
- ・ リアス・アーク美術館 : 川島秀一
- ・ 気仙沼市教育委員会 : 庄司さだ子、橋本和子、村上富士夫、伊藤俊章、佐々木和弘、阿部和夫
- ・ その他 : 東北学院大学災害ボランティアステーションが派遣した学生ボランティア
明治学院大学2名、関西学院大学、麗澤大学

3. 日程と作業

9月7日

- ・ 歴博・尾形家再現展示に向けた準備作業
- ・ 気仙沼市小々汐地区における復興作業の記録
- ・ ボランティア学生の小々汐地区における現地説明会
- ・ リスト化に向けた被災文化財の整理作業
- ・ 救出した被災文化財のクリーニング作業

9月8日

- ・ 歴博・尾形家再現展示に向けた準備作業
- ・ リスト化に向けた被災文化財の整理作業
- ・ 被災地復興に関わるグッズの収集
- ・ 気仙沼市小々汐地区・尾形家における被災文化財の救出活動
- ・ 救出した被災文化財のクリーニング作業

4. 被災地の現況と活動の状況

震災から6ヶ月が経とうとするなか、気仙沼市の港湾地域や鹿折地区でも次順に電信柱が立ち始めるなど、街の復興に向けた動きが少しずつではあるが目立つようになってきた。一方で鹿折地区では現在も警察による作業が続いており、津波による被害がまだ収束していないことを思い知らされる。

小々汐地区の大家(オーイ)・尾形家があった谷ではお盆過ぎから瓦礫撤去が始まることになっていたが、お盆後約2週間をかけて谷の奥の方から瓦礫が運びだされた。一部で地表面が見えるようになり、瓦礫の撤去が進んだことが一目見てわかるようになった。また尾形家のあった谷では瓦礫がなくなった土地に資材を運んで、残った家を整備して新たな生活をはじめようとする動きもみられるようになった。

こうしたなか、被災文化財の救出支援活動は前回の報告でも書いたように新たな段階を迎え、救出

した資料のリスト化など、救出した被災文化財をいかにして効率的に、かつ確実に管理していくかということが課題になりつつある。

5. 作業内容

(1) リスト化に向けた準備作業

これまでの報告で述べているように、救出した尾形家の被災文化財についてはクリーニングが終わり、名称がわかるものから順次リスト化を始めている。しかし前回の報告でも述べたように建材や建具など、比較的大きく、部材がバラバラになってしまっているものに関してはリスト化が進んでいない現状がある。そこで前回に引き続いて今回も大型の被災文化財で、被災してバラバラになってしまったものについて、それぞれのまとまりごとに整理をして、部材や建具の位置を確認する作業を行った。

今回は歴博第4展示室の新構築に際して工事を担当する展示業者の方々が尾形家の再現展示に向けて部材の計測のためにリアス・アーク美術館に来館したこともあり、業者の方々のご協力を得ながら作業を進めた。とくに展示業者の方々が津波被害に遭う前の尾形家で調査をしていこともあり、その知識のほか、建築に関する専門的な知識などの面から助言を頂いた。

その結果、これまでにバラバラになったまま、その役割がわかっていなかった板類の多くの使用箇所があきらかになった。囲炉裏のヒゲダナ（火棚）を構成していた部材などが特定できた。また箱階段についても津波の被害に遭ったことや家の柱の一部が箱階段を構成していたために取り出すときに解体を余儀なくされたことなど、いくつかの原因で全体像がわかりにくくなっていたが、今回、集めた被災文化財についてはほぼ全体を復元することができた。

こうした作業はこれまでに歴博や展示業者が撮影した写真を照らし合わせながら行った〔写真1〕。バラバラになった材から、その材をつかった場所を特定していくことは難しく時間がかかった。一度ですべて組み上がるものではなく、作業の途中で家の別の部分の部材を検討しているうちに、最初に検討していた部分の組み合わせがわかってくる場合も多い。ただ最初から多めに部材を回収することを心がけていたため、比較的きちんと復元できる部分が多く搜索時の方針が功を奏した。また柱の部材については展示業者の方々が現地で、尾形さんのご家族から聞き取りをして位置の確認をした。



写真1. 部材の組み合わせの検討

(2) 小々汐地区・尾形家における被災文化財の救出活動

リスト化に向けた作業をすすめるなかで、仏壇などの細工のなかでまだ発見されていないものがあったことがわかってきた。今回は発見されていないものを見つけることを目的として、とくに捜す場所を仏壇が発見された場所に絞って搜索をした。仏壇が発見された場所の下は10cmから15cmのヘドロの層になっている。そのヘドロを端から取り除く作業をしたところ、ヘドロに埋まった仏壇の燭台や仏飯器、木製の装飾などがみつかった〔写真2〕。木製の装飾は割れてバラバラになっており、まだ一部が発見できていない。見つけたものはすべてリアス・アーク美術館にお預かりした。



写真2. ヘドロの中から救出した仏具

(3) 気仙沼市の復興に関わる記録

被災地の現況と活動の状況でも述べたように、小々汐地区の尾形家があった谷でも残った家屋を修繕する動きがみられるようになった。修繕をはじめたお宅は津波で多少浮き上がって家の土台と家自体が多少ずれたという。しかし重機による修正でほぼ元通りにできることがわかったことから、重機による修正が行われた。家屋の修繕に先立って、修繕を担当する大工が主催して儀礼が行われた。今回はその様子をビデオと写真で記録させていただいた。

鹿折地区のなかで津波の被害が比較的少なかった場所では少しずつ家屋を修繕して新たな生活を始める準備がみられるようになってきている。小々汐地区でもすでに一部で生活の復旧に向けた作業が始められている家もある。しかし今回、尾形家住宅のあった谷でもそうした動きが見られたことで、これでやっと尾形家住宅のまわりも復興に向かって一歩を踏み出したことになり、瓦礫を捜す作業に携わってきた者としては感慨一入だった。

(4) 災害・復興に関わるグッズの収集

8月10日から17日にかけての活動のなかで、災害から復興していく過程で被災地に現れる復興関連のグッズを集めた。この活動は博物館の役割を考えた際に、被災文化財の救出という役割のほかに被災から人びとがどのように復興していくのかを記録しておく必要があるとの考えで始められたものである。そうした活動としてはこれまでに毎回、地域の写真を撮るといった活動をしているが、同時にものとしても記録が必要であろう。

8月10日から17日にかけては陸前高田市のほか、宮城県・福島県などの各地域で復興グッズを収集した。今回は歴博のグループにもっとも馴染みの深くなった気仙沼市でも復興グッズを収集した[写真3]。収集にあたっては気仙沼市教育委員会の方々から情報をいただき、また観光協会を訪問して動向を教えていただいた。気仙沼市では商店が独自に復興グッズを作る場合が多く、品物としてはTシャツが多い[写真3、写真4]。市販のものほかに、団体などで独自に制作したものも多数あるとの情報を得た。



写真3. 復興グッズ (Tシャツ)



写真4. 復興グッズ (酒)

(5) クリーニング

今回は気仙沼市教育委員会の方々や東北学院大学災害ボランティアステーションが派遣した4人の学生さんたちがクリーニングを担当してくださった。今週も先週に引き続いて引き出しから出てきた衣類を中心に泥落としと乾燥のクリーニングをしていただいた。また9月7日にリアス・アーク美術館に運び込んだ尾形家住宅の建具のクリーニングもお願いした[写真5]。

衣類のクリーニングでは繊維が弱っているものも多く見られたことから水洗いを避け、刷毛と筆を使って泥落としをすることにした。水洗いをした場合に繊維が切れて、布がほぐれてしまう可能性があるとの報告が気仙沼市教育委員会の方々からあったため



写真5. 建具のクリーニング

である。

建具についても変形を避けるため、基本的には丁寧に泥落としをすることにした。漆のついた建具については水洗いは避け、その他のものについては状態をみて泥落としのあとに水洗いをお願いした。

(6) ボランティア学生への現地説明会

前回に引き続いてボランティアにきた学生を対象に現場で説明会をした。現場を見ることで、震災後6ヶ月が経とうとしているにもかかわらず瓦礫が散乱している現状を再確認してもらい、同時に被災文化財救出の必要性についての説明をした。前回も述べたように、こうした地道な活動を通じて、文化の復興に対する取り組みへの理解を深めてもらうことが重要だろう。

6. 気づいた点

- 部材の組み合わせには建築的な常識やど、専門的な知識が必要になる場合も多い。したがって全てを自分たちで解決しようとするのではなく、専門家の助言を受けながら検討していくことが必要になってくるだろう。
- どの部材がどのモノの一部であるかがわかっていても、それを組み上げてひとつのモノにしていくには相当な時間がかかる。
- ヘドロの層のなかにはまだまだ救出できていない生活用具が多くあると予想される。ヘドロのなかについても時間が許す限り、丹念に見ていくことが必要である。

7. 今後の課題

今回の活動中、リアス・アーク美術館の川島副館長から9月末を目処として美術館の再オープンに向けて尾形家から救出した被災文化財を移動しなければならない旨、連絡があった。救出してクリーニングした被災文化財の移動先については現在、リアス・アーク美術館、気仙沼市教育委員会、歴博で連絡を密にしながら検討していく必要があり、保管場所と作業場所の確保が喫緊の課題である。また保管場所の移動までに回収した部材の場所を特定しておく作業が必要になるだろう。

8. 次回の予定

2011年9月14日～9月16日(3日間)

■活動内容

小々汐地区・尾形家から救出した被災文化財のクリーニング
救出した被災文化財のリスト作成に向けた作業

【第20報】気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告

2011年9月20日

1. 活動日時

2011年9月14日～9月16日（3日間）

2. 参加メンバー

- ・ 国立歴史民俗博物館：葉山茂
- ・ リアス・アーク美術館：川島秀一
- ・ 気仙沼市教育委員会：庄司さだ子、橋本和子、村上富士夫、伊藤俊章、佐々木和弘、阿部和夫
- ・ その他：東北学院大学災害ボランティアステーションが派遣した学生ボランティア
明治学院大学3名、東北学院大学

3. 日程

9月14日

- ・ 気仙沼市小々汐地区・尾形家における被災文化財の救出活動
- ・ 被災文化財のリアス・アーク美術館への運搬
- ・ 救出した被災文化財のクリーニング
- ・ 南三陸町志津川の八幡宮における奉納神楽の記録

9月15日

- ・ 南三陸町志津川の八幡宮における奉納神楽の記録
- ・ 救出した被災文化財のリスト化作業
- ・ 救出した被災文化財のクリーニング

9月16日

- ・ 気仙沼市小々汐地区・尾形家における被災文化財の救出活動
- ・ 被災文化財のリアス・アーク美術館への運搬
- ・ 救出した被災文化財のクリーニング

4. 被災地の現況と活動の状況

気仙沼市内の多くの地域で瓦礫の撤去作業が急速に進むようになった。鹿折地区でも住宅地を中心に撤去作業が進んでいる。一方で工場が集中していた地域の瓦礫は徐々に撤去されるようになってきたが、完全撤去にはまだしばらく時間がかかるようである。

被災地の神社では秋祭りが行われるようになった。この地域では多くの神社が比較高い場所にある。高台の神社にはかろうじて津波の被害を免れ、被災後は一時的な避難所の役割を果たした場所も多い。こうした神社で地域の人びとが集まって秋の祭りが執り行われ、伝統芸能などが披露される機会も出てきた。秋祭りは瓦礫撤去に参加したボランティアグループなどが参加することも多く、また被災後の復興の動きとその意思を地域の人びとが再確認する場にもなっている。

気仙沼市小々汐地区・尾形家周辺では瓦礫撤去がおよそ4割程度まで進んだ。瓦礫が撤去され掘り出された道路脇の側溝が清掃されるなど、復興に向けた瓦礫撤去作業が丁寧に進められている。一方で今回の活動時期は大潮の時期にあっていた。東日本大震災によって海岸沿いの土地が数十センチ単位で沈降したことや側溝が清掃されたことで水の通りが良くなったこともあいまって、満潮時には海に通じた排水溝を通じて潮が上がりすぎて作業場所が海水で冠水するなど、被災文化財を捜すには作業をする時間を選ぶような状況になりつつある。

5. 作業内容

(1) 被災文化財のクリーニング

被災文化財のクリーニングについては今回も気仙沼市教育委員会および東北学院大学災害ボランティアステーションが派遣する学生ボランティアたちをお願いした。

今回の作業では5月6日に小々汐地区・尾形家の屋根のなかから長持に入れて救出した札類のクリーニングを中心に作業をしていただいた。この長持は湿っていたこともあり、救出後、蓋が膨張して開かなくなり乾燥を待っていたものである。当時は救出のための機材が不足しており、現地に十分持ち込むことも不可能だったため、たまたま屋根の下に入り込んでいた長持に発見したモノを入れて屋根の外まで運び出した。中に入れていたものは神社の木札のほか、ネズミの巣になった形跡のある紙のお札などである。

これらの札類のうち、紙の札はネズミの糞から強烈な臭いを発していたものの、海水に浸かっていたこともありカビの発生は見られなかった。また木札にもカビの発生は見られなかった。以上の状況から、紙の札については乾燥させてネズミの糞を取り除くことを目指し、木札については乾燥させて一枚一枚泥を落とす作業を進めた。

(2) 小々汐地区・尾形家での被災文化財救出活動

前回に引き続き津波を受けた尾形家の屋根が着地した地点に堆積したヘドロの層を掘って、被災文化財を捜す作業をした。作業には気仙沼市教育委員会の方々にも参加していただいた。

1日目の作業の際、大潮によって潮位が高くなり、被災文化財が埋まっていると想像される場所が完全に冠水してしまう状態になった。冠水した状態でヘドロの除去作業を続けると、水が濁ってしまい、捜し残しの場所や被災文化財の見落としなどが起こった。そこで日を改めて干潮で冠水しない時間に再度、被災文化財の捜索を行った。

捜索では屋根の下にあったヘドロを全面的に表面から10cm程度取り除き、その泥のなかに被災文化財が埋まっていないかを捜した。とくに前回の活動の結果から、仏具や仏壇の装飾などのが埋まっている可能性が高かったこと、それらが砕けて木片になっている可能性が高いことが予測されたことから、すくいとったヘドロを一つ一つ手で確認して木片は全く関係ないもの以外はすべて救出する方法をとった [写真1]。

今回目標とした範囲についてはヘドロを取り除きその中を確認できたが、仏具や仏壇の装飾の発見には至らなかった。一方で建具の一部と思われる木片が多数発見でき、それらを回収した。また尾形さんのご家族が我々が捜した場所とは少し離れた場所で仏壇の装飾の一部と思われる破片を発見された。次回の作業では仏壇の装飾が発見された場所のまわりのヘドロを探したい。



写真1. ヘドロを掘って被災文化財を捜す作業

(3) 被災文化財のリアス・アーク美術館への運搬

運搬手段を確保して小々汐地区からリアス・アーク美術館に運ぶ予定だった被災文化財が、運搬手段の確保が難しかったために置いたままになっていた。今回、乗用車で運ぶことのできるものに関してはリアス・アーク美術館に運んで管理をする必要があると判断した。

今回の作業では木製の白や唐白の一部と思われる部材など、重量があるものの車に載せることのできる大きさのものを載せてリアス・アーク美術館に運び込んだ。これらのものについても陰干しで乾燥させたうえで泥落としと最終的な水洗いなどのクリーニングをする予定である。また現在も現場にある大型の被災文化財については今後、早急に運搬手段を確保する予定である。

(4) 救出した被災文化財のリスト化作業

今回はクリーニングが終わった被災文化財をリスト化していく作業を実際に気仙沼市教育委員会の方々に協力していただいて試した。尾形家の被災文化財については津波で分解したものが多く、今回はバラバラになったものをできるだけ一ヶ所に集めて、全体で一つの番号を付け、分解している部材に枝番をつける方法で作業をした。

作業のなかで一時、作業の効率化のために次々に被災文化財に手をつけていく場面があったが、番号が飛んでしまう、二重になるなどのミスが発生したために、一つずつ作業をする方法を再度確認して作業をした。役割分担などでまだ十分ではない部分があり、今後の作業のなかで検討していく必要がある。

(5) 南三陸町志津川の八幡宮における奉納神楽の記録

南三陸町志津川は津波による壊滅的な被害を受けた地域の一つである。今回、伊勢大神楽講社の調査をされている鳥取県の鳥取市歴史博物館の学芸員の方々から南三陸町志津川かみのやまの上山八幡宮で14日と15日の日程で奉納神楽が行われるとの情報をいただき、復興に関わる無形文化の伝承の記録として重要と判断し記録作業をした。

上山八幡宮は今回の津波被害で鳥居の下までが津波が押し寄せたものの、神社の本殿と神楽の舞台などは残った。今回はこの神社で恒例の奉納神楽が行われた。今回は3月11日の東日本大震災や津波被害によって志津川の町が壊滅的な被害を受けたこともあり、復興に向けて地域の人びとがぜひとも開催しようということになったという。今回は毎年奉納されている本吉法印神楽の夜神楽奉納とともに、三重県を根拠地に活動する伊勢大神楽講社による獅子舞神楽の奉納が行われた〔写真2、3〕。本吉法印神楽は法印と呼ばれる修験者によってこの地域で伝えられてきたものであるが、現在は保存会を中心に演目が伝えられている神楽である。

このほか、祭りの会場で志津川地区での津波当日の被災体験を聞き取ることができた。体験を語ってくださった年配の女性は自宅のなかで津波の被害に遭ったという。津波がきたとき自宅の2階に逃げたが水は2階まで上がってきて、自分は階段のところまで浮いてしまって気がついてみたら天井の下にできた僅かな隙間に顔を出していたという。津波が引いた跡でその隙間を見たら



写真2. 本吉法印神楽「日本武」の奉納神楽



写真3. 伊勢大神楽講社による獅子舞の奉納

20cm ほどだったというが、もし外に逃げ出す判断をしていたらここにはいなかっただろうと語ってくださった。

その女性によれば、志津川の周辺では津波で神社が流されたところもあり、そういう場所では神楽の道具なども流されて何も残らなかったという。それにくらべると拜殿や神楽の道具が残った上山八幡宮では祭りに必要なものが残っており、多少無理をしても祭りを開催することが復興に向けた人びとの決意を示す上で大切だったという。

こうした津波の体験談は最近になって少しずつ話してくださる方々が増えてきた。体験の記録はなかなか難しいことではあるが、今後はこうした語りの記録も重要になってくるだろう。

6. 気づいた点

- バラバラになった被災文化財を捜すときには、引き波を考慮してモノが流れていった方向を捜してみることが必要である。軽いものについてはより流されている可能性が高く、また部品や破片などの細かくなったものもより遠くに流されている可能性が高い。
- リスト化の作業では次々に被災文化財に手をつけていくのではなく、ある程度、一つのものについては分解しているモノも集めてまとまりで全体が把握できるように作業を進めていくことが必要である。
- 被災文化財の整理をする際は、多少手間がかかってもモノを作業場所に運んで確認しながら作業を進めていくほうがよい。手間を惜しんで人がモノのある場所に移動しながら作業をすると、全体が把握できなくなり、番号を間違えるなどのミスが生じやすい。
- 大型の被災文化財を整理する際は、役割分担を考える必要がある。台帳に記録する人、台帳の番号と札の番号を突き合わせる人、被災文化財を整理場所に運ぶ人など、システマティックな作業体制を考えていく必要がある。

7. 今後の課題

前回に引き続き、被災文化財の保管場所の検討が課題になっている。リアス・アーク美術館の復旧工事にに向けた動きが本格化する前に保管場所を確保する必要があり、リアス・アーク美術館や気仙沼市教育委員会と相談する機会を持つ必要がある。

リスト化に向けてより効率的で、かつ誰でもやりやすい方法を考えることが必要である。とくに人数が多くなると作業の単純化は必要不可欠であり、やり方を検討したい。

8. 次回の予定

2011年9月21日～9月22日（2日間）

■活動内容

小々汐地区・尾形家から救出した被災文化財のクリーニング

小々汐地区の復興に向けた動向の記録

救出した被災文化財のリスト化作業

【第 21 報】気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告

2011 年 9 月 27 日

1. 活動日時

2011 年 9 月 21 日～9 月 22 日（2 日間）

2. 参加メンバー

- ・ 国立歴史民俗博物館：加藤秀雄、葉山茂
- ・ リアス・アーク美術館：川島秀一
- ・ 気仙沼市教育委員会：庄司さだ子、橋本和子、村上富士夫、伊藤俊章、佐々木和弘、阿部和夫

3. 日程

9 月 21 日

- ・ 救出した被災文化財のクリーニング
- ・ クリーニング済みの被災文化財のリスト化作業

9 月 22 日

- ・ クリーニング済みの被災文化財のリスト化作業
- ・ 救出した被災文化財のクリーニング
- ・ 小々汐地区・尾形家における被災文化財の救出活動

4. 被災地の現況と活動の状況

台風が気仙沼周辺を通過したために仮設住宅に住む方々に避難勧告が出るなど、気象の影響を大きく受ける週となった。実際、市内の田中前などではあふれた川の水が市街地に流れ込み、仮設住宅の床下にまで達した。また高潮により道路などが冠水するなどして、市内の交通網が寸断される事態となった。台風通過後も雨が残り、気温が 15 度まで下がるなど、日中も肌寒い状況であった。

尾形家住宅の屋根が着地した場所では瓦礫撤去が進み、我々が集めた住宅の部材が瓦礫撤去の業者によって一ヶ所に集められた。瓦礫撤去は前報でも書いたように、業者が部材を瓦礫の中から一つづつ拾い出しながら丁寧に作業が行われている。ただし細かい民具などについては重機が入っていて危険で近づけないため確認することは難しい。一応、業者にも探したいものは伝えてあるものの、今後は見つけることは困難であると思われる。

5. 作業内容

(1) 小々汐地区・尾形家での被災文化財救出活動

尾形家住宅の屋根が着地した部分にはこれまで 3ヶ所に分けて部材が置かれていた。またその周りに瓦礫の山が連なる状況になっていた。今回はこれら瓦礫を重機をつかって片付けることになったことから、山の上に乗った大型の瓦礫を重機で取り除いていただきながら、その下を瓦礫撤去の作業をされている業者の方々と尾形さんのご家族にご協力いただいて、建具の破片や部材など、尾形家住

宅の詳細に関わる部材を集める作業をした。

その結果、家の部材は仮置きではあるが一ヶ所にまとめることができた。また瓦礫のなかに埋もれていた筆筒や筆筒の部材など、家具を発見した。また障子の棧などの破片を多く発見した。これら発見したモノは尾形さんの了解を得て、リアス・アーク美術館にお預かりした。



写真 復元した仏壇の装飾

(2) クリーニング済みの被災文化財のリスト化作業

仏壇とそのまわりの部材を中心に、小々汐からリアス・アーク美術館に運んでクリーニングしたモノをリスト化する作業を行った。確認したところ、仏壇については装飾品も含めて比較的残っていることがわかった。一方で仏壇の両側の側壁の板が失われていること、仏壇内の段が失われていることなどがわかった。

仏壇の装飾は比較的破損が少なく、漆塗料の剥落などの状況はあったものの、無事であることが確認できた。また破損して7つほどに割れた装飾が1点あったが、救出したものを探した結果、ひとつの完成した姿（もとのままの姿）を再現することができた [写真]。

仏壇のリスト化は場所を特定しながらの作業となり、非常に時間がかかったが20点をリスト化することができた。

(3) 救出した被災文化財のクリーニング

クリーニングは今回も気仙沼市教育委員会の方々をお願いして進めていただいた。今回は傷みの激しい札類や着物類のクリーニングをしていただいた。また今回、現地から運び込んだ建具や筆筒の部材などもクリーニングしていただいた。

6. 気づいた点

- ・台風ともなう気圧の低下で沈降した海岸部の土地が浸水しやすくなっており、海岸に近い場所での作業は午前中にしかできない状況になっている。
- ・リスト化の作業では単純に集めたものをリストにすれば良いわけではなく、ひとつのモノはまとめて管理する必要があり、その全体像をある程度把握するには多くの時間を要する。

7. 今後の課題

救出した被災文化財の保管場所を移動する必要がでてきた。リアス・アーク美術館のバックヤードが救出した被災文化財で埋まっている状況であり、また前回も報告したように美術館の再開に向けた準備のためバックヤードを空ける必要がある。気仙沼市教育委員会、リアス・アーク美術館と話し合い、早急に移動場所を決めたい。

8. 次回の予定

2011年9月28日～9月30日（3日間）

■活動内容

移動場所についての検討

小々汐地区・尾形家から救出した被災文化財のクリーニング

【第22報】気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告

2011年10月4日

1. 活動日時

2011年9月28日～9月30日（3日間）

2. 参加メンバー

- ・ 国立歴史民俗博物館：加藤秀雄、葉山茂
- ・ リアス・アーク美術館：川島秀一
- ・ 気仙沼市教育委員会：幡野寛治、庄司さだ子、橋本和子、村上富士夫、伊藤俊章、佐々木和弘、阿部和夫

3. 日程

9月28日

- ・ 救出した被災文化財のクリーニング
- ・ 小々汐地区・尾形家における被災文化財の救出活動
- ・ クリーニング済みの被災文化財のリスト化作業

9月29日

- ・ 救出した被災文化財のクリーニング
- ・ 小々汐地区・尾形家における被災文化財の救出活動

9月30日

- ・ 救出した被災文化財のクリーニング
- ・ 被災文化財の移動先の検討と現地視察

4. 被災地の現況と活動の状況

満潮時の冠水状況が悪化し、冠水する範囲が拡大している。今回の場合、午後に冠水する地域が大きくなり、現場に到達できない状況が続いた。現在のところ、午前中に小々汐地区での作業を行い、午後にはリアス・アーク美術館で作業するなど、作業スケジュールにも影響を与える状況になっている。

小々汐地区・尾形家のまわりでは瓦礫撤去が本格化し、道路沿いの瓦礫撤去のほかに谷の内部に入り込んでの瓦礫撤去も進んでいる。今後数週間のうちに瓦礫撤去は終了するようである。それにあわせて被災文化財の救出もできうる限り続ける必要がある。

5. 作業内容

(1) 小々汐地区・尾形家での被災文化財救出活動

ヘドロが溜まっていた集落の道路部分において、ヘドロを取り除きながら被災文化財を捜す作業を行った。集落の道路部分は前々回に報告したように、ヘドロが堆積し、そのヘドロのなかに被災文化財が埋まった状態になっていた。午後になると満潮になり海水が侵入し、潮が引いたあとも水たまり

になる場所であったために、埋まっていた被災文化財のほとんどが津波被害以降ずっと水に浸かった状態にあった。

今回の作業でヘドロの層から木製の札や仏壇でつかっていた器や盆などの生活用品、建具の一部などを見つけた。見つけたモノはご家族の了解を得て、リアス・アーク美術館に運んだ。

(2) クリーニング済みの被災文化財のリスト化作業

前回に引き続き、仏壇とそのまわりの部材をリスト化する作業を行った。また仏壇内にあった位牌については漆の剥離が進んでいることからクリーニングを先送りしていたが、泥を落とせる部分については泥落としを行い、保管が可能な状態にした。

(3) 救出した被災文化財のクリーニング

今回は着物類、紙の札類を中心に気仙沼市教育委員会の方々にお願いしてクリーニングをしていただいた。クリーニングを後回しにしていた着物類、紙類は傷みの激しいモノが多く、作業は細心の注意を要するモノが多くなっている。着物類、紙類のほか、小々汐地区から運び込んだ建具等もすぐにクリーニングしていただいた。



写真1. 旧月立小学校の外観



写真2. 被災文化財を保管する予定の室内の状況

(4) 保管場所の移動についての検討

リアス・アーク美術館の再開に伴う準備工事のため、これまで救出した被災文化財の保管場所を移動する必要があることは前回も述べた通りである。今回は教育委員会およびリアス・アーク美術館と協議して現場視察を行い宮城県気仙沼市塚沢の旧月立小学校に移動することに決まった [写真1, 2]。

6. 気づいた点

- 墨書きのものは長時間水に浸かるなど、極めて過酷な状況にあっても残りやすいことを改めて実感した。木札に書かれた墨書は震災から6ヶ月以上が経っているにもかかわらず十分判読可能であった。
- これまでの活動で瓦礫を仮置きしていた場所の下で泥に埋まった場所のなかに多少の被災文化財がまだ含まれている可能性があることがわかってきた。今後、可能な限り泥の層を取り除いて探す必要がある。

7. 今後の課題

救出した被災文化財の保管場所の移動に伴って、整理するための棚が必要となることが予想できる。教室に棚がないこともあり、今後、保管場所の環境を整えていくことが必要だろう。

8. 次回の予定

2011年10月5日～10月6日(2日間)

■活動内容

被災文化財の保管場所移動に伴う環境整備のための検討

小々汐地区・尾形家から救出した被災文化財のクリーニング

小々汐地区・尾形家における被災文化財の救出活動

【第23報】気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告

2011年10月7日

1. 活動日時

2011年10月5日～10月6日（2日間）

2. 参加メンバー

- ・国立歴史民俗博物館：加藤秀雄、葉山茂
- ・リアス・アーク美術館：川島秀一
- ・気仙沼市教育委員会：庄司さだ子、橋本和子、村上富士夫、伊藤俊章、佐々木和弘、阿部和夫

3. 日程

10月5日

- ・小々汐地区・尾形家の瓦礫撤去状況の確認と記録
- ・救出した被災文化財のクリーニング
- ・旧月立小中学校における被災文化財の取蔵環境整備作業
- ・旧月立小中学校へのクリーニング済みの被災文化財の一部移動作業

10月6日

- ・クリーニング済みの被災文化財のリスト化作業
- ・旧月立小中学校へのクリーニング済みの被災文化財の一部移動作業

4. 被災地の現況と活動の状況

小々汐地区では瓦礫撤去が一層進み、もともと水田だった場所など広い範囲の瓦礫撤去が行われている。集落の奥のほうにも重機が入っており、瓦礫撤去は2～3週間の間に終わるものと予想される。瓦礫撤去の過程で発見された尾形家住宅の部材は瓦礫撤去を担当する業者の方々が種類ごとに分別するなど、極めて丁寧な扱っていただいている。満潮によって道路が冠水する状態は先週にくらべると改善した。しかし海岸沿いの多くの場所で冠水する状況は変わっていない。今後、復興の過程で1mを超える盛土がされる予定の場所もあるとされている。

5. 作業内容

今回の作業は雨天だったこともあり、室内での作業が中心となった。また前報で報告したようにリアス・アーク美術館が再開に向けて工事を始めることになったこともあり、再開に向けた作業を行うためにも早期に移動することが求められており、今回は室内でのリスト化作業を優先した。

(1) 小々汐地区・尾形家の瓦礫撤去作業の確認と記録

瓦礫撤去の作業が進んでいる小々汐地区と尾形家住宅周辺の状況を確認した。一段と瓦礫撤去が進み谷の内部での撤去作業が進んでいる。今回は復興に向けた作業の様子を映像と写真で記録した。

(2) 救出した被災文化財のクリーニング

今回もクリーニングは気仙沼市教育委員会の方々をお願いして進めていただいた。泥落としの作業は1日目の作業でひと通り終了した。泥落としを終えたものの、しばらく置くと泥が浮き出てくるものがあるため、今後とも必要に応じて泥落としをしていくことが必要である。



リスト化の作業風景

(3) クリーニング済みの被災文化財のリスト化作業

月立小中学校にクリーニング済みの被災文化財を移動するにあたり、保管している被災文化財のリスト化を急ぐ必要があると判断し、リスト化作業を進めた。今回は被災文化財のクリーニングが一段落したこともあり、これまでクリーニングに使っていた場所をリスト化作業のために使えるようになった。そこで実際に部材の位置などを復元しながら、部材の有無を確認しながらリスト化を進めた。その結果、40点の部材の位置を確認することができた。今回の作業ではとくに土間の上がり框から囲炉裏にかけての部分を再現し、部材がほぼ揃っていることを確認することができた。

(4) 被災文化財の収蔵環境整備作業およびリスト化を終えた被災文化財の移動

テンパコに収納した被災文化財を中心に20箱ほどを移動した。前回の報告で述べたように旧月立小中学校には現在、棚などの収納用具がないため、今後資料をどのように収納していくかを検討するため、部屋を採寸してレイアウトの検討を行った。

6. 気づいた点

- 一度、きちんと泥落としを終えて泥のでない状況にもっていった被災文化財も時間を置くと再び泥が析出してくることが多い。
- 部材をリスト化する際はすでに部材がそろっていると思っていても、具体的に組み立てながら可視化して1点1点確認することが大切である。

7. 今後の課題

クリーニングの終わった被災文化財については、順次、月立小中学校に移動する予定である。被災文化財を移動する際に、多少大型の車を用意するなど、運搬をする体制を整える必要がある。同時に収納にあたってどのような収納道具が必要なのかを検討しておくことが必要となる。

8. 次回の予定

2011年10月12日～10月14日(3日間)

■活動内容

小々汐地区・尾形家から救出した被災文化財のクリーニング

小々汐地区の復興に向けた動向の記録

〔第 24 報〕気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告

2011 年 10 月 25 日

1. 活動日時

2011 年 10 月 12 日～10 月 14 日（3 日間）

2. 参加メンバー

- ・国立歴史民俗博物館：加藤秀雄、葉山茂
- ・リアス・アーク美術館：川島秀一
- ・気仙沼市教育委員会：幡野寛治、菊田寿美、藤本愛

3. 日程

10 月 12 日

- ・旧日立中学校へのクリーニング済みの被災文化財の一部移動作業
- ・クリーニング済みの被災文化財のリスト化作業

10 月 13 日

- ・小々汐集落・尾形家からの被災文化財の移動
- ・クリーニング済みの被災文化財のリスト化作業
- ・旧日立中学校へのクリーニング済みの被災文化財の一部移動作業

10 月 14 日

- ・クリーニング済みの被災文化財のリスト化作業

4. 被災地の現況と活動の状況

小々汐集落における瓦礫撤去作業は最終段階に入りつつある。尾形家の敷地付近を除いて瓦礫の山は小さくなり、集落のほぼ全体で瓦礫撤去作業が同時並行的に行われている。

鹿折地区から気仙沼港に通じる道路はこれまで地盤沈下によって海水が流れ込んで溜まる状況になっていたがおよそ 1 メートル程度、砂利で盛土をした上で舗装して開通した。この道は港と鹿折地区をつなぐ重要な道である。こうしたインフラの復旧が進む一方で、地盤沈下した地域ではまだ家屋の復旧などの目処は立っていない。

5. 作業内容

今回は被災文化財のリストを作成する作業とリスト化の終わった被災文化財を旧日立中学校への移動を中心に作業を進めた。また瓦礫撤去が最終局面にさしかかり、建具などが新たに瓦礫のなかから救出されたことから、建具を中心に被災文化財を小々汐地区からリアス・アーク美術館に運んだ。

(1) 小々汐地区・尾形家からの被災文化財の運搬

瓦礫撤去の際に集められた尾形家の部材のなかに建具など比較的大型で、かつ漆塗りや細かい細工

のある被災文化財が多くあったことから、管理のできる場所に運ぶことが必要との判断をした。運び先は旧月立中学校がもっともふさわしいと考えられるが、現在のところ水道施設など、クリーニングに適した環境が確保できないことから、リアス・アーク美術館の川島副館長と相談し、ひとまずリアス・アーク美術館に運び込んだ。



箱階段の部材のリスト化作業

(2) クリーニング済みの被災文化財のリスト化作業

今回は箱階段および囲炉裏のヒゲダナ、玄関横の納戸の格子部分の部材のリスト化をした。箱階段および囲炉裏のヒゲダナ、玄関横の納戸の格子部分の部材は、津波の被害を受けて細かく分解した状態になっている。

今回の作業でも前回とおなじように救出した被災文化財のなかから箱階段に関係ありそうな部材を探し出し、一点一点部材の箇所を確認した上で、大きなものから順番をつけた。その結果、箱階段で12点、ヒゲダナで10点、玄関横の納戸の格子で40点をリスト化した。リスト化の際はパソコンをつかって詳細な部材の記録も含めてデータを作成すると同時に一点一点にタグをつけた。同時に部材一点一点を写真に撮った。

(3) 被災文化財の収蔵環境整備作業およびリスト化を終えた被災文化財の移動

大型の箆筒・家具類合計14点を大型の車に載せて旧月立中学校に運んだ。旧月立中学校の二階への階段が一部狭くなっており、大型の被災文化財を運びこむ際に二階にあげられない被災文化財がある可能性があることがわかった。

6. 気づいた点

- 被災現場に集められた部材が非常に多く、そのなかにリアス・アーク美術館に運びこみながらすべて部材がそろっていないものの一部が混ざっている可能性が高い。
- リスト化の際は再び組立て直すことを考えて、位置が確実にわかるように一点一点を確認し、図を合わせて作成して全体像を把握しておくほうがのちの作業にとって効率的である。

7. 今後の課題

クリーニングの終わった被災文化財については、順次、月立中学校に移動する予定である。被災文化財を移動する際に、多少大型の車を用意するなど、運搬をする体制を整える必要がある。同時に収納にあたってどのような収納道具が必要なのかを検討しておくことが必要となる。

8. 次回の予定

2011年10月26日～10月28日(3日間)

■活動内容

小々汐地区・尾形家から救出した被災文化財の移動

小々汐地区の復興に向けた動向の記録

救出した被災文化財のリスト化作業

〔第 25 報〕気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告

2011 年 10 月 30 日

1. 活動日時

2011 年 10 月 26 日～10 月 28 日（3 日間）

2. 参加メンバー

- ・国立歴史民俗博物館：加藤秀雄、葉山茂
- ・リアス・アーク美術館：川島秀一
- ・気仙沼市教育委員会：幡野寛治、庄司さだ子、橋本和子、村上富士夫、伊藤俊章、佐々木和弘、阿部和夫

3. 日程

10 月 26 日

- ・旧月立中学校へのクリーニング済みの被災文化財の一部移動作業
- ・クリーニング済みの被災文化財のリスト化作業

10 月 27 日

- ・小々汐集落・尾形家からの被災文化財の移動
- ・クリーニング済みの被災文化財のリスト化作業
- ・旧月立中学校へのクリーニング済みの被災文化財の一部移動作業

10 月 28 日

- ・クリーニング済みの被災文化財のリスト化作業
- ・旧月立中学校へのクリーニング済みの被災文化財の一部移動作業

4. 被災地の現況と活動の状況

尾形家住宅の周辺の瓦礫撤去作業はいよいよ、最終局面に入った。瓦礫撤去を担当している業者は 10 月中にひとまず、瓦礫を撤去し終える予定でいる。ほとんどの瓦礫の撤去が撤去され、残すところは尾形家の屋根部材を積んでいる場所の周りのみである。

5. 作業内容

今回は被災した文化財のうち、瓦礫撤去の作業員の方々が集めてくださったもののなかから、細かい細工のある建具や塗のある板類などをリアス・アーク美術館に移動する作業をした。またリアス・アーク美術館に運び込んだ被災文化財をクリーニングする作業を気仙沼市教育委員会の方々にしていただいた。そのほかリスト化作業を進め、リスト化が進んだ資料から順次、旧月立中学校に移動した。

(1) 小々汐地区・尾形家からの被災文化財の運搬

前回に引き続き、洗浄につかうことのできる施設の関係から小々汐地区・尾形家から救出した塗り

物の板や建具、部材などの被災文化財はリアス・アーク美術館に運び込んだ。なお現場で運び残しの被災文化財を確認していたところ、尾形家住宅の母屋がもともとあった場所のヘドロのなかから、仏壇のご本尊を発見して、尾形さんに許可を頂いてリアス・アーク美術館におあづかりした [写真 1]。



写真 1. 救出された仏像

(2) 救出した被災文化財のクリーニング

クリーニングは今回も気仙沼市教育委員会の方々をお願いして進めていただいた。これまでに運んだものについてはひと通りクリーニングが終わったこともあり、今回救出した塗物の板や建具、部材の泥落としをお願いした。おもに泥落としを中心にして、塗物の被災文化財については水洗いを避けた。

(3) クリーニング済みの被災文化財のリスト化作業

クリーニング済みの被災文化財については、前回まで大物の部材について 1 点 1 点検証しながらリスト化作業を進めていたが、時間がかかること、枝番や整理の区分などに齟齬が出る人が多いことが分かったため、すべての資料 1 点 1 点に仮番号をつけて、ひとまず全体として何を救出したのかがわかるリストを作成することにした。

(4) 被災文化財の収蔵環境整備作業およびリスト化を終えた被災文化財の移動

大型の箆筒・家具類のほか、部材のなかで比較的小さなものを選んで、リスト化が終了したものから被災文化財を旧月立中学校に運んだ。またリアス・アーク美術館の作業スペースを確保するためにテンバコに収めた資料も運搬した。

6. 気づいた点

- ・ リスト化作業はある程度、分類のフレームを作成して分類していくことが効率的であると考えていたが、分類に困るものも多いため、とりあえず全体を把握する方法に切り替えた。全体を把握した上で、組み合わせを探し、分類方法を検討するほうが効率的である。
- ・ 一度で全てを完璧に網羅する仕事は難しいことがわかった。
- ・ 仏像の発見から、瓦礫撤去が終わったこと＝救出活動の終了にはならないことがわかった。

7. 今後の課題

救出した被災文化財のリスト化と旧月立中学校への移動を早急に進める。また旧月立中学校における整理用の棚の確保が急務である。

8. 次回の予定

2011 年 11 月 9 日～ 11 月 10 日 (2 日間)

■活動内容

小々汐地区・尾形家から救出した被災文化財の移動

救出した被災文化財のリスト化作業

【第26報】気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告

2011年11月15日

1. 活動日時

2011年11月9日～11月10日（2日間）

2. 参加メンバー

- ・ 国立歴史民俗博物館：加藤秀雄、葉山茂
- ・ リアス・アーク美術館：川島秀一
- ・ 気仙沼市教育委員会：幡野寛治、庄司さだ子、橋本和子、伊藤俊章、佐々木和弘、阿部和夫

3. 日程

11月9日

- ・ 旧月立中学校へのクリーニング済みの被災文化財の一部移動作業
- ・ クリーニング済みの被災文化財のリスト化作業

11月10日

- ・ 小々汐集落・尾形家からの被災文化財の移動
- ・ クリーニング済みの被災文化財のリスト化作業
- ・ 旧月立中学校へのクリーニング済みの被災文化財の一部移動作業

4. 被災地の現況と活動の状況

尾形家住宅のまわりの瓦礫撤去は10月末でひとまず終了した。ただし瓦礫撤去の方々が集めてくださった住宅の部材が公会堂の床面の上に残された状態になっており、公会堂の床面を剥いで撤去する作業が最後に残されており、部材の移動後に床面を撤去して瓦礫撤去は完了するとのことである。なお11月10日に小々汐地区を訪れた際、尾形家再生プロジェクトのメンバーが尾形家住宅の屋根部材を本来の尾形家の敷地に移動する作業をしていた。

5. 作業内容

(1) 旧月立中学校へのクリーニング済みの被災文化財の移動

雨戸や障子戸、板戸などの建具、大型のはしご段や仏壇の裏側の壁材などの大型の部材をリアス・アーク美術館から旧月立中学校に移動した。移動に際して、破片に至るまで全てに仮番号をつけ1点ずつ写真をつけてリスト化を進め、移動中の紛失が起きないように注意した。これまで大きく移動が難しかった被災文化財は、気仙沼市教育委員会のトラックを手配していただき移動することができた。

今回の作業では運搬を2回行った。積み込み・運搬・荷降ろしの一連の作業を行うのに平均3時間がかかった。

(2) 『古文書返却の旅』に書かれた文書の一部を発見

11月10日に小々汐地区を訪れた際、尾形家再生プロジェクトメンバーによる尾形家住宅の屋根部材の移動作業とともに、気仙沼市農業復興委員の方々が小々汐地区の水田清掃をされていた。委員の方々が水田の細かな瓦礫を拾い集める作業をするなかで、水田内から厚さ5センチ程度の整理された古文書の束を発見し届けてくださった〔写真1〕。



写真1. 発見された文書の束

おあづかりした文書は一点一点封筒に入っており封筒の記載内容、内容物ともに判読可能であったが、傷みが激しいことから川島リアス・アーク美術館副館長と相談の上、国立民族学博物館の日高慎吾さんに仲介していただき、冷凍乾燥処理をお願いした。

(3) 尾形家住宅の屋根部材の一部運搬

尾形家再生プロジェクトの依頼に基づいて、細かい細工が多い尾形家住宅の破風部分の部材を安全に保管することを目的としてリアス・アーク美術館に運んだ。加えて建具に関係すると部材を保管するためリアス・アーク美術館に運んだ。これらの部材については泥落としを中心にしたクリーニングをして保管する予定である。

(4) クリーニング済みの被災文化財のリスト化作業

仮リストの作成を気仙沼市教育委員会をお願いして続けていただいた。前回に引き続いて一点一点の名称、形状、状態、写真の記録をとりながら進めた。

6. 気づいた点

- 文書が水田の中から発見されたことで、津波によって堆積したヘドロの層には注意を向ける必要があることが改めて確認できた。こうしたヘドロに埋没した被災文化財はほかにもある可能性が高く、今後とも捜索を続けていくことが必要である。

7. 今後の課題

救出した被災文化財のリスト化と旧月立中学校への移動を進めることが必要である。

8. 次回の予定

2011年11月9日～11月10日（2日間）

■活動内容

小々汐地区・尾形家から救出した被災文化財の移動

救出した被災文化財のリスト化作業

【第 27 報】気仙沼市被災文化財等救出支援活動の報告

2011 年 11 月 28 日

1. 活動日時

2011 年 11 月 24 日～11 月 25 日（2 日間）

2. 参加メンバー

- ・国立歴史民俗博物館：加藤秀雄、葉山茂
- ・リアス・アーク美術館：川島秀一
- ・気仙沼市教育委員会：幡野寛治、庄司さだ子、橋本和子、伊藤俊章、佐々木和弘、阿部和夫

3. 日程

11 月 24 日

- ・旧月立中学校へのクリーニング済みの被災文化財の一部移動作業
- ・クリーニング済みの被災文化財のリスト化作業

11 月 25 日

- ・旧月立中学校へのクリーニング済みの被災文化財の一部移動作業
- ・クリーニング済みの被災文化財のリスト化作業

4. 被災地の現況と活動の状況

リアス・アーク美術館の再開に関わる館内工事の必要にともなって、リアス・アーク美術館に仮収容していた被災文化財を移動することが急務になっている。これまでリアス・アーク美術館の好意で尾形家や気仙沼市の港湾施設エースポートの民具展示場から救出した被災文化財、文化財救済委員会が岩井崎プロムナードセンターから運び込んだ被災文化財などを仮収容させていただいていた。これらは今後、気仙沼市教育委員会と相談の上、旧月立中学校に移動して管理することになっており、早急に移動する必要がある。

5. 作業内容

(1) 旧月立中学校へのクリーニング済みの被災文化財の移動

今回の作業では 2 回にわけて、リアス・アーク美術館に保管していた被災文化財を旧月立中学校に運んだ。1 回目の作業では箱階段などの大型であるものの、分解してしまっている被災文化財を中心に運んだ。これらの被災文化財は運ぶ途中でさらに壊れる可能性があったため、一度に多くを運ぶのではなく、なるべく平置きにして毛布などで固定して運んだ。2 回目の移動作業では石臼や建具などを運んだ。

(2) 被災文化財の保管状態についての調査

気仙沼市小々汐集落・尾形家から収集した被災文化財について、現状で緊急に修復や安定環境に移

動すべきものがあるかどうかについてチェックをした。すでに尾形家から救出した被災文化財については泥落としを中心にした一次洗浄は終了しているが、被災文化財のなかには木製品も多く、燻蒸や修復を必要とするものも多くある。

こうしたものを今後どのように扱うのかについて可能性を探る目的で、現状、次の段階の処置が早急に必要なるものを調べる作業を行った。

大型の木製品については、制作年代が古いこともあり、一部に修理・気温や湿度が安定した場所での保管が必要なものが見られた。具体的にどのようにしていくかについては尾形家の被災文化財の救出活動に直接的に関係している国立歴史民俗博物館、リアス・アーク美術館、気仙沼市教育委員会と協力しながら、検討していく必要がある。



写真1. 資料移動のための状態チェック作業

(3) リスト化作業

救出した被災文化財の一点一点について仮の通し番号をつけ、写真による記録と形状・状態の記録を行った。今回から法量についても記録をするようにした。リスト化の作業は気仙沼市教育委員会の方が進めてくださっている。

6. 気づいた点

- 移動の途中で、クリーニングした被災文化財の表面から泥が浮き出てくる場合も多い。こうしたことを考えると今後もカビが発生する可能性は十分にあり、注意が必要である。
- 燻蒸などの作業も今後必要になると思われるが、近隣に住宅があるなど、簡易の燻蒸を行うことも難しいと予想される。今後とも、保管環境の整備についてはリアス・アーク美術館や気仙沼市教育委員会と協力して、対策を考えていく必要がある。

7. 今後の課題

11月24日、被災文化財等救援委員会から整理用の棚が到着した。これまで多くの被災文化財が平置きで保管されていたため、今後、テンバコを活用しながら救出した被災文化財を整理していく必要がある。

8. 次回の予定

2011年12月1日～12月2日(2日間)

■活動内容

小々汐地区・尾形家から救出した被災文化財の移動

救出した被災文化財のリスト化作業

物質文化を救う意味
—気仙沼市小々汐の現場から—

編集・発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館©
〒 285-8502 千葉県佐倉市城内町 117
TEL 043-486-0123 (代表)

印刷・製本 株式会社弘文社 2019年3月29日